僕と翔子はＦクラス

駄文炸裂

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あなたは不幸にもこの駄文小説を開いてしまいました。が、今ならまだ間に合います。至急ブラウザバックをして身の安全をお確かめください。気分が悪くなった方はすぐに部屋の換気を行い、大声で助けを求めましょう。

それでも気分がすぐれない方はこのツボを買えば幸せになります。たったの１００万円でこの先の人生はバラ色！ぜひお買い求め下さい！（効果には個人差があります）

※この小説は以前、にじファンに投稿していたものです。色々修正はしていますが、明久×翔子、ラグナ×レイチェルなのは変わってません。

～注意事項～
・明久チート化↑重要
・オリキャラ出ます
・筆者は準一級駄文創作家（国家資格）
・原作はいなくなった。もう、戻ってこないんだ・・・
・誤字は親友
・亀更新
・毎回のように存在する東方ネタ
・筆者はブロンティスト
以上の項目を見て少しでも不快に感じた方はブラウザバックをお勧めします。
「大丈夫だ、問題ない」「私は一向に構わん！」とおっしゃって下さる皆様・・・
ゆっくりしていってね！

目次

プロローグ：個人的には春より秋が好きです ―― 1
1話：夢を見ずに現実を見ろってばっちゃが言ってた ―― 9
2話：自己紹介は大抵時間通りには終わらない ―― 17
3話：失敗自体は恥ずかしくないって聞くけどやっぱり恥ずかしい ―― 28
4話：真面目な秀才キャラは2番手になることが多い ―― 36
5話：軍隊では先にムチ、後にアメらしい ―― 47
登場人物紹介 ―― 63
6話：正論は口に苦し ―― 74
7話：雄二様は本当に頭の良いお方 81
8話：素晴らしきかな、一致団結 93
9話：第一印象は大事なもの ―― 103
10話：普段優しい人が怒るとマジで怖い ―― 121
11話：メリハリはきちんとつけましょう ―― 132
12話：世の中下には下がある ― 146
13話：みんなで渡れば怖くない

捕捉：試験召喚戦争事項 ――― 155
１４話：大声出しときゃ士気は上がる 169
１５話：その一秒は金より重し ― 180
１６話：壁に耳あり障子に目あり 192
１７話：奇襲は大抵失敗する ―― 201
１８話：アイエエエ！ダイヒョウ!?ダイヒョウナンデ!? ――― 211
１９話：切り札は最後まで取っておくべきそうするべき ――― 220
２０話：チートってレベルじゃねえぞ！ ――― 233
２１話：敗軍の将にも優しく接するのが大人の醍醐味 ――― 244
閑話：島田美波の場合～その１～ 254
２２話：一戦去って、また一戦 ― 262
２３話：事前の準備って大事ですよね 269
２４話：別に全滅させてしまっても構わんのだろう？ ――― 279
２５話：敵を騙すにはまず味方から 291
２６話：唐突な考察は負けフラグ

２７話：慢心、ダメ、絶対 ――― 301
２８話：映画とかで最前線に出る指揮官とかよく見るけどあれ危険じゃね？ 308
２９話：投稿開始日から６年経ってようやく登場するオリキャラがいるらしい 318
３０話：明日やろうは馬鹿野郎 ― 325
３１話：敗北フラグその１『序盤戦で有利になる』 ――― 341
３２話：戦闘描写が上手く書けないのはどう考えても地球が悪い ――― 350
360

プロローグ：個人的には春より秋が好きです

4月。冬という長い眠りから目覚めた自然が、誰にも邪魔されることなく太陽の光を浴びることができる季節。桜の木が長い一本道に並び、咲き乱れるその景色は、植物よりは季節の変わり目を感じにくい人間にも『春』が来たことを知らせている。

その桜道を歩く二人がいた。

（こんなにこの道は綺麗だったんだなあ）

辺りを見回しながら茶髪の少年は、春が魅せる景色に陶酔していた。去年も通っている道、しかしその時は入学したてのころで、景色などを楽しむ暇はなかった。新しい学園生活に、初めての1人暮らしとなってはそんな余裕を持てる方がおかしい。

だが、さすがに2年目となれば緊張などとは無縁である。

（・・・まあ、試験の結果がまだ分からなかったりすれば少しくらいはドキドキしていたのかもなぁ～）

クスリ、と苦笑いが漏れる。

「・・・明久、どうしたの？」

ふっ・・・と横から声がかかった。そちらを見れば、少女・・・いや、僕の最愛の女（ひと）が僕を見つめていた。黒髪をなびかせて歩く姿は大和撫子を連想させる。一見無表情に見える表情だが、さっきの僕の行動を心配しているのが伝わってくる。

「何でもないよ、ちょっと思い出し笑いしちゃっただけ」

「・・・なら、いいけど・・・何かあったらすぐに言って」

「りょーかい」

再びクスリと笑みが漏れた。彼女はいつも過剰なまでに僕のことを気遣ってくれる。だが、心配性だなあ・・・なんては言えない。実際迷惑をかけているわけで。

いや、うん・・・ちょっとね、財布に野口さんすらいない時に昼食の弁当お願いすることが多々ありまして・・・本格的に残金がヤバいって時に限って欲しい新作ゲームが発売しちゃうんだよねぇ。はいすみません、１００％僕が悪いです。

「・・・明久」
「ん？」
「・・・見えてきた」

自虐しているところに恋人の言葉。顔を上げると、坂道の先にある見慣れた建物が見えてきた。春休みは半月ほどだったのだが、気持ち的にはもっと見ていなかったというか、妙に懐かしく感じている自分がいた。

文月学園

そこは僕らがあと二年間は過ごす校舎の名前である。

「おはよう・・・おお、お前らか」

坂道を登り切った僕らに声をかけてきた人物がいた。去年は、他の生徒と比べると倍以上聞いた、聞き覚えのある声である（主に生徒指導室や補習室で）。

「おはようございます、鉄人」
「・・・おはようございます、西村先生」
「ああおはよう。明久、何度も言っているがその呼び方はやめろ」
「いやぁ、自分でもやめたいと思っているんですけどねぇ・・・」

ちらっと声の主に目を向ける。自分より頭一つ分以上大きな背、今は近くにいるが、遠くから見てもはっきりわかるであろう筋肉の付き具合、立派な角刈り。とどめに趣味はトライアスロン。

「ここまでそろっているんです。鉄人と呼ばずしてなんと呼ぶんですか!?」
「そうか、歯食い縛れ」
「ごめんなさい」

芝居がかった叫び声を出した次の瞬間には土下座をしていた。鉄人は有言実行の人物であると身をもって知っている。

「・・・はぁ。勉強はできるようになってもそういう場所は変わらんなあ」
「そういう性格ですんで」
「まあ、いい。ほら、お前らの分だ」
「お、準備がいいですね鉄人」

土下座を解いた後に鉄人から茶色の封筒を2封が渡された。表面には「クラス通知表」という字が存在感を示すようにでかでかと書かれており、裏面に名前が書かれていた。

一つは自分の名前である「吉井明久」、そしてもう一つは・・・

「はい、こっちが『翔子』の封筒ね」
「・・・ありがとう、明久」

名前を呼んだ恋人・・・翔子は、はにかむような笑顔を見せた後、早速封筒を開ける作業に入った。つられるように自分も開封に着手する。

「しっかし、鉄人。このクラス分け発表って毎年こんなめんどくさい方法とっているんですか?こう、電光掲示板とかでパパッとやったほうが早いと思うんですが」

「そんなことは百も承知だ。が、この学校の方針でな。個人情報が関係していることもあり、去年からこのような形になった次第だ」

「・・・お疲れ様です」

「それはまた大変なことで」

去年とはずいぶん最近な話である。そういえば、この学校・・『文月学園』は複数のスポンサーの援助で成り立っているとも聞く。その方面からプライバシー関連の注意が来たとかそんなことがあったのかもしれない。まぁ、生徒個人にとってはどうでもいい話である。そんな難しいことよりも今日の昼食について考えるほうが自分らしい。

そうこうしている内に封筒を開け(破ったともいう。翔子のように丁寧にのりをはがす選択肢なんてとっくの昔に幻想入りしている)、紙を取り出した。一応確認はしてみたが、紙には予想通りのアルファベット・・『F』の文字が書かれてあった。

「今回のことに関してはお前らしいというべきだろうな」
「当然ですよ。翔子より大事なものはありませんので」
「・・・／／／」
「のろけるなら余所でやれ。まぁ、クラスがクラスだが、お前たちには他の生徒の模範になることを期待しているぞ」
「生憎、そんなガラじゃありませんよ、自由気ままがモットーですからね」

それじゃまた後で、といいながら僕は左手を翔子に差し出した。その手が温もりを受けたことを感じながら、一歩ずつ、文月学園に近づいて行った。

4月、それは始まりの季節である。

1話：夢を見ずに現実を見ろってばっちゃが言ってた

人間、絶望の境地にたどり着くとどうなってしまうのか、疑問に思ったことはないだろうか？逃れなりない悪夢に憑りつかれたときどうなってしまうのか考えたことはないだろうか？

今思えば、僕はその答えを幼少のころに学んでいたのである。

「俺の・・・小遣い・・・俺の・・・自由が・・・うふ・・・うふふ・・・うふふふふふ・・・」

某魔法使いの黒歴史を彷彿とさせる乾いた笑いを聞いてしまったのは幼き頃のトラウマの一つである。いつものように父さんと一緒に寝ようとして父さんの部屋に向かったのだが、小さく開いていたドアの隙間からその台詞が漏れてきたのだ。

普段は聞いたことのない父さんの声。すぐに飛び込んで「どうしたのっ!?」とするべ

きだったのに、それが出来なかった。部屋に入ってはいけないような気がした。音を立てないように近づき、恐る恐る隙間から部屋を覗いてみた。

「アハハハハ・・・来月からなーんにも無し♪仕事、仕事、雨、仕事♪」

部屋の真ん中でぶつぶつ言葉を漏らしながらくるくる回っている父さんの姿がそこにあった。時々ちらっと見える目は光を失っており、全身から灰色のオーラが出ていた。

僕はそっと部屋から離れた。むちゃくちゃ怖いものがあった。何かは知らないが、知ってしまってはいけないことがあった。僕は生まれて初めて、自分の意思で一人で寝た。

翌朝、こっそり母さんに昨日のことを話したところ、「明ちゃんは何も気にしないでいいのよ」とまぶしい笑顔で言われたため、それ以降は何も聞かないことにした。

ちなみに、もう父さんと寝るのは嫌だ、一人で寝たい、とも言ったら何故か毎晩姉さ

んと寝ることになった。

・・・そんな十年ほど前の思い出を今さら語ってどうする?という質問にはこう答えよう。「今、この瞬間、あの乾いた笑いに秘められた感情が分かったからだ」、と・・・

「・・・」
「・・・」
「・・・は、ははは・・・翔子、Fクラスって、どこだっけ?」
「・・・・・・・目の前」
「・・・・・・・・マジ?」
「・・・・・・・・(コクッ)」

文月学園旧校舎2階。ここは山奥の廃墟でしょうか?と聞かれたら一も二もなく頷いてしまいそうな現実が目の前にあった。

文月学園の一学年は3月の初めに『振り分け試験』と呼ばれる試験を2日間かけて行う。一教科一時間で難易度はあまり高くないが、それまでの１００点満点の試験とは違い、一時間どころか一日かけても終わるかどうかわからない程の量の問題を渡され、制限時間の限り解くことになる。

入学当初から勉学に励んでいる者は天井知らずといった感じで問題を解いていき、勉強していないものは十数問といて止まってしまう、という光景がどの教室でも起きていた。

それを全教科で行い、その総合点数によって二年次のクラスを振り分ける。一学年の総数は３００人、クラスはA、B、C、D、E、F、の6クラスのため一クラスに５０人が入ることになる。

・・・ここまでなら大なり小なり他の学校でも似たようなことをしているだろう。が、文月学園のクラス分けにはもう一つ、特徴的なことがある。

『設備の充実の差』である。「努力をしたものとしていないものが同じ環境で過ごせるのはおかしい」というＢＢＡ・・・学園長の方針の元それぞれのクラス設備には大きな差がついている。

一番充実しているのはもちろん最上位のＡクラスである。教室の正面には黒板ではなくスクリーンが埋め込まれており、天井はスイッチ一つで開閉できるようになっている。生徒の座る席はリクライニングシート（要望があればマッサージチェアに変えることも可能）、机には個人用のＰＣ、エアコンが配備されている。また、教室の後方には菓子類やドリンクバーが置いてあり授業中以外であれば、自由にとって飲食することが可能である（全て無料で）。

一ランク下のＢクラスはエアコンが個人用から教室用に変わりＰＣもないが、リクライニングシートはついており、全国基準であれば上位に位置するほどの充実ぶりであることは間違いない。

Ｃクラスとなれば一般的なイメージの教室となり、Ｄクラスからはエアコンが扇風機＋小柄なストーブに変わる。Ｅクラスは使い古された机、椅子を使うことになり、個人ロッカーが無いため廊下に雑魚掛けすることになる。

・・・さて、残るはＦクラスである。一つ上のクラスでさえ中古より二、三歩ジャンク方向に足を踏み込んだ備品が使われているのだ。Ｆクラスには既にガタがきている不良品が回されている、と考えるのが妥当だろう。

が、現実とは想像より良くなることは少なく、想像以上に悪くなることはよくあるものなのだ。

二人の眼前に広がっていたのはのオンボロちゃぶ台５０卓と一目見ただけで綿が詰まっていないことがわかる座布団５０枚だった。

黒板には無数の傷があり「え、これ書いた字が読み取れんの？」と言いたくなるような惨状になっている。

窓ガラスに関してはご丁寧にひび割れのオンパレード。「ここで銃撃戦でもあったのでしょうか？」と聞かれたら頷く自信がある。時々感じる隙間風は換気のためだと信じたい。

床は畳が敷き詰められていた。なんだ普通じゃん、と一瞬思った人、あちこち変色している畳を見て同じことが言えますか？

とどめの照明は電球二つである。まだついてはいないが、スイッチを入れたところで教室全体に及ぼす影響はたかが知れている。

そんな素敵設備が堂々と目の前に君臨していた。

「・・・・・・は・・・・・・ハハッ♪」

「・・・明久、その笑い方は危ない」

無意識に出た笑い声はあるキャラに似ていたが、自分がいる場所は夢の国の対極にある、現実という所だった。

2話：自己紹介は大抵時間通りには終わらない

「えー、ではこれからＨＲを始めます。私がＦクラス担任の福原です。今年一年よろしくお願いします」

なにかと締まりのない声が教卓上から響いてきた。眼鏡をかけ、いかにも真面目そうな姿にもかかわらず、厳しさオーラを感じない。よく言えば親しみやすい、悪く言えばなめられそうな人物だった。

てっきり、最低クラスには鉄人や高橋女史（2年クラスの学年主任も兼任している）といった厳しい教師が担任をすると思ったが、違ったようである。

「皆さんにはちゃぶ台、座布団が支給されているはずです。Ｆクラスでは、それ以外の物は原則自分たちで調達することになっています。ただし、最初に渡した用紙に記載されている物は、抜き打ち検査の時に即没収の対象となりますので、注意してください。今までのことで何か質問はありますか？」

「先生、エロ本はここに書いていないんですが、持ってきていいんですか?」
「記載されていない物に関しての判定は、検査を実施する教員に一任されます」
「おおおおお!で、その先生とは誰ですか!?」
「西村教員です」
「「「「馬鹿なあああああああああああああ!!!!!」」」」

Fクラスに紳士たちの雄叫びが響き渡った。文月学園の守護者である鉄人直々の検査ともなれば勉強関連以外の物の没収は確定的に明らか。鉄人の怒りが有頂天となり、憐れ聖典（エロ本）は裏世界でひっそりと幕を閉じることとなる。

密かに自分も悔しく感じたことは、翔子には絶対に知られてはいけない秘密である。

「はいはい、静かにしてください。そろそろ自己紹介をしましょう。廊下側の人からどうぞ」

残酷な宣告後、結構な時間をおいて喧噪が収まり、自己紹介が始まった。

ＨＲ２０分前、ようやく正気に戻った明久はとりあえず真ん中の一番後ろの席に陣取った（翔子はその隣）。その後、人がいないのをいいことに自分と翔子の座布団とちゃぶ台を、よりマトモそうなものと取り替えた。そこ、卑怯とか言わないで。

ＨＲ５分前、足音が近づいてきた。ようやく他の生徒も来たか、とドアのほうを見ると、「おはようございます。おや、まだ二人だけですか」と言いながら眼鏡のおじさん（福原先生）が入ってきて、黒板の周辺を確認し始めた。

挨拶を返し、じっとその行動を見守っていると、眼鏡のおじさんは何かを手に取り、安心したのかほっと息を吐いていた。目を凝らすとそれが短いチョークであることが見て取れた。

なんでチョークをもって安心しているんだろう?と考えた。のちにチョークすら不足していることを知ることになるのだが、それは別の話である。

結局生徒は2，3分前になってからどたどたと教室に入ってきた。が、一気に大勢来たためか、知り合いがいるかどうか確認することができなかった。まあ、自己紹介で確

認すればいいだけの話だ。

その自己紹介が始まり、一人目が立った。・・・あれ?あの髪型って・・・

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。皆の者、これからよろしく頼むぞ」
「秀吉、秀吉じゃないか!」
「ん?・・・あ、明久!?」

見たことのある後姿がくるっと周り、秀吉が驚愕の表情と共にこちらを見た。

「な、なぜおぬしがこのクラスにいるのじゃ!?」
「・・・え?もしかして、僕と同じクラスになるの嫌だったの・・・?」
「だ、誰もそんなこと言うておらんに!」
「そんな・・・ずっと親友だと思ってたのに・・・ウウッ・・・」
「・・・秀吉、許さない」
「き、霧島!?おぬしも何故・・・い、いや、さっきのは誤解じゃ!そういう意味ではな

く・・・」
「はいはい、私語は自己紹介を済ませてからにしてくださいね」
「はーい、すみませんでした。茶番に付き合ってくれてありがとうね秀吉」
「へ？」

先生に注意されたため、泣き真似を止めた。秀吉はポカンとしたが、僕の言葉の意味を理解すると一つため息をつき、席に着いた。

今の人物は羽ｂ・・・豊ｔ・・・木下秀吉、一年次からの親友である。特徴としてはしゃべり方とその容姿があげられる。

さっきのジジくさいしゃべり方は一年前と何にも変わっていない。いや、僕が秀吉を知った時には件の口調だったため、少なくとも一年以上は変わっていないと言ったほうがいいかもしれない。大河ドラマや時代劇が好きだとは言っていなかったが、それらから何か影響を受けていることは確かだろう。

もう一つ、容姿の件についてだが・・・

「美少女」だ。

いや、秀吉って名前だから男子だろ。・・・って思う人よ、確かに秀吉はれっきとした男だ。だが、顔を見たらもう一度その台詞は言えないだろう。

例えるなら可愛さに性格補正＋努力値極振りした１３０族（翔子はツボツボもびっくりの２５０族）だろうか。

セミロング＋オカッパ（？）のような髪型も彼の魅力を増大させているといっていい。

あと、去年初対面の秀吉と会話をして、３０分弱のうちに恋と失恋を経験した事実は墓まで持っていこうと決めている。女と勘違いしたっていいじゃないか、人間だもの。

「はい、木下さんありがとうございます」

「せ、先生。できればさんではなく君を付けて欲しいのじゃが・・・」

「それでは次の人お願いします」

最後に秀吉が何か言っていたようだが気にしない。さっさと、その後ろに座る人物に目を移した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「・・・次の人？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いや、カメラいじってないで自己紹介をしてください」

「・・・（スクッ）・・・土屋康太・・・（スチャ）・・・」

「・・・・・・・そ、それだけですか？」

「・・・・・・・・（コクッ）・・・」

「そ、そうですか。」

で、では次の人、と言う先生の声を聞きながら、未だにカメラをいじっている人物を

見つめた。随分とひどい自己紹介だったが、あれが彼のデフォだ。秀吉同様短くない付き合いなので、それくらいは理解できる。

土屋康太、彼には随分とお世話になっている。自分よりも小柄だが、毎日体を鍛えているようで、身体能力では全く敵わない。部活に所属していないにも関わらず体力テストで学年トップクラスと言えばその凄さが伝わるだろうか？加えてカメラ（デジタルや使い捨てでなく本格的な一眼レフカメラ）の扱いにも長けている。この二つを使い、あることをしているのだが・・・

・・・・・本人の名誉のために伏せておく。今はクラスメートの顔と名前を一致させる時間だ。

「・・・です。よろしく」
「はい、次の人お願いします」

自己紹介が始まって、約１０分。全体の３分の１ほどが終わっただろうか。康太以降

は名前と顔が一致しない人（要するに初見）ばかりで、記憶の作業に時間の大半を取られた。

　このまま自分まで来るかと思ったが、そうはいかなかった。席を立った人物に見覚えがあった、いやありすぎた。

「島田美波です。趣味は・・・特にありません。よろしくお願いします」

「あ・・・し、島田さん・・・」

　長髪をポニーテールでまとめた女子・・・、島田美波は僕のつぶやいた声に反応し、ちらっとこちらを見た。

　が、文字通り一瞬で向き直り座布団に座った。

　彼女、島田美波とは間違いなく友達であった。今も、「あいつとはどんな関係だ?」と質問されたら迷いなく「友達だ」と答えるだろう。

　が、島田さんに同じ質問をしたらどんな答えが出るか分からない。

　1年の前学期、知り合った頃は毎日のように話しかけられた。中学校まで外国育ちの彼女は日本語一つ話すにも四苦八苦していたが、身振り手振りで補いながら全身で言葉

を表現していた。僕自身、島田さんとの会話は楽しかった。

それが、半年前から少なくなっていった。話を振られる回数が徐々に、しかし確実に減っていったのだ。喧嘩といった原因があれば話が早いのだが、それもなかった。冬休みが明けてからは両手で数え足りるほどにまで減った。それも大半はこちらから話しかけたものだ。いずれも会話は長く続かなかった。

「島田さん、その・・・僕、何か悪いことといちゃった、かな?」

雪が降り積もる2月、思い切って言葉をぶつけた。もし自分に原因があるなら最悪な質問の仕方だが、他の言い方が思い浮かばなかった。

「あ・・・ううん、違うの・・・。ごめんね、これはウチの所為なの・・・ごめん」

島田さんは今まで聞いたことがないような小声でつぶやくと、すぐにその場を去った。後を追うことはとても出来なかった。

それ以来は会話を交わせず、現在に至る。話しかけるとき、顔を顰められたりはされ

ていないため、嫌われた訳では無いと思う、いや、思いたい。
正直、会話がなくなって心の中に小さな穴が開いた気がする。まだ一年足らずだが、彼女との会話は間違いなく、自分の学校生活の一部になっていたのだ。だが・・・

（さっきの反応見る限り嫌っているのかなぁ、僕のこと・・・。）

笑顔を返されれば違う結論に辿りついたかもしれないが、どんどん悪いほうに考えが言ってしまう。
機会を見てもう一度話しかけよう、と考えがまとまるころには自己紹介の順番がすぐ目の前まで迫ってきていた。

3話：失敗自体は恥ずかしくないって聞くけどやっぱり恥ずかしい

どうしてこうなった。

殺気がブレンドされた視線が全方位から（最後列だが、後ろの壁で反射して）突き刺さっている。針のむしろという言葉を嫌でも実感できた。

ちらっと翔子を見る。ものすごく申し訳なさそうな顔をされた。

ちらっと先生を見る。こっちすら向いていなかった。

ふと目を落とすと無意識に握りしめていた手が映った。ゆっくり開くと、手の平に冷や汗がびっしりと付着していた。

その事件は翔子の番に起こった。

「次の人、お願いします」

「・・・はい」

・・・ざわっ・・・!!

翔子が立つと同時に、教室がざわめいた。島田さん、・・・・・・・秀吉以来３人目の女子だから、という理由ではない。翔子は才色兼備として有名であるが、その彼女がＦクラスという事実に気が付いたからであろう。学年主席を狙える人物がここにいるとなれば誰だって驚くに決まっている。

・・・それより、２０人以上自己紹介をしてきて女子の数が片手で足りるってどういうことだってばよ。

「・・・霧島翔子です。これから一年間、よろしくお願いします。それと・・・」

小さくお辞儀をした翔子は一旦言葉を切ると、座らずにあたりを見渡した。その行為をじっと見ていると、

「・・・・・・明久を傷つけたら、消す」

・・・なんか、すっごく低い声が聞こえた。声質的には女子の声だったが、バス、テノールの方々顔負けの、腹に響く声だった。

悲しいことに、僕はこの声を何度も聞いたことがある。最近の例を挙げれば、半月前、ベットの床の下のカーペットの裏側に隠していた成人への片道切符が見つかった時だろうか。あの時は毘沙門天を背中に見ながら半日聞かされた。今度見つかったらスサノオを見る羽目になるかもしれないのでより厳重な場所に隠した。神々を身に降ろせる人物なんてよっちゃんだけでいい。

「「「「イ、イエスマム！」」」」

翔子を捉えていた視線を前に移すと、９割方の男子の直立不動で敬礼をしていた。分かるよ、その気持ち。あの声には逆らえないもんね。あと康太、そろそろメンテナンス終わってもいいんじゃない？

「はい、ありがとうございました。仲睦まじいですね」

先生の発言にぽっ、と顔を赤く染めた翔子はこっちを見ながら座った。先生、今の流れでよくそんな平和な言葉が出てきますね。合ってますけど。

にしても、今ので教室の温度が一気に下がったなぁ。そりゃあんなこと言われたらビビるしかないだろうけどね。

次に発表する人、僕の彼女がこんな空気にしてしまってすみません。彼女の美しさに免じて許してやってください（・ω<）てへぺろ

まさかの自分だったでゴザルの巻。

いや、許すけどさ、翔子は許すけどさ、この状況で発表しろと？

とりあえず立って「よ、吉井明久です」って言ったら空気が一転して殺気がバンバン飛んできたんだよ。『明久』が僕だって分かったからだろう。

何故自己紹介する前からクラスメートに敵愾心を持たれなければいけないのか。『2年になったら友達100人作ろう大作戦（ドンドンパフパフー）』が早くも崩れてしまいましたよ。たった今考えついた作戦だけどさ。

駄目だ、逃げても何も始まらない。ここはどうするべきか考えよう。

1・・・平凡な自己紹介をする。

2・・・空気を和ませる自己紹介をする。

1にしたい。何も考えないで1にしたい。僕の中の悪魔が1にしろと囁く。が、これをすると、この空気・・・殺気まみれかつ重い空気を変えることが出来ず次の人にバトンを渡すことになる。

2に挑戦した場合はどうなるだろうか。成功した場合は皆が笑って暮らせる世・・・じゃなかった、皆が笑って万事解決となるが、スキープレーヤーもびっくりのスベり方をしてしまった場合、渡すことになるバトンの重さが1の比ではなくなる。

どうする・・・。助けてくれ!ともう一度隣に顔を向けた。

翔子はさっきよりも申し訳なさそうな顔をして、そっぽを向いた。

島田さんはそもそもこっちすら向いていなかった。

・・・・・ええい！漢は度胸だ！女子供の手助けなんかいらぬ！平凡な結果に満足するよりは突撃して砕け散れ!!

すぅ・・・と息を吸う。その微かな音に皆の注目が集まる。その顔にできる限りの笑顔を作り、口を開いた。

「改めて、吉井明久です。気軽にダーリンって読んで下さい♪」

・・・・・

静まり返る教室。誰も口を開かない。カチッ・・・カチッ・・・と時計の音だけが耳に響く。

4月にしてはやけに教室の温度が低いが、ガラスが割れているせいだと信じ込み、静かに席に座った。

嗚呼、ごめんなさい、責任も何もない次の人。あなたには重すぎる業を背負わせてしまいました。願わくばあなたに幸あれ。

机に突っ伏し、精一杯の謝罪を心の中でしながら、僕は深い罪悪感に苛まれた。

・・・・・その音が聞こえるまでは。

『ガラッ!』

「お、遅れて・・・すみま、せん・・・」

「わりいな、寝過ごした」

「「「「・・・!?」」」」

前に座る人が立ち、何とか口を開こうとしたその時、教室のドアが開いた。

「ああ、やっと来ましたか。これからは遅刻をしないようにしてくださいね」
「は、はいっ、すみません！」
「善処はする」

2人分の声がした。先生が廊下側に向かって話しかけると、返答が来こえた。
途端にクラスがざわめいた。・・・翔子と同じような理由で。

「え、えっと・・・姫路瑞希です、よろしくおねがいしますっ」
「ん、自己紹介の時間か?・・・ま、いいか。ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジだ。これから1年間よろしくな」

入ってきた2人ラグナと瑞希・・・成績トップトラスにして才色兼備、共に僕の親友である。

4話：真面目な秀才キャラは2番手になることが多い

「あ～、すまん、質問だ」

予期せぬ人物の登場に教室がざわめいていたが、一人の生徒が声を発した。あの人は・・・須川君、だっけ?ついさっき自己紹介してた。

「Fクラスの須川だ。お2人さん、ここはAクラスじゃないんだが・・・」
「ああ、俺もFクラスだ」
「わ、私もです・・・」

2人の返答にまた、ざわめきが大きくなった。クラスを間違えた、というわけではないらしい。

「そうか、じゃあ改めてお2人さんと・・・霧島さんにも質問だ。なんでここに?」

須川君はラグナ、瑞希、翔子へと視線を移らせながら口を開いた。

「・・・当日に熱が出て、欠席した」

「私は、その・・・試験中に倒れてしまいまして・・・」

躊躇いながらも女子組が答えると、大半の生徒が納得した表情になった。

振り分け試験は原則として、再試験は行わない。身内の不幸に関してはさすがに配慮があるが、体調不良による欠席は、まず認められない。『体調管理も仕事のうち』とはよく言ったものだが、文月学園は特に顕著な気がする。

瑞希のことだ、勉強に気合を入れすぎて生活のリズムが崩れてしまったのだろう。何か一言忠告をしておけばよかったが、文字通り後の祭りだ。

・・・あれ、ということは、ラグナも？

一瞬そんな考えが浮かび、すぐに首を振った。ラグナは体の丈夫さを取り柄としており、見かけによらず、体調には人並み以上に気を使っている。そんな彼が大事な試験を前に体調を崩すはずがない。インフルエンザの場合は例外として再試験が認められるはずだし・・・

「ああ、名前書き忘れちまってな」

ラグナが答えると、大半の生徒が微妙な表情になった。

「よ、明久。今年もよろしくな」
「よかったです。明久君や翔子ちゃんがいて」
「よろしくね、ラグナ、瑞希。あとありがとう、あのタイミングで入ってきてくれて」
「どういうことですか？」
「こっちの話」

いや、マジで助かった。２人が来てくれなかったら冷蔵庫に入ったままの感覚で翔子に慰められ続けて惨めな思いになっていた所だった。

混乱が収まった今、僕、翔子、ラグナ、瑞希の４人で言葉を交えていた。自己紹介は続いているので、先生のありがたいお小言を貰わないよう極力小声で話している。え、自己紹介をまじめに聞いて顔を覚えるうんぬん?過去と今は違うのだよ。

「・・・驚いた。瑞希も同じような理由だったなんて」
「あはは・・・ちょっと張り切りすぎちゃいました」
「馬鹿は風邪ひかないっていうのにねー」
「ど、どういうことですか!?」
「そーゆーこと。にしてもラグナ、もっとマシな理由なかったの?」
「通学中に誰かを助けて遅くなったとか?んなメンドくせーことしねーよ。生憎、書き忘れたのは事実だ」
「なんだかんだで人助けが好きなくせに・・・」

大柄な体格、地毛である銀髪、赤と緑のオッドアイと中々に特徴的である人物・・ラグナ＝ｚ（ｒｙ）とは先の３人と同じく高校から知り合ったが、瑞希とは結構な付き合いになる。腐れ縁ともいうが、気の置けない親友ということは変わらない。

「でも、ほんと良かったよ。瑞希と一緒のクラスで」
「ふぇ!?あ、明久君、もしかして私のこと・・・」
「目の届かないとこに行くと何しでかすか分かったもんじゃないからね」
「・・・確かに」
「ま、そりゃ言えてるな」
「皆保護者ですか!?私そこまで子供じゃありませんよ!」

抑えながらも皆で楽しく話していたせいだろうか。

「・・・明久、姫路、翔子、ラグナか・・・」

教室の隅から出たその言葉が耳に入ることはなかった。

「久保利光だ。Aクラス次席として主席をサポートしていきたい。一年間よろしく頼む」

呼吸を継がず、一気に話した。パチパチパチ・・・と拍手を聞きながらリクライニングシートに座る。

何度見渡しても教室に見えない。中学校の修学旅行でホテルに泊まったことがあるが、豪華絢爛という意味ではこの部屋のほうがホテルより上に感じるから困る。充実した設備で一年間勉学に励むことが出来るのはそれ相応の努力をしてきたからであるが、いざ座ってみると、気後れな気持ちになることは否めない。

こっそりとため息をつき、配布された資料に目を移す。どの学校でも渡される『学生の心得』といった、注意事項がびっしりと書かれた紙だ。確認しなくてもいいのだが、活字があったら無意識に読んでしまうのは読書が好きだからか、ただの損な性分か。

「ねーねー、久保君？」
「・・・大声で話しかけないでくれ」

突然横から聞こえてきた声に眉をしかめた。字を読むのを邪魔されると不機嫌になってしまうあたり、やはり自分は前者なのかもしれない。

「ぶー、そんなに冷たくしないでよー。久保君と友達になりたいのにー」
「席が隣だから、というだけの理由でか？」
「うん♪」

単純な理由に軽い頭痛を覚えつつ、資料を伏せ、声の主を見た。緑色の髪を短くそろえている少女が屈託のない笑顔をしていた。ボーイッシュという言葉はこのような人物のためにあるのか、とどうでもいいことを思いつつ、言葉を続ける。

「さっきも言ったが、久保利光だ。好きなように読んでくれて構わない。君の名前は？」

「もー！ボク、久保君より早い順番で自己紹介したよ！」
「すまないな。聞いてなかった」
「もう・・・じゃあもう一回いうね♪工藤愛子、好きな食べ物はシュークリーム・・・」
「ああ、ありがとう」
「ちょ、ちょっと、まだ名前しか言ってないよ！」

これからがいいとこなのにー、と工藤さんが言っていたが、そう一度に覚えられるものではない。名前さえ覚えておけば、付き合っていくうちに趣味や好き嫌いは自然と覚えていくので、それで十分だ。

「ちょっとくらい興味持ってよー。うーん・・・そうだ！趣味はパンチラだよ♪」
「少し黙ろうか」

前言撤回、仲良くなることはないだろう。うるさい上に痴女の奴が隣だなんてどんな罰ゲームだ。次席特権で席を変えられないだろうか。

「愛子、その辺にしておきなさい」

工藤さんがはしゃいでいたら、新たな声が聞こえた。陽気な工藤さんとは正反対の、生真面目さを感じる、聞き覚えのある声だった。

「木下さん、この人と親友かい?だったら女性としての振る舞い方を教えてやってくれ」

「残念ながらそれは無理。愛子は最近転校してきたんだけど、初対面の時からこうだったからね」

工藤さんのさらに隣に、彼女、木下優子さんが座っていた。声の印象を裏切らない真面目な表情、皺一つ無い制服、正義感の強い性格・・・優等生という言葉がぴったりである。

去年知り合い、順位を競う仲だったが、やはり彼女もAクラスの座に座ったようだ。

「あなたに比べれば全然点数低いけどね・・・でも、今年は追いついて見せるわ」

「期待しないで待っておくよ」

「おお！激突する二つの才能！切磋琢磨を繰り返す2人の間にはいつのまにか火花ではなく赤い糸ガフッ!?」
「ちなみに愛子はこうすれば大人しくなるわ。どうしてもうるさかったら使ってね」
「ふむ、是非参考にさせていただくよ」

後頭部を押さえ悶絶する愛子から視線を外した優子は、再び口を開く。

「でも、意外ね。翔子や吉井君がFクラスになったから、てっきりあなたが主席だと思ったのに」
「僕もそうなれるように励んできたが、上には上がいるということだな」

木下さんの言葉に苦笑した。あの2人と同じクラスで勉学に励めないのは残念だが、そのおかげで繰り上がり、次席に座れることになったのは何とも皮肉な話だ。
このまま話を続けようとしたが、どうやら時間が来たみたいだ。

「では最後に、Aクラス主席の方から一言をお願いします」

高橋女史の声が聞こえたので、木下さんとの会話を止め、辺りを見渡した。それを終えると、腕を組み、目を閉じる。

（吉井君と霧島さんの2人がFクラスになったことは知っていたが・・・いない。ブラッドエッジさんと姫路さんの2人もこの教室にいない。いつも10番以内をキープしている2人のことだ。大幅にコケてBクラス、という可能性も薄い。・・・吉井君らと同じく、何らかの原因で0点扱い、Fクラスになったと考えるのが妥当だろう。その場合、Fクラス代表はどうするか・・・。分かり切っていることだ。その強力な武器、よほどの馬鹿じゃない限り、飾ったままなんてことはない）

じっと考える久保。もし一年間このクラスで過ごせるのであればここまで悩む必要はない。

『振り分け試験』で決められたクラス設備。それはノーリスクで一年間続くものではないのだ・・・。

5話：軍隊では先にムチ、後にアメらしい

「では、最後に代表の坂本君、こちらで一言お願いします」
「あぁ」

先生の言葉に反応した男子がゆっくりと教卓に向かって歩いて行った。代表、という言葉に反応したのか、まばらだった視線が一人の人物に集中する。

坂本こと、坂本雄二。今までたくさんの友人が出てきたが、付き合いの長さでいえば誰よりも、それこそ翔子よりも長いと断言できる人物だ。

おしゃべりが終わり、何気なく部屋を見渡した時に視界に入ったのだが、少し意外な気がした。去年の雄二の実力を見る限り上位クラスは無理でも、Dクラスくらいになら入れる力があったはずだ。

話しかけようとしたが、なにかぶつぶつ呟いていたため口を半開きにした所で言葉を飲み込んだ。試験に失敗したことを嘆いているのか・・・。いや、違う。雄二はそんな

ことでは悩まない。過去のことを引きずるくらいなら、そこら辺に捨てて前に行くタイプのはずである。それ以前に、試験という重要な場所でミスをする人物ではない。

だとすると・・・

（絶対何か企んでいるな）

この結論に達するまでそう時間はかからなかった。

（翔子、どう思う?）

（・・・雄二の自己紹介が、何もなしで終わることはなさそう）

（だよね）

翔子も雄二とは結構な付き合いだ。その翔子も予想しているあたり、無事には終わらなそうである。

（面倒くさいことじゃなければいいけどなー・・・まあ、無理か）

「坂本雄二だ。Ｆクラスの代表を務めることとなった」

そんなことを考えているうちに、雄二が教卓に立ち、口を開いた。赤に近い茶髪、高い身長からは活発なイメージを連想させる。が、実の所自分に負けず劣らず面倒くさがり屋だ。常時炬燵に入っているかのような行動範囲の狭さを持っている。が、動くときは動くため体は鍛えられているという。理不尽だ。

「俺もほとんどの奴とは初対面だが、坂本でも代表でも好きなように呼んでくれ」

・・・ほう、好きなように呼んでいいのか。なら、ここは一つ。

「よろしくね、ゴリｒ」

ドコォ!!

受けを狙って口に出した言葉を言い切る前に凄まじい風圧が頬をかすめていった。数峻遅れてけたたましい音がした。

ギギギギギ、と壊れたブリキのおもちゃのように後ろを振り返ると、シャーペンが煙を出しながら壁の奥深くまで突き刺さっていた。めり込んだ状態になっており、奇跡の救出劇は到底無理そうであった。

「久しぶりだな、明久。前に借りたシャーペン、返すの遅くなっちまった。すまねえな」

「そ、そう・・・。中々ダイナミックな返却方法だったね。でも、あの有様じゃあもう使えない、というより取り出せない気が・・・」

「そうか、ならこの新品のシャーペンを」

「あ、結構です」

再びシャーペンを構えた雄二を見て慌てて手を振った。誰が好き好んで二度もダーツも的になるものか。まっぴらごめんである。ダーツが許されるのはゲームセンター、バー、所〇ョージさんだけでいい。

「さ、あのバカはほっといて、皆に質問がある。この教室を見てくれ」

バカゆうな、と言いたいのをこらえて、雄二の言葉に従った。言い争ったところでかなわないのは分かってるし、シャーペン以上の凶器が飛んでこないとも限らない。

・・・残念ながら見渡したところで、初めて見たときと感想は変わらなかったが。

古びた設備、というだけなら別にかまわないが、古い＝汚いと方程式が成り立っているのがまずい。この教室そのものが不衛生なため換気をしても意味が無く、常にどんよりとした空気を感じる。ここで学校生活となると、体が丈夫でない人はすぐに参ってしまうだろう。

「皆、来る前にAクラスの設備は見てきたんじゃあないのか？個人エアコンにリクライニングシート、食べ放題に飲み放題・・・不満か？」

「「「「あたりまえじゃあああああ!!!」」」」

Fクラスが爆発した。そういっても大げさではない喚声が上がった。あまりの大きさにとっさに耳を塞いだが、キーンと耳鳴りがした。

「同じ学年、同じ学費だろ!?なんなんだよこの差は！」

「理不尽すぎる！クラス替えを要請する！」

「「「「そうだそうだ!!」」」」

出るわ出るわ、湯水の如く苦情が出てくる。もう少しボリュームを押さえてほしかったが、クラスの殆どが騒いでいる状況では何を言っても聞こえないだろう。おうふ・・・まだ耳鳴りがする。

クレームに参加していないのは秀吉、康太、島田さん、ラグナ、瑞希、翔子、あとは・・・須川君だっけ?あの人。それくらいしかいなかった。

秀吉や瑞希は皆を止めようとあたふたしているけど、効果はないみたいだ。このような場合は時間の経過か鉄人の召喚しか手がないのだが、そういったところで2人は聞き入れずに仲裁に入るはずだ。性分というやつだろう。得か損かは置いといて。

翔子や島田さん、須川君はじっとしているし、ラグナはニヤニヤしながら事の成り行きを見守っている。人生楽しそうでなによりだ。

ああ、康太。いい加減カメラのメンテ終わらせようか。

「・・・なるほど、分かった。お前らの意見はよーく分かった。」

そんな折、不意に発した雄二の一言。そんなに大きな声ではなかったが、不思議と、クラスのざわめきが小さくなっていった。なるほど、皆騒いでいたが、声を上げながらも雄二の、クラス代表の動きに注目していたのだろう。

「そんなお前らに、俺からの言葉がある。」

そういうと、彼は一つ、息を吸い込んだ。

さっきも言ったが雄二のことだ、平凡な自己紹介で終わらないとは感じた。現に、FクラスとAクラスの差を皆に意識させ、苦情を誘発させた。そこに何の意味があるのかをこれから解き明かしていくはずだ。ここで、「では自己紹介を終わります」なんて後腐れ満載なことはしない。

・・・とか何とか考えていたが、その予想は大方、外れることになった。雄二の考えは、思った以上に過激だったようだ。

「負け犬共が、わめくな」

教室に、鈍い声音が響いた。

『ガタッ!!!!』

誰かが立ち上がる音が聞こえた。教室の後ろだ。ピンクの髪を伸ばした女子・・・姫路がこちらに突っ込んで来ようとしたのを、明久が両肩を押さえて止めていた。姫路はそれでももがきながら前に来ようとしていたが、力の差がずいぶん離れていたようで、気持ちは前でも足は一歩も進まなかった。

明久が姫路を押さえながらこっちを見た。苦笑いの表情だった。やるなら先に教えてくれ、とでも言いたそうだな。悪い、ラグナほどじゃねーが俺も寝坊して余裕がなかったんだ。目覚まし時計が悪いんだ。目覚ましが。

もう少し姫路を頼む、とアイコンタクトして教室全体を見渡した。ポカンとしていた奴らも、徐々に俺の言葉が脳に染み込んできたみたいだ。何人かが、口をわなわなと震わせた。

・・・もう一言、これでどうだ。

「いいか、お前らがFクラスになったのは当然の結果だ。分相応って言葉を知っているか？お前らの努力の量がこの結果だ。自業自得なんだよ」

一気に話し、一息ついてクラスを見渡した。

・・・なるほどな。

・・・・・・これなら期待できそうだ。

「み―ずき、ほら、落ち着いて」

周りに聞こえないような小声で、未だ暴れる瑞希に囁く。瑞希は一度は収まったのだが、続いた雄二の暴言を聞き、再び突進をしようとしていた。

「あ、明久君は・・・何とも思わないんですかっ・・・」

肩を押さえられながらもこちらを向き、小声で、しかし、しっかり響く声をぶつけてきた。

「あの言い方は酷いですっ。クラスメートへの暴言にしか聞こえません！」

「ああ、それは・・・」

「それに・・・明久君がここにいるのを坂本君は知っているはずですっ。それを努力の

量だなんて・・・明久君への冒涜です！」

涙を浮かべながら喋る瑞希を見て、はぁーっと息を吐く。そういえば瑞希と雄二は僕を基準にした、友達の友達みたいな関係だった。雄二の言葉を鵜呑みにしてしまっても無理はない。

「瑞希、僕と雄二が何年親友やってると思ってるの？あれが本心じゃないことくらい分かるって。それに、周りを見てみて」

「周りを見てって・・・・・・・・・・・・え？」

あれだけのことをいったのだ。誰かが坂本君に詰め寄っているだろう・・・瑞希はそんなことを考えて見たはずだ。

クラスメートの殆どはバツが悪そうな顔で雄二から視線を外していた。

分相応に自業自得。言われてみればこれほどFクラスを象徴する言葉はない。振り分け試験が行われた時期は1年次の学年末であり、入学から10か月も先のテストだった。試験の存在は入学時に学園長から言われている。勉強する時間は十分すぎるほどにあった。

確かに、1年頑張っただけでは、幼少のころから勉学に励んだ者より優秀になれないかもしれない。が、時間は平等に与えられていた。頂上は無理でも、途中まで上る余裕はあった。Aクラスは無理でも中堅クラスに入るチャンスはあったのだ。

その時間をどのように使うかは本人の自由であり、権利だ。そして、それに伴う結果を受け止めることが義務だ。

何てことはない。山の頂上にあこがれるだけで一歩も登ろうとしなかった、登らな

かった選択をしたのはFクラスの生徒たちだ。

今更ながらにそのことに気付いたのだろう。誰も坂本雄二に反論しようとはしなかった、いや出来なかった。

「学園長も言っていたな。努力した人間としていない人間がうんたらかんたらってな。じゃあ、もう一度聞こう。お前ら、今の設備に不満か？」

誰も首を横に振らなかった。えらい違いだ。さっきはあんなに文句を言いながら・・・とは感じたが、嫌な感情は湧いてこなかった。

むしろ、逆である。しいていうなら期待か。思い描いていた絵を寸分違わずに書けている。むしろ期待以上だ。明久がFクラスだったのは嬉しい誤算だ。あいつは面倒く

さがりだが、・・・・・・・・・・・・まあ、ゲームで釣るか、うん。翔子も明久についてくるだろう。姫路は印象を悪くさせちまったか。第一印象は重要だっていうのにな。明久経由で一度話したほうがいいな。

　ラグナは・・・正直じっくりと話してみたい。さっきの出来事の最中、他の連中が騒いでいる中でずっと不敵に笑っていた。俺が暴言を吐いた後もそれは変わらなかった。明久と知り合いみてーだからこれも明久経由か。・・・バカ久のことだ、ゲームもう一本貸せば丸め込めるだろう。うん。

（先生、まだ時間は来てませんよね）
（あ、はい。まだまだ余裕はありますね）

　小声での返答にニンマリと微笑む。あらかじめ自己紹介の他にしたいことがあるといっておいたおかげで、たっぷりと時間を貰っている。そうじゃなければ、こんな悠長に構えていることなどできない。

　ま、俺の言葉について何か説教が来ることは覚悟していたが・・・終わってから呼び出しを食らうかもしれないが、それならいい。重要なのは今だ。

さて、ここからがもうひと山だな。

「そんなお前らに一つ、提案がある」

低く作ったさっきとは違い、自然体である高さの声を発した。うつむいていた何人かが違いに気づき、顔を上げる。それでも大半は俺と顔を合せなかったが。

が、別にかまわない。どうせ次の台詞で否応なしに合わせることになるのだから。再び喧噪が起きるのだから。

今日の晩御飯は何にしますか？・・・そんな軽い口調で提案してみた。

「Ａクラスに試験召喚戦争を仕掛けてみないか？」

登場人物紹介

吉井明久

所属・・・Ｆクラス

趣味・・・ゲーム、漫画

得意科目・・・現代文、数学、英語、日本史、世界史

苦手科目・・・古典、化学、物理、生物

本作の主人公。幼少のころから勉強が苦手で素行にも問題があり、昨年、文月学園初の「観察処分者」に任命される。が、１学年の中頃に翔子と両想いになってからは『翔子にふさわしい人間になる』という目標を立て、死に物狂いで勉強に取り組んでいく。振り分け試験時、Ａクラスは確実だったが、試験前日に高熱を出した翔子の看病のため欠席、Ｆクラス配属となった（翔子の両親に看病を任せる、という発想は試験翌日に出

てきたらしい。遅い）。

翔子らの教えのおかげか、眠っていた才能が開花したのかは分からないが、高橋女史と同程度の点数を採れるほどまで成績を伸ばしている。得意な文系科目で苦手な理系の点数をカバーする形となっている。

性格は面倒くさがり屋。皆を引っ張っていくことはしないが、その分やるときはやる。

霧島翔子

所属・・・Fクラス
趣味・・・料理

得意科目・・・数学、化学、物理
苦手科目・・・古典

本作のヒロイン。小学校のころから才色兼備・明久ＬＯＶＥを貫き通し、昨年ようやく両想いとなる。口数が少なく、容姿も相まって高嶺の花のような印象を受けるが、結構気さくだったりする。明久を中心に物事を考えているため、時折緑の巫女もびっくりな常識に囚われない行動をとったりする。
成績は明久と互角だが、得意不得意の波が少ない。細かく見ると、若干理系寄り。

坂本雄二

所属・・・Ｆクラス
趣味・・・将棋

得意科目・・・現代文、化学
苦手科目・・・数学、物理

Ｆクラス代表。明久、翔子とは物心つく頃には気の置けない仲となっている。考え事

が趣味のような人間であり、暇なときは常に頭を回転させている。リーダーシップがあり、物事に対し的確な行動をとれるため、友人からの信頼は厚い。
学力はCクラスを狙える位置だったが、なぜかFクラスに。故意なのかは不明。

姫路瑞希

所属・・・Fクラス
趣味・・・料理（）、読書
得意科目・・・数学、日本史
苦手科目・・・物理

本作のナイスバディ。他人のことを放っておけない性格で、いつも問題事に首を突っ込もうとする。一方で天然な面もあるため、明久ら友人（特に明久）からはいじられることが多い。振り分け試験数日前から張り切りすぎて体調を崩し、Fクラスになった。
明久曰く「バカさ加減では自分といい勝負」。

成績は、Ａクラス上位を狙えるほど。翔子と同じく、苦手科目が少ないことが特徴。

ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジ

所属・・・Ｆクラス
趣味・・・筋トレ、ゲーム
得意科目・・・現代文、英語、化学
苦手科目・・・数学

ブレイブルーから参戦。中学校の頃にイギリスから日本に引っ越し、現在まで一人暮らしをしている（ネタバレ：時々姫様が押し掛ける模様）。本人は一匹狼を気取っているらしいが、なんだかんだで面倒見が良く、『兄貴（男子談）』『お兄さん（女子談）』というイメージを持たれている。試験で名前を書き忘れたため、Ｆクラスになった。
成績は瑞希よりちょっと上。穴は数学だけだが、その数学がＦクラス並み。

島田美波

所属・・・Fクラス
趣味・・・なし
得意科目・・・数学、
苦手科目・・・現代文、古典

本作の無いっすバディ。1学年の中頃までは明久とよく会話していたが、最近は避けるようになった。日本に来て1年とちょっとのためまだ不慣れな部分があり、口数はそんなに多くない。
上記の理由で、計算問題の多い数学以外は点数が低い。本気が出せればBクラス上位を狙える。

木下秀吉

所属・・・Fクラス
趣味・・・演劇
得意科目・・・古典
苦手科目・・・英語

新種と言われている、性別：秀吉。演劇が好きで、勉強そっちのけで部活に明け暮れたため、めでたくFクラスとなった。どちらかというとおとなしい性格で、あまり自分の意見をいうことはないが、言うときははっきりと言う。
古典は上位クラスに引けを取らないが、他はFクラス平均並み。

土屋康太

所属・・・Fクラス

趣味・・・写真撮影（）
得意科目・・・保健体育
苦手科目・・・その他全部

我らがムッツリーニ。常にカメラを持参しており、撮った写真を販売することで結構な利益を上げているごく普通の男子高校生。何を撮ったのかは永遠の謎。翔子以上に無口で、必要最低限のことしか言わないため、慣れていなければ会話をするだけでも苦労をする。
培った知識を存分に活かせる保健体育は学年1位の成績だが、他が文字通り壊滅的なため、Fクラスとなった。

久保利光

所属・・・Aクラス
趣味・・・読書

得意科目・・・古典、英語、日本史、世界史
苦手科目・・・なし

Aクラス次席。絵に描いたような優等生であり、常に冷静に物事を考えるAクラスの大黒柱。手よりも頭が先に動く癖があり、思考に集中するとそっけない態度をとってしまったりするが、根は優しい。
次席の名は伊達ではなく、全教科で非常に高い水準を保っている。

木下優子

所属・・・Aクラス
趣味・・・「（「　^ o^ ）」
得意科目・・・現代文、数学、英語
苦手科目・・・日本史、世界史

秀吉の姉。学校では久保に次ぐ優等生と認識されており、Ａクラス女子のリーダー的存在でもある。反面、家ではだらしない服装だったりＢＬ漫画を本棚１面に並べていたりと、公私のギャップが激しい。
久保にライバル宣言しているだけあって、Ａクラス女子の中では最高得点をマークしている。

工藤愛子

所属・・・Ａクラス
趣味・・・パンチラ
得意科目・・・保健体育
苦手科目・・・数学

本作のボーイッシュ担当。初対面の人にも積極的に話しかけたり、率先して物事に取り組んだりしているため、クラスのムードメーカーとなっている。浪漫溢れる趣味を

持っており、過去にムッツリーニを病院送りにしたことがある。
ムッツリーニに劣らない成績の保健体育が最大の武器。その他はほとんどの科目で優子に劣るが苦手科目が少なく、Ａクラス上位につけている。

6話：正論は口に苦し

これほど雄二の発言に振り回される日も珍しい。頬杖をつきながら、そんなことが頭に浮かぶ。

やっと落ち着いた瑞希を座らせてから、我らが代表の説教に耳を傾けていたのだが、あいつはFクラスにこれでもかというほど立場を自覚させたすぐ後に、試召戦争の提案をしてきた。しかも相手は、先ほどまで話題の中心だったAクラスである。

あれだけAとFの差を説いていきながら・・・AとFか、うん、随分大きさがちgいやそうじゃなくて、説いておきながら挑もうというのだ。発言したのが雄二じゃなかったらその人の頭を心配する自信がある。

試召戦争・・・正式名称を試験召喚戦争というが、実際の、国と国とが行うような戦争のことではない。文月学園に存在する、クラス間同士の戦闘のことを指す言葉であ

る。

　このシステム・・・ルールかな?まあ、ざっくばらんに言えば、他のクラスとあるシステムを使って勝負を行い、勝利できればクラス設備の交換ができるのだ。もしAクラスに勝つことが出来れば、築うん百年のオンボロ教室から一転、貴族さながらの充実したスクールライフを送ることが出来るのだ。

　なんだ、じゃあ振り分け試験のクラス替えなんてあんまり意味ないじゃん。って思ったそこのあなた、そんなに世の中は甘くないわけで・・・この試召戦争で武器となるものは、『自分の成績』である。言うまでもないが、成績が良ければ良いほど有利である。

　さて、成績が一番いいクラスはどこだろうか。もちろん、Aクラスだ。
　では、成績が一番悪いクラスはどこだろうか。もちろん、Fクラスだ。

　少年よ、これが絶望だ。過去に行われた試召戦争は少なくないが、大半は防衛側（試召戦争の宣告を受けた側）の勝利に終わっている。侵攻側が勝利した戦争もあるが、自分より1つだけ上のクラスに挑んだものばかりだ。FクラスがAクラスに勝つこと、いや、挑むこと自体が前代未聞なのだ。

「な、なに言ってんだ、代表・・・」

再三どころでは済まない雄二のぶっ飛び発言に、ついに声が上がった。最前列の生徒だ。声の主は最初の雄二の説教が効いているのか、言葉を選ぶような口調だった。

「ん？どうした？」

「・・・いや、どうしたもなにも、話が全く分からないんだが・・・」

「Ｆクラスは馬鹿ばっか→Ａクラスは賢い→Ａクラスにのりこめー＾＾ってことだ。簡単だろ？」

それで理解できるのはあなただけだと思います。

「それにだな、ＡとＦは差があるとは言ったが・・適わないなんて一言も言ってない

ぞ?」

「へ?」

「お前ら、このクラスに誰がいると思ってるんだ?」

雄二が教室の奥・・・僕らのほうに視線を向ける。つられるように他のクラスメートがこっちを見てきて・・・急に顔が明るくなった。露骨すぎる。

「そうだ!俺たちの頭上には希望の星が輝いている!!」
「こんなに天才がいるんだ!Aクラスも夢じゃない!!」
「そんなことより姫路さんと霧島さん!お付き合いを前提としたお付き合いをさせていただけませんか!?」

いや、頭上には天井のシミしかないんだけど・・・それと最後の奴、月が出ていない夜には気を付けろよ。

「翔子らの成績を知らない奴はいないだろう。この学園の中で、これ以上の成績を持つ者はそう何人もいないはずだ。俺たちは最底辺でありながら、最強の武器を持っている訳だ。」

おおおおお!!、と野太い歓声が上がった。さっきまでの気まずい雰囲気はどこへやら、クラスに熱気が生まれてきた。「勝った!来週からはＡクラスだ!」と叫んでいる者もいる。

・・・ちょっと早すぎないか?確かに翔子たちの点数は高いけど・・・肝心の人数は数人しかいない。確かにＡクラスの大半の人には負けないだろうが、あっちは５０人いるのだ。次々に来られたらアマネの珠波衣羅盧（スパイラル）のようにどんどん削られて負ける未来しか見えない。

雄二に言ったほうがいいのかな?でも、この雰囲気の中でネガティブ発言してまた空気を悪くしたら、どんなあだ名がつくか分かったもんじゃない。冗談抜きにしても盛り上がっているこの雰囲気に水を差すようなことはしたくないｓ

「代表、言っちゃあ悪いが、その数人だけじゃ、どうやってもＡクラスには勝てない気がするぞ」

「須川くーーーーーん！空気読んでえぇぇぇ！」

単刀直入にバッサリと質問した須川君。いや、正論だよ。その指摘はたぶん間違っていないよ。でも、時と場所を考慮したほうがいいと思うんだ。せっかく、クラスのみんながやる気を出してきた所じゃないか！

ほら、雄二だって今の発言でちょっと待って雄二。何でにやけているわけ？なんで笑っているわけ？なんでちっとも動揺していないわけ？もっとなんかアクションあってもいいよね？まさか、今の須川君の発言も予想の範疇とかそんな感じですか？いくらなんでもそれは・・・

「その質問、待っていたぜ」

今の僕には理解できない。さとりの能力が心から欲しい。

「さてみんな、須川だったっけ？そいつの言うとおり、今のままでは勝つことが難しい。戦力が数人だけじゃ、人海戦術で押し切られるからな」

のんびりとした口調で雄二は喋っていく。何気に今の発言は酷いものだったが、反論するものは誰もいない。

「そこで重要となってくる人物を上げよう」

一旦言葉を切ると、雄二は手を大きく広げた。その姿は、太陽の光を全身に浴びる格好と言えばいいか？いや、『ｗｅｌｃｏｍｅ』という言葉を表す格好、といったほうがいいかもしれない。

クラスメートの注目を集めつつ、その姿勢のままで雄二は言った。

「お前ら全員だ。俺も含めて、文字通り、５０人全員だ。」

かくして、Ｆクラス代表の演説は、終盤を迎えた。

7話：雄二様は本当に頭の良いお方

リーダーとして必要な条件を養うにはどうすればいいか?という質問をされたとする。

リーダー、日本語でいう指導者、統率者を意味する言葉であり、数多（あまた）の人の先頭に立って物事に取り組む人物に与えられる名である。

必然的に目立つことになり、結果次第では賞賛も、功績も、非難も、責任も、真っ先に負うこととなる。

また、リーダーの選択、決断一つ、そう、たった一つで成功か失敗かが決まってしまうことがある。AかBか。対極な選択肢もあれば、一見すると違いが分からない選択肢もある。いや、実はAもBも駄目で、まだ見つかっていないCという選択が正しいのかもしれない。加えて失敗してしまえば、今までついてきた仲間にも少なからず迷惑をかけてしまうこととなる。

失敗は成功の母、失敗と書いてせいちょうと読む、という言葉があるが、大抵は責任の軽い個人に当てはまるものだ。トップに立つ者には、許されない場合が多い。次の機会が永遠に訪れないかもしれないからだ。

そのような重圧を常に背負いながら行動するのがリーダーである。当然、必要な条件は平々凡々なものではない。

皆を引っ張っていく強い統率力、皆を従わせる威厳、皆から頼られる人望、臨機応変に対応できる頭脳、逆境にくじけない強い精神力、ブレることのない決断力・・・ぱっと思い浮かぶだけでもこんなにたくさんある。

もちろんこれは氷山の一角だろう。ほかの人に聞けば、別の答えが返ってくると思う。それこそ10人がいれば10通りの解答が聞けるはずだ。

さて、ここで最初の質問に戻ってみよう。どのようにして養えばいいか？

・・・うん、ぶっちゃけると10数年しか生きていない自分にそんなこと聞くんじゃねえ！っていいたいけど、そんな野暮なことはしたくない。

といっても、自分は生まれてこの方リーダーシップなんてとったことないから、養い

方なんてわかるわけないんだ。精々、グループ学習の班長を務めたことくらいで、ほとんどのチーム活動において脇役をやってきたからね。

まあ、一番の理由としては、そんな面倒くさいことが出来るかってことだけど・・・とにかく、そんな僕だ。自分自身の経験談が無いので、具体的なアドバイスはできそうにない。

ただ、抽象的なことでいいなら言える。間違った解答は言わない自信がある。僕はこう答えるよ。

――雄二を参考にすればいいよ、ってね。

「秀吉、前に出てこい」

両手を大きく広げたポーズを崩さないまま、雄二は親友の1人を読んだ。先ほど自己紹介の先陣を切った、秀吉である。

秀吉は「わ、わしか？」と困惑した表情を浮かべたまま胡坐を解いて立ち上がる。どうやら事前に知らされていなかったらしく、足取りにも戸惑いが表れているようだった。

雄二は今みたいに、事前予告なしで突然呼びつけることがあるから困る。まあ、無理なことは頼んでこないけど。そこら辺は断られないようにちゃんと考えているのだろう。

ともかく、教室の前に出て行った秀吉はくるっと向きを変えて、こっちを向いた。

あ～、いつ見てもかわいいよ、ほんと。戸惑っている顔がさらに味を出している。学

生服は男子用だけど、逆にそれがいい！確かに女子高生と言えばスカートだけど、ネクタイにズボンのコンボもなかなか破壊力があると思うんだ。それに

「・・・明久」

よしこれ以上はやめようそうしよう。大丈夫、僕は一途な男だからお願いしますそんな目で見ないで翔子様。

「雄二よ、突然呼び出して・・・いや、突然なのはいつもの事じゃが・・・此度は一体何用じゃ？」

秀吉が、ちらっと雄二の方向を確認しながら聞く。雄二はその質問には答えず、秀吉に近づいていった。

やがて、秀吉の真横に立ち、今まで挙げていた手をぐっと降ろした。

ガシッ！という音と共に、秀吉の両肩に、雄二の両手が乗った。

・・・ちょっと強くやりすぎじゃない？ほら、秀吉が「お〝お〝お〝・・・・・・」っ

てなんかすごい声出してるよ?地底の旧地獄跡から響くような声だったよ!?

「あ、すまん秀吉。バカ久にやるノリでやっちまった」

「ぅ・・・つ、次からは、気を付けて、欲しい、のぅ・・・」

「分かった。さて皆、こいつの名前は知っているだろう。木下秀吉、演劇部の期待の星だ」

振り下ろした場所を軽くさすりながら雄二が話を始める。クラスからは「もちろんだぁーーーー!!」という雄叫びが返ってきた。もちろん複数。秀吉の自己紹介を一度聞いて忘れるような男子はそうそういないだろう

ああ雄二、さっきの発言について僕も雄二に話があるから。足洗って待っていろよ。

「・・・明久、足じゃなくて首だと思う」

(〒。д。)アーアーきこえない

「ここにいるということは、秀吉はFクラスだ。だが秀吉にはお前らに無い武器を持っ

ている」

そこで言葉を区切ると、雄二はずっと言葉を発していなかった福原先生に声をかけた。

「先生、秀吉の古典の点数、何点か分かりますか?」

「なっ・・・!ゆ、雄二!?」

「すまん、ちょっとの間付き合ってくれ。先生、お願いします」

雄二の発言に先生は「分かりました、少しお待ちを・・・」と言い、手に持っていた厚いファイルをめくり始めた。

秀吉は、まず雄二に手を伸ばしかけ、次にファイルに伸ばしかけた後、ため息をついてその手を降ろした。そりゃあ許可なく自分の成績を公開されるのは嬉しくないだろう。

でも、もっと抵抗しないのかな?前に秀吉の成績表見ようとしたらものすごい勢いで拒否されたことが・・・

「ええと・・・見つかりました。木下君、よろしいですか?」

「か、構わぬのじゃ・・・」

先生は言う前に、一旦本人の確認を取った。秀吉がうつむき気味に許可するのを見て、再び目を落とした。

「え～、木下君の古典の成績は、２１５点です」

先生が言葉を発してから一瞬だけ間があり、次に教室がどっと沸いた。

Ｆクラスの平均点数は2ケタ、しかも十の位で四捨五入すると0になってしまうような点数である。

２００点越えとなれば十分にＡクラスを狙える、いや、打ち勝てる点数である。

「すごいじゃんか木下さん！」

「霧島さん以外にも戦力がいる！勝てるんだ！」

「その、こ、この教科だけは得意なのじゃ・・・」

皆に賞賛されて、秀吉の顔が赤くムッツリーニちょっとカメラ構えないように後で

撮った写真よろしく染まる。なるほど、無理に止めようとしない理由が分かった。この点数なら堂々と自慢できる点数だ。

そういえば結構前、「役作りじゃ」とか言って古典の単語やら文法やらを勉強していたのを見た事がある。本当に、演劇が絡むと集中力が増すんだなあと思ったが、まさかここまでだとは。

ここで、反応を見た雄二が一際大きな声を出す。目が輝いているようにも見える。間違いない。締めに入るつもりなのだろう。

「いいか?こう言っちゃあ秀吉に悪いが、総合点数がFクラスでも、努力をすれば1、2教科なら短期間で点数を採れるようになる。秀吉が古典に力を入れ始めたのは去年の後学期からだ。つまり、お前らも高得点を狙えるんだ。そして、高得点を取ればAクラスにも勝てるかもしれない」

おおおおお!とざわめきが大きくなる。

「その為には努力だ。必死に、死に物狂いで勉強しろ。Aクラスに勝つも負けるもお前

らの頑張り次第だ。もう一度言う。お前らの頑張り次第でAクラスをつかめる可能性が上がるんだ。今まで本気で勉強してこない奴、今回だけでもいい。本気、死ぬ気でAクラスに挑め！」

「「「「おっしゃあああああああああ!!!!!」」」」

Fクラスに今日一番の雄叫びが鳴り響いた。一目瞭然だ。10分ちょっと前まではだらけたりしていたクラスメート全員が目を輝かせている。やる気の変化は言うまでもないだろう。

なるほどねぇ～、と思った。Fクラス生徒全員に1、2教科を徹底的に勉強させ、その教科の点数を上げさせる。全教科全滅じゃあどうしようもないけど、最悪1教科でもいいから武器を作っておけば、あとは自分の采配次第でどうとでも補える、といった所だろう。

そのためには皆に、全クラス中一番学習意欲の低いFクラス生徒に勉強をさせる必要があり、それが最大の問題だったが・・・結果はこの通りである。

最初の叱責から始まって唐突な提案をし、最後には全員を同じ方向に向かわせる。本

当に敵には回したくないよ・・・。

ま、これから退屈はしなさそうだけどね。どうせ雄二には頼まれるだろうし頑張りますよ。

Aクラスに勝つんじゃあああああ！と騒いでいるクラスメートを見ながら、うん、と背伸びをした。

「あ、ちなみに最初はDクラス相手だ」
「このタイミングで言うの!?」

8話：素晴らしきかな、一致団結

「うーん、やっぱり立候補に頼るのは無理なのか？1人だけでいいんだ。誰か引き受けてほしいんだが・・・」

「もー、代表がやればいいじゃん。そうすれば万事解決よ」

「だから、僕が生徒会員になるわけにはいかないんだよ。クラス代表と生徒会は掛け持ちできない決まりなんだ。」

今朝、担任の教師から渡された生徒会関連の資料を広げながら、僕は顔を上げる。が、すぐにため息をつくこととなった。

いくら見ても、僕の望む状況にはならない。ここの・・・Dクラスの生徒はそれぞれ

が好き勝手なことをしている。

友達と話に華を咲かせている者、スマホをいじっている者、机に突っ伏している者（おそらく意識は夢の世界だろう）と様々である。こんな者たちが大半を超えているのだから、代表兼進行役の自分としてはたまったものじゃない。

もちろん自分の話を聞いている者もいる。いるが、だからといって立候補してくれるとは限らない。僕が目を合わせようとすると、こっちを見ている者がさっと視線をそらす。「自分はやりませんよ」というメッセージを暗に、というかモロに示している。

まとまりが無いのは明らかであった。

朝、クラス代表を通告された時こそ、少しばかりの嬉しさはあった。代表と言っても、ＡクラスではなくＤクラスであり、学年全体から見ればそう褒められた成績ではない。

それでも、クラスで1番をとれたことは事実である。その後の自己紹介をした時は、高揚感さえ感じた。普段は持たない責任感も多少なり生まれた。

自分がこのクラスを引っ張っていこう・・・そう決意した。

・・・そして今、早くもその決意は折れかけている。

クラスから輩出する役員決めが全くといっていいほど進まない。さっき述べたように、誰も協力してくれないのだ。

先生がいてくれれば良かったのだが、「決まったら教えてくれよ」と言ってさっさとどこかに消えてしまった。教師の監視なしで、上位でも無いうちらDクラスがマトモにしているか。勿論、否だ。

相も変わらず教室はザワザワとしている。強く出るべきだろうか？いや、それはまずい。新学期初日で、自分と初顔合わせの人も多い。怒鳴ったりして変なイメージをもた

れたらこの先うまくいかなくなる。第一印象というものは結構長い間付きまとうから怖い。かといって穏便な方法をとったとしても、なめられそうで不安が残る。

嗚呼、自分にもっとリーダーシップがあれば、と思う。そうすればこんなに悩まずに済むのに・・・、と考えてしまう。

とはいえ、このままというわけにはいかない。時間は無限にあるわけではないし、他にも決めなければいけないことが残っている。

（うーん、クジで決めるべきか?それだったら後腐れなくて済むし・・・）

妙案が浮かばず、確率の神様に頼ろうと考えていた時だった。

『ガラッ!』

「し、失礼します!」

扉が開き、1人の男子生徒が1歩、教室の中に入ってきた。まだ授業中の時間なのに、だ。

扉の音に、ほとんどの生徒が反応し、一斉にそちらを見た。先生ではないことを確認して安堵する者が大半だった。おい。

ともかく、来訪者の出現により皆の関心が一手に、そちらに向いた。クラス中の視線を受け、男子生徒は開きかけた口を閉ざした。

「どうしたんだ?何か用事があって来たんじゃないのか?」

先陣を切って、自分が声をかける。注目を浴びて戸惑っていたその生徒は、僕の言葉に顔を上げる。そして、意を決したように話した。

「Fクラス、近藤だ。Dクラスの代表に伝えることがある」

男子生徒・・・近藤君の言葉に、ぎゅっと眉を寄せる。彼とは初対面である。あちら

も僕の名前を言わないで『Dクラス代表』といったことから、少なくとも僕個人への用ではなく、代表としての自分に用があるのだろう。

「僕がDクラス代表、平賀源二だ。どんな事だ？」

教卓についていた手を離し、そちらに体を向ける。近藤君はこちらを見たまま、言葉を続けた。

「Fクラス代表からだ。・・・俺たちFクラスはDクラスに試験召喚戦争を申し込む！」

力強い声だった。なるほど、FクラスがDクラスに試召戦争を

・・・・・・・・・・ん？

彼は何と言った？
何をするか？試召戦争をするといった。
Ｆクラスがクラスに申し込むといった。
Ｆクラスは？彼のクラスだ。
Ｄクラスは？自分のクラスだ。

Ｆクラスが、Ｅクラスではなく自分らに？しかも新学期初日に？

頭が混乱してうまく働かない。意味は分かる。だが、理解が追いつかない。

クラスメートも同じように、呆然としている。

沈黙が支配する。その原因となった生徒、近藤君は入ってきた時よりも表情を固くし

ていたが、ゆっくりと片手を上げ、側頭部に添えた。

皆がその光景を見守っている。近藤君は不意に表情を崩し、ただ、一言を発した。

「てへぺろ☆」

クラスメート全員がゆっくりと席を立ちあがった。そして一歩ずつ、1人の人物に向かって歩みを進めていった。その顔は、絵に描いたような無表情だった。

もちろん僕も、だ。ああ、近藤君、君には感謝しなくちゃいけないね。

・・・ありがとう。今、皆の気持ちが一つになったよ。

「さあぁぁぁぁかぁぁぁぁぁもおおおおとおおおお

!というか船に乗りかけちまったぞ!!」

「・・・・・へえ?マジでやったのか。あっはっは、馬鹿だなーお前」

「どういう意味じゃごらあああああ!!!!!!!!!!」

Dクラスが修羅場になった10分後、Fクラスに1人の絶叫が響き渡ったとか何とか。

9話：第一印象は大事なもの

扉を開けると、そこは雪国だった。

・・・なんてことはなく、下はコンクリート、上は青空が広がっていた。

「・・・よし、誰もいないな。他の奴らも来ていいぞ」

先に様子を確かめに行っていた雄二の許可を聞き、自分たちもぞろぞろと出ていく。

「へぇー、初めて来たけど、中々いい場所だね」
「ん？明久は来たことなかったのか？こんな昼寝に絶好の場所を見逃しているとは・・・」
「何、雄二？君は普段から僕を昼寝しかしない人物だとでも思っていたの？」
「「え、違うの？」」

「ＯＫお前ら表でろ」
「まあこの場所も一応表なんだがな」

ラグナの突っ込みを聞きながら、上げかけていた拳をゆっくりと降ろす。ぐるっと周りを見ると、小さなコンクリートの小屋、人工芝で出来た隅にある芝生以外は灰色の地面が広がっている。

世間一般的には『屋上』という名前がついている場所であり、自分もこの場所の名前を聞かれればそう答えるだろう。

中央付近まで歩いていき、そこで大きく背伸びをする。途端に春の陽気な太陽と風に包まれるような錯覚を覚えた。夏は勘弁願いたい天気でも、今の時期なら大歓迎である。

なるほど、雄二が昼寝云々言っていたのもうなずける。こんな、春告精がすぐ近くにいるような天気なら、すぐに夢の世界に行けるだろう。いや、行くなという方が無理だ。雨の日以外はちょくちょく来る事にしよう。

「ところで雄二、ここで何するの？」

伸びを終えて振り向き、雄二に尋ねる。

近藤君がDクラスから（息絶え絶えで）戻ってきた後、我らが代表はクラスメートに自習を命じた。それも、日本史だけを勉強するようにと言った。

雄二が演説で言っていた通り、総合的に点数を上げるのではなく、数を絞って点数を上げるつもりなのだろう。

しかも、「これを使って勉強してろ」と全員にプリントを配っていた。あとで聞いた話だが、春休み中に日本史の教師に掛け合って、５０人分用意してもらったらしい。始業式に勉強道具を持ってくるFクラス生徒など多くないと予想して（実際、持ってきたのは数人だけだった。僕？漫画とゲームに決まってる）準備していたというのだから、用意周到である。

早速自分も取り掛かろうとしたのだが・・・

「明久」

と肩を叩かれた。振り返ると雄二が笑っている。

「りょーかい」

その笑顔をみて適当に返事を返した。傍から見れば雄二が自分に声をかけただけのように見えるだろうが、自分には、それだけで雄二が何を言いたいのか分かった。『ちょっとついてこい』、で間違いない。長い付き合いだとこういう所が便利である。

何の用事かは分からないが、十中八九、試験召喚戦争に関することだろう。万が一、先月借りたゲーム返せ、という催促だったら不味い。思いのほか難しく、まだクリアできてない。その場合は、今まで温存していたバック転☆土下座を披露するしかない。

一抹の不安を胸に出しかけていた筆記用具を閉まって立ち上がったのだが、その間に雄二は他の人にも声をかけていた。

ちなみに他に呼ばれたのは、翔子、ラグナ、秀吉、瑞希、康太だった。

それで、皆で屋上まで来たんだけど、・・・なんだろう。知っている顔しかいない気がする。選ばれたメンバーが偏っている気がしてならない、というより絶対偏っている。

「まあ、やることは2つだな。1つは自己紹介、もう1つは作戦会議だ」

雄二はそう言いながら、フェンスに体を預けた。そこで話をするつもりなのだろう。自然と自分たちも雄二の周りに集まっていった。とりあえず自分も、翔子と一緒にフェンスに寄り掛かった。話の内容を聞いて、密かにほっと胸をなで下ろす。

「何だ？自己紹介ならさっきしたんじゃねーのか？」

皆の動きが止まった所で、胡坐をかいたラグナが口を開いた。コンクリートが地面だと学生服に傷がつきそうなのだが、そんなことはお構いなしの用だ。もう少し服を大事にすればいいのにと思ってしまう。そんな服が傷みやすい床で昼寝をしようとする人物がいたことなんて忘れた。

「ああ、もう少し深く聞いておきたかったもんでな。ブラッドエッジ、そして姫路」

腕を組みながら雄二は2人の人物の名を言った。ラグナは名前を呼ばれても微動だ

にしなかった。対する瑞希はビクッと体を震わせ、じっと雄二を見つめた・・・いや、睨んだ、と言った方が正しいだろうか。

そんな2人の反応が見えているのかいないのか、雄二はフェンスから体を離し、ラグナに向かって歩いて行った。ラグナも気付いたのか、ゆっくりと立ち上がる。雄二がその目の前で足を止め、手を差し出した。

「面と向かって話すのは初めてだな。坂本雄二だ。よろしくな」

「ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジだ。自由に呼んでもらって構わない」

2人は簡単な会話の後に握手を交わした。並んでみると、ほとんど身長に違いが無い。それだけではなく、体格もガッチリとしており、揃って、第一印象で頼りになりそうな雰囲気を出している。・・・羨ましい限りである。自分もああいうオーラを出したい。

「・・・大丈夫、頼りなさそうな明久が大好きだから」

「翔子、僕はその言葉にどう反応すればいいのかな？」

横から聞こえてきた言葉に思わず声が上ずった。

由々しき事態である。自分は普段、翔子からそのように見られているのだろうか？だとしたら男として、彼氏としての沽券におおいに関わってくる。そうだ、今までに翔子に頼られたことを思い出せばいいんだ。さあ、記憶よ甦れ！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・

「・・・・・・・・・・・翔子」

「・・・何？」

「・・・こんな僕だけど翔子のことが大好きだから、これからもお願いします」

「・・・うん／／／／」

漢として強くならねばと決意した、吉井明久16の春になった。

・・・で、落ち込んでいる自分を尻目に雄二がラグナをじっと見つめていた。まだ握手を解いていないため、さほど距離は離れていない。見方によっては一部の女子が喜びそうな構図だが、雄二の眼は真剣そのものだった。対するラグナも物怖じせずに雄二を見ている。

雄二とラグナの共通の友人である自分だから分かることだが、二人とも口数は多い方ではない。こう言うとさっきの雄二の演説は何だったんだ、と言われそうなので、無駄口は多い方ではないと表現するべきか。挨拶や受け答えはしっかりとするものの、友人との会話以外では必要以上に口を開かないように思っている。

さて、そんな2人が挨拶を終えたらどうなるか？

「・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
「「・・・・・・・・」」

沈黙が支配するのは当然のことと言えよう。響いているのは風とカメラのシャッターの音ちょっと待つんだムッツリーニその写真どこの女子に売りつけるつもりなんだだけだった。

かといって、他の人物が声を出せるような空気ではない。未だに手をほどかないということはどちらかが（おそらくは雄二が）手を強く握っているのだろう。それだけ相手を離したくないということか。

・・・あれ？やっぱりホｍ

「なるほどな」

考えがいけない方向に飛躍しそうになった瞬間、雄二が長い沈黙を破った。表情を崩し、手を緩めてラグナから離れた。
何だったんだ?と考えるより先に、言葉が続いた。

「ラグナ、頼みがある」

「・・・何だ?」

雄二からの質問にラグナは眉をひそめる。握手したと思ったら長い間手を離されず、やっと終わったと思ったら頼まれごとだ。そんな表情になるのも当然だろう。

なにをラグナに頼むのか?もし「俺と付き合って下さい」とかだったら、自分は雄二との友情を太平洋に向かって全力投球する自信がある。太平洋どころか学校の敷地内も超えないと思うがそこは気にしない。

「試験召喚戦争で、俺の右腕になってくれ」

・・・ごめんなさい、どうやら真面目な内容だったみたい。
自然と安堵の息を漏らす。翔子や秀吉も大きく息を吐き、安心していたのが見えた。
どうやら考えていることは一緒だったようだ。

「俺が?」

ラグナが言う。表情だけでなく、声にも不信感がこもっていた。が、そんなこと関係ないとばかりに雄二が口を開く。

「ああ、あんたなら信じられるからな」

ほぼ初対面の人に向かって言える言葉ではない。が、雄二の口調には確信めいたものがあった。

なるほど、信用は時間でなく行動で勝ち取るもの、と堂々と言っていた雄二のことだ、さっきの握手の最中にラグナを見極めていたのだろう。

突然の事だったが、もちろん僕自身も異論はない。ラグナが信じられるかどうかは言うに及ばず、頭も切れ、なんだかんだで面倒見も良い。事前に雄二に聞かれていたら二つ返事で了承していたはずだ。
それをしなかったのは自分の目で見て決めたかったからだろう。

一方のラグナは、その言葉を聞いてバツが悪そうな顔になった。少し顔をそらして、返答する。

「・・・買い被りすぎだ。それに、俺はまだお前のことを全然知らねぇ。精々、明久から何回か名前を聞いたくらいだ。お前が信じてくれても、俺はまだお前を信じられない・・・」

「構わんさ」

間髪入れずに、遮るように、迷いのない返答が雄二の口から出た。

「重要なのは俺がどう思うかだ。それに、人を見る目は持っているつもりだ」

響く声だった。どこを見ても揺らぎが無い。心からの、嘘のない言葉だった。

ラグナはしばしの間、身動き一つ取らなかった。やがて、ゆっくりと顔を戻す。雄二

を視界の正面に収め、質問を返す。

「・・・俺より明久の方がいいんじゃねーか？」

「バカ久は駄目だな。あいつは頭がいいだけの馬鹿だ」

油断しきっていた所に雄二からの流れ弾が直撃した。おい、と抗議の声を出そうとしたが、ラグナの出した笑い声にかき消されてしまった。

「ぷっ・・・ははは！なるほど、確かに人を見る目は持っているみたいだな」

「・・・明久、気持ちは分かるけど落ち着いて」

「翔子離して。僕は今抱いた感情をすっきり解消させたいんだ」

真っ赤に燃える右手を2人に叩き込もうとして、翔子に抑えられた。
ラグナはひとしきり笑ってから咳払いし、今度ははっきりとした声で答えた。

「ま、ほどほどにやらせてもらうさ」

ラグナは教室で見せていた微笑をした。

「頼んだぞ。・・・さて」

マジで爆裂ゴ（ｒｙする5秒前な僕などに目もくれずにいた雄二は、ラグナの答えに満足そうな笑みを浮かべた。

が、それも一瞬のことですぐに表情を戻し、体の向きを変えた。その先にいたのは、瑞希だった。

瑞希は、最初の顔のまま・・・険しい顔で雄二を見ていた。

１０話：普段優しい人が怒るとマジで怖い

「初めまして、というのはちょっと違うかもな。坂本雄二だ。よろしくな、姫路」

「・・・・・・・・」

・・・なんでしょうか、この状況。にこやかな笑みを見せながら話しかけている雄二、対してじっと雄二を睨みつけている瑞希。雄二には瑞希の表情が真正面から見えているはずである。それにも関わらず笑っているのは余裕からくるものなのか、はたまた能天気な馬鹿の為か。まあ、前者だろう。雄二だし。

「おいおい、そんな怖い顔しないでくれないか？せっかくの美人が台無しだぞ」

「・・・・・・・・」

雄二は、一昔前のナンパで使いそうなセリフを堂々と出す。陽気というかなんというか。でも雄二さん、今の台詞で瑞希の顔が一層歪んだよ。冷たい空気がこっちまで届いてきてるんだよ。誰ですか?春告精が近くにいるなんて言った人。

「「・・・・・・・」」

そんでもって皆無言。この雰囲気を作り出した2人以外、誰も口を開こうとしない。ラグナの時もそうだったが、その時とは空気の重さが全く違う。さっきはなんかこう、微妙なというかふわふわしていたというかそんな感じだったけど、今は一触即発状態。いや、やばいってこれ。ガチで瑞希がキレそうなんだって。空気が重い、というより寒い。

平然としているのはラグナくらいで、あとの観衆は(自分も含めて)おろおろしている。自分には2人の間に割って入る勇気も度胸もない。出しかけた右足がずっと動かないままだ。このままではまずいと思い、ラグナとコンタクトをとる。

(ラグナーどうにかして~)
(おいおい、こっちに振るなよ。俺にだってどうにもできねぇぞ)

（そこをなんとか！原因分かんないけどこのまま初日から仲間割れなんて目も当てられないよ！）
（そりゃあ、そうだが・・・お前の方が瑞希との付き合い長ぇだろ）
（瑞希があんな状態での対処方法なんて分からないよ）
（いつもみたいにどつけば機嫌直るんじゃねぇのか？）
（はっはっはっ、ラグナの冗談は面白いね）

駄目だ、ラグナ使えねぇ・・・。なんて役に立たない奴なんだ！と自分のことを棚にあげながら小声での会話を終わらせる。
そうだ、まずは冷静になろう。なんで瑞希があんなに怒って（？）いるのか分析してみよう。まず一つ目が、さっきの雄二とラグナとの会話で不快な思いになったという可能性だ。さっきの会話・・・・・・

・・・・・・えーっと、何だったっけ？

いや違うんだよ。認知症でもないしお空でもないんだよ。２人が同盟組んだことは分かるんだけど、細かい内容が全然頭の中に無い。原因は９割方、あらぬ妄想のせいで

話を聞いていなかった所為だろう。いや、その所為だと断言する。人間なのに鳥頭なんてシャレにならない（ああ、おぼろげながら思い出してきた）。

まあ、自分で挙げておいてなんだがその可能性は薄いんだけどね。瑞希は屋上に来てから最初、雄二に名前を呼ばれたときに睨み返していたのを覚えている。つまり、屋上に来る以前から雄二に恨みを持っていたと考える方が妥当だ。

だけど、その二つ目の可能性となると、原因が分からなくなる。さっき言った通り2人とも初対面に近い関係のはずだ。前世からの因縁とかそんな痛い設定でない限り、あんな邪険な雰囲気になることはないはずである。う～ん・・・

・・・と考えが迷走しかけていた時だった。

「・・・坂本君」

ずっと口を開かないでいた瑞希が、ゆっくりと口を開いた。全員の視線と意識が彼女に集中する。とりあえず停滞は崩されたことで、心なしか皆が安堵した空気をかもし出している。何も解決していないんだけどね。

「ん、何だ？」

雄二は、ようやく瑞希が喋ったことを何とも思っていないかのように、言葉を返す。もちろん、にこやかな笑み付きで。もうあの表情、一種の策略なんじゃないかと思ってしまう。

瑞希は一旦深呼吸をした後、言葉を繋いだ。

「朝、Ｆクラスで、何であんな、酷いこと言ったんですか」

紡ぎだされた言葉は、糾弾と疑問が入り混じったものだった。

「酷いこと？どんなだ？」

「ッ!!」

雄二からの返答を聞いた瑞希の顔が、今度こそ歪んだ。まずい。そう思った僕は素早く、２人の間に割って入った。

どうやらそれが正解だったみたいだ。瑞希は怒りで雄二に突っ込もうとしていたようで、結果として、間に入った自分に、勢い余って飛び込んできた。いくら自分がひょろっとしているといっても、女子一人の体当たりでぐらつくほど貧弱ではない。瑞希を受け止めることに成功した自分は、役得だなあという思いを頭の片隅に胸大きいなあ押し込んで、目の前の事態に目を向ける。

「きょう二回目かな？瑞希、落ち着いて」

「・・・明久君、どうして止めるんですか」

瑞希さん、上目遣いはヤバいですよ・・・、とか思いながら引き離す。そのままでも良かったんだけど、恋人とカメラマンの機嫌が大変なことになりそうなので止めておいた。

「どうしてって・・・もし止めなかったら大惨事になっていただろうからね」

「・・・ええ、なっていたでしょうね」

こっちを睨みつけてくる瑞希。でもその焦点は自分に合っていなかった。

「おお、怖い怖い」

わざとらしい声を上げながら雄二が体を震わせる。反応して瑞希が一歩前に来ようとしたので押しとどめた。雄二もうその態度止めて。慣れない仲介役をする自分の寿命がストレスでマッハなんだって。

「瑞希落ち着いて！ほら、確かに雄二の台詞は辛辣だったけど最後には皆納得してたでしょ？」

「そのことだけじゃありません！ここに来てから、坂本君は明久君のことを馬鹿呼ばわりしました！」

いや、それは事実なんだけど・・・と思いながら必死に瑞希を宥める。

ともあれ、今の一言で話は繋がった。『親友を馬鹿にされたから』、怒っていたのだろう。瑞希は、自分の事なら何て言われても気にしないが、親しい人を馬鹿にされるのを酷く嫌う。教室で飛び出そうとした時もしかり、今回もしかり・・・あれ、根本的な原因って自分？灯台下暗しどころか灯台自身が原因だったってことですか。

だったら、自分がなんとかするしかないか・・・。

「瑞希。屋上での会話で、雄二の馬鹿発言に腹を立てていたんでしょ？」

「・・・ええ」

「だったら、それに肯定したラグナに対してはどう思っているの？」

「え？」

厳しい表情が一転、戸惑いの表情になる。あの時、ラグナだって雄二の言葉に賛同して、笑っていた。瑞希の言葉を基準にするなら、それに関しても怒りを抱くはずである。が、もちろん、そんなことはありえない。なぜなら・・・

「いや、だって、ラグナさんは本心から口にしているわけではないので・・・」

「でしょ。雄二も同じだよ。教室でも言ったけど本心から口にしているわけじゃない。一種のスキンシップみたいなものだって。大丈夫、雄二の性格は僕が保証するから。」

教室での発言はスキンシップどころか起爆剤だったけど、結果的には大成功だったしね。雄二の台詞を自分や秀吉、ムッツリーニだったらいつものことだと軽く流す。雄二のことを知らない瑞希が真正面から受け取ってしまったために起きた事態といえるだろう。

瑞希は少しの間黙っていた。そして、おもむろに体の向きを変える。

「・・・ラグナさん、坂本君のことを信用してもいいのでしょうか？」

僕以外の親友の一人であるラグナに質問をした。ラグナは肩をすくめて返答する。

「それは俺が決めることじゃねぇだろ。ま、俺自身は坂本に対しちゃ悪い感情は持ってないさ」

「そうですか・・・」

呟くように言葉にした後、また体の向きを戻した。自分は、2人の間から離れた。最初にしたように、瑞希が2度目の深呼吸をする。その表情は、幾分柔らかくなったとはいえ、笑顔には程遠かった。

「姫路瑞希といいます。正直、第一印象の所為で坂本君のことを信じきれません。でも、信じられるように努力します」

「坂本雄二だ。ま、信じてくれた方がありがたいな」

言葉を交わした後、雄二は手を差し出したが、姫路は握り返さずに離れた。雄二は苦笑いをした後、手を引っ込めてこちらの近くまで来た。

自分としては仲良くなってもらいたいけど、その原因のことを考えると、なんとも言

えない気分になる。まあ、小さな勘違いから生まれたものなので、時間がたてば溝は埋まるだろうと考えている。

「・・・さて、これで俺が知らない奴はいなくなったな。次に行くぞ」

一段落したと思ったら雄二はぐっと腰を下ろし、胡坐をかいた。次と聞いて一瞬何のことだか分からなかったが、屋上に入ってきた時のことを思い出した。

「次ってことは・・・」

「ああ、作戦会議だ」

雄二はニヤリと笑った。

「ここからが本番さ」

11話：メリハリはきちんとつけましょう

「久保くーん！趣味ってなにー？」

時間はまだ午前。意識を集中させ、目の前にある数式と格闘していた僕だったが、耳元で響いた高い声によって中断することとなった。

シャープペンシルを置いて顔を上げる。悲しきかな、その声を最初に聞いてから半日も立っていないというのに、聞いてからすぐに顔が思い浮かんでしまう。悪い意味で。

「相変わらず元気な声だね、工藤さん」

「へっへーん、それが取り柄だからね！」

眼鏡の位置を直しながらその声の人物に向かって言葉を返す。隣の席には、腰に手を当ててドヤ顔をしている工藤さんの姿があった。ものすごくウザい。誇らなくていいのだが。むしろ抑制してほしい。主に僕の平穏的な意味で。

「それは結構だが、時と場所くらいは考えようか。今は私語を極力控えた方が・・・」

「はぁ、分かってないなぁ久保君は」

「・・・何がだい」

ちっちっちっ、と人差し指を動かしながら語りかけてくる工藤さん。芝居がかった動きの為か、さっきより3割増しでイラつく。自分でも久しぶりに低い声を出したと感じたが、何の影響も与えなかったようだ。

そして工藤さんは両手を広げた。

「先生がいない自習時間・・・それはイコール自由時間であーる！そんな簡単なことを知らないなんて、どう生きてきたのさ久保君！」

「うん、とりあえずそんな公式はないからね」

ＳＨＲが終わり、最初の授業の準備をしている最中、高橋先生に連絡が入った。先生は最初、驚いた顔をして、それは本当ですか?、などと質問をいくつかした後に慌てたような表情で教室から出て行った。

去年からの学年主任だった高橋先生だが、あのような表情は見た記憶が無い。どうしたものかと考えていたが、変わるようにして西村先生が入ってきた。

「皆いるか?立っているものは席についてくれ」

一時的にせよ、先生がいなくなっていたため、グループを作ろうとしていた人がちらほら見受けられた。さすがに、鉄人というあだ名がついている西村先生の前ではしゃぐ勇気のある人はいなかったみたいだ。皆、大人しく席に着いた。

しかし、１時限目の授業は西村先生ではなかったような・・・、というより生活指導

担当だったような、と思っていた所、疑問に答えるように先生が言った。

「新学期早々だが、試験召喚戦争がＦクラス、Ｄクラス間で成立した。今日の午後から始まる。よって本日は自習となる・・・こらっ！騒ぐな！」

自習、という単語を聞いた何人かがざわついたため、すぐに叱責が飛んだ。

「はぁ・・Ａクラスのことだから心配ないとは思うが、私語は極力控えるように！もし自習中に教員が来たなら、その者の指示に従うようにしてくれ」

それだけいうと、西村先生は急いで教室を後にした。

「・・・それがこのザマだよ」

持っていたシャーペンを置いて周りを見渡す。さすがAクラス、西村先生の言葉を守り、全員が机に向かって一切言葉を喋らずにペンを動かしている。

・・・という光景は幻想の彼方のようだ。聞こえてくるのは勉強とは全く関係のない内容の会話ばかり、真面目に席について勉強しているのは10人いるかどうかで、その他は友達との会話、私的な目的でのPC使用など、ここが本当に最高学年かと疑いたくなる。そのことを隣ではっちゃけている痴女に聞いたら、

「まーまーいいじゃん。ほら、Aクラスは公私の区別がしっかりできる人が多いんだって。頑張るときは頑張る、遊ぶときは遊ぶ！」

「その基準でいえば、今は間違いなく公の時間のはずなんだが」

「ボクは家でも勉強しているから大丈夫だって！」

と、どう考えても筋が通っていない返答をされた。

「諦めなさい、愛子に細かいことを求めること自体が間違ってるわよ」

「・・・どうやらそうみたいだね」

はぁ・・・とため息をつく。そうだ、初対面の時、雰囲気からして分かっていたことじゃないか。この人と自分は性格が１８０。違うと。

「ぶー、なによ優子ぉ。そんなこと言ったら久保君がボクの事ずぼらな女だって勘違いしちゃうじゃん」

「勘違いも何もその通りでしょ。学校でくらいシャキっとしなさい」

「えーいいじゃ～ん。だらけきった優子のＯＦＦ時よりはよっぽどシャキぎゃん!?」

後ろを振り返って話していた工藤さんの緑髪が一瞬にして視界から消えた。代わりに見えたのは親しき知人の顔。だが、鬼気迫るオーラをしていた。

そして、ばっちり目が合う。

「・・・久保君、今の話忘れなさい」

「今の話?具体的にはどこからどこまでの範囲なんd」

「全部よ、いいわね」

「いや、全部って」

「い　い　わ　ね」

「・・・分かった」

なんだろう、肯定しなければいけない気がした。表情はいつもと変わらないはずなのに雰囲気が全く違う。

まあ、これ以上聞かないようにしよう。誰だって知られたくないことの一つや二つは

あるはずだ。親しき仲にも礼儀あり、という訳ではないが、彼女の今の態度からして深く掘り起こそうとすれば、痛い目を合うことになるだろう。

「いてて・・もう、そんなに久保君に短所聞かれたくないの?やっぱり、気になる人の前では完璧人間でありたいってことかな～♪この、て・れ・や・さ・ん☆」

「・・・遺言はそれでいいかしら?」

「・・・・・・え、・・・い、いやー冗談だって、冗談!だからボクの右手はそっちに曲がらないからあああああああああああああ!!」

・・・こんなふうにね。

「はい、久保君。烏龍茶で良かった?」

「ああ、わざわざありがとう、木下さん」

「優子~ボクの分は~?」

「自分で取ってきなさい」

「・・・ジーザス・・・」

1時限目が終わり、休み時間に入った。問題集も目標としていたページまで行き、一息つこうとしたところで、木下さんがドリンクバーから飲み物を持ってきてくれた。感

謝して受け取り、一気に半分ほど飲む。飲み込むと同時に体中に水分が回っていったのを感じた。

「久保君、少しいいかしら？」

「何だ？」

再びグラスを傾けようとしたところで、木下さんが改まった口調で話しかけてきた。

「試験召喚戦争の事よ」

「・・・ふむ」

彼女の言葉を聞いて、言葉以上のことを悟った。おそらく、初めに自分が感じた疑問、彼女も考えているのだろ。

「このクラスが危険かもしれない、ってことか」

「!!」

「図星みたいだね。僕もさっきの時間、少しだが考えていた」

いきなり話の核心をつかれたことによって、木下さんが驚愕の表情を浮かべた。どうやら本当に考えが一致していたようである。まあ、その結論に辿りつかなければ、自分に話しかけてきたりはしていないだろう。

試召戦争は大きなイベントではあるが、対象となるのは2クラスだけである。2クラスだけで勝敗を決定し、2クラスの間だけで事態は完結する。他のクラスへの影響は今回のように、授業が自習に変更されるくらいだ。対岸の火事といっていい。

そのことを言うだけであれば、あの改まり様は不自然である。が、久保利光個人ではなく、学年次席としての自分に相談に来たのであれば納得できる。

「君の考えをさらに詳しく当てて見せようか？Fクラス対Dクラスの今回の試召戦争、普通に考えたらDクラスが勝つに決まっている。が、木下さんはFクラスが勝つと思っているんだろうね」

「そ、それは・・・まあ、あの2人がいるんだしね」

「それに加えて、姫路さんとブラッドエッジさんもＦクラスだからね」
「・・・へ?う、嘘っ!?」
　声を挙げて慌てて立ち上がったことにより、いささか注目を集めてしまったようだ。他の生徒がこちらを見ている。木下さんは少し顔を赤くしながら周りを見渡して、席に座った。アイスコーヒーを口にし、声を抑えて言った。
「・・・いないわね、確かに」
「名簿でも確認済みだ。気の毒な事だが、Ｄクラスは明日から座布団とちゃぶ台になりそうだね」
「それはまた・・・笑えないわね、当人たちは」
　とてもではないが、あの４人を全員倒して勝利するＤクラスの光景が思い浮かばない。南無三。
「そして、Ｆクラス代表がそれだけで満足するかどうか・・・ね」
「ないだろうね」
　木下さんの問いに即答する。彼ら、彼女らは一人一人が、極めて高い点数を叩きだせる。特に吉井君と霧島さんは桁違いの成績だ。それをＦクラス代表が戦争中、実際に見たなら・・・
「もしかしたら、ＤクラスどころかＡクラスにも勝てるのではないか、なんて思いあがっ

た考えをするのかもね」

「かも、じゃないな。するよ、絶対に。もしかすれば既に、その気なのかもしれない」

そうなるとFクラス対Aクラスの試召戦争が始まってしまう。Aクラスレベルがたった4人とはいえ、あの4人である。絶対に勝てる、なんて保証はない。クラス設備にこだわりがあまり無いとはいえ、この設備のままでいれるならそうしたいのが本音だ。

どうしたものかと考えていると・・・

「あ～、おいしい♪やっぱりオレンジジュースでしょ♪」

どこぞのはっちゃけ娘の声が聞こえてきた。飲み物を取って、今戻って来たらしい。

「愛子、こんな時間からジュースなんて太る・・・」

木下さんが工藤さんに注意しようと横を向き・・・不自然に声を止めた。気になり、自分も横を向くと・・・

「ふふ・・・私たちも混ぜていただけないかしら」

「よ、参謀。面白そうな話しとるな！加わるで！」

関西弁の口調の男子、上品な佇まいの女子が立っていた。

「構いませんよ、アルカードさん。そして・・・・・・・」

クイッと眼鏡を挙げて答える。自分の視線は男子の・・・手に注がれていた。

「・・・代表、とりあえず両手に持っている大量の菓子類、どうにかして下さい」

「断る！食いもんは親友や！」

一点の曇りも見えないその返答に、頭が痛くなるのを感じた。

12話：世の中下には下がある

「さて、ここからが本番さ。午後からの試召戦争についての具体的な作戦、および説明だな。質問があれば答える」

胡坐をかきながら雄二が言った。さっきまで緊迫した状況だったため頭から飛んでいたが、その言葉でここに集まった目的を思い出す。

そう、僕たちFクラスは午後からDクラスと試験召喚戦争を行うのだ。勝てば設備交換、というのは周知の事実だが、デメリットもある。もし、仕掛けた自分たちが負けた場合はどうなるのだろうか?その場合は、自分たちの設備だけが1ランク下がるのだ。例として、CクラスがBクラスに試験召喚戦争を仕掛けてBクラスが勝った場合、CクラスはDクラスと同じ設備になってしまうのだ。

・・・あれ?じゃあ、Fクラスはどうなるんだろう?Fクラスは一番下のクラスだ。負けたとしても下がりようがない。だとすれば、代償全くなしということか!?

「雄二!」

「ああ、明久。もし負けたらちゃぶ台が段ボール箱になるぞ」

「・・・マジかい」
ははは～読心術って便利だね～。畜生、明記されてないだけで下はあるんですかい。というかどこからその情報仕入れているんでｓ
「・・・（グッ）」
お前かよムッツリーニ。いや親指立てなくていいから。そんなかっこいい顔しなくていいから。
「ちなみに最底辺は教室なし、校庭での授業になるらしい」
「どこの青空教室!?」
雄二からたてつづけに知らされる驚愕の真実。嫌だ、こんな方法で太陽と友達にはなりたくない。・・・そうだよ！外での授業なんて自分たち学生はともかくご高齢の方々もいる教師陣には辛く、厳しいはずだ。それが分からない学園ではない。つまり今の話は雄二のブラックジョークということだな！
「悪いが明久、校庭の場合は全授業鉄人が担当だ」
「おーけー雄二早速作戦会議に移ろうか今すぐにこの瞬間に！」
自分でも中々の渋い声が出たと思う。ともあれ、またひとつ、負けられない理由が出

来てしまった。決して日光＋鉄人（視覚効果）のコンボによる日射病に恐怖したとかじゃないんだからね！

「まずは確認からだな。俺らFクラスは今日の午後1時からDクラスと試召戦争をする。長丁場になるかもしれんから、それまでにメシとか済ませとけ。具体的な方針だが・・・その前に聞きたいことがあるか？」

「あるぞ」

お、と雄二が声を挙げる。質問をしたのは秀吉だった。

「雄二よ、お主は教室で打倒Aクラスと言っておった。何故、Dクラスなのじゃ？わしの考えでは、いきなり本命とのAクラスか、あるいは最も近いEクラスと思ったんじゃが」

「それについては作戦の一つ、としか返せないな。どのみちEクラスとも戦う予定だが、順序というものがあるんだ。」

「は、はぁ・・・」

「ま、今言えるとこだけ言っておこう。今の状況ではAクラスと戦っても１００％負ける。切り札４人が全教科０点だしな」

「あ・・・な、なるほど」
「仮に４人が万全だとしても、俺も含めたその他の点数が低すぎる。こんな状態でＡクラスにぶつかってみろ。明日からは段ボールと友達になるさ」
頬杖をつきながら雄二は質問に答えた。
最後の言葉は怖すぎて笑えないが、その分言いたいことは十分に伝わってきた。まだ決戦は時期尚早と考えているのだろう。
Ｅクラスについては似たようなことを考えていたが・・雄二が考えているなら余計な口出しはしない方がいいだろう。現に、秀吉もこれ以上の質問を止めている。消極的と言われそうだが、雄二についていけば、まずこけることはない。
「他にはないか?・・・・・・よし、なら今回の方針だが・・・」
雄二は誰も質問しないことを確かめてから今日の行動について、事細かに話し始めた。

「・・・と動いてほしい。皆聞いてばっかりで疲れたろ。一旦休憩に入る」

ずっと口を動かしっぱなしだった雄二がぐるっ全員の表情を見渡し、不意にそういった。作戦を聞くことだけに集中していたため、その言葉への反応が遅れる。あっ、と思った時には雄二は屋上の扉を開けていた。

「あ、ゆ、雄二・・・」

声をかけようと口を開いたが、さっさと出て行ってしまった。残されたのは、ずっと話に耳を傾けていた人だけ。

「「「・・・・・・」」」

どうやら自分以外の面々も同じような心情だったらしく、ぽかんとした顔で屋上の出入り口を見つめていた。突然無音になった空間でしばし時が流れる。が、

「はぁ～・・・」

背を伸ばしながらラグナがだらけた声を出す。そのままフェンスに寄り掛かった。

それを機に他の人も体の力を抜いた。さっきのラグナの反応はまだマシな方で、秀吉とかはグデっと地面に寝転がった。駄目だよ、女の子がそんな格好しちゃ。

ともあれ、それだけ話の内容が濃かったのも事実だ。雄二は一旦休憩と言ったが、正直ここまで話した作戦内容で十分に戦えるのではないか?と思ってしまう。

しかも、１人１人に個別の動き方を言い渡してきた。そのどれか一つをとっても、なんとまあよく考えていらっしゃることで。これだけの内容が一つの頭の中に詰まっているとは未だに信じられない。

自分は補充試験を言いつけられた。さっき雄二が言った通り、点数０点じゃあ何もできない。翔子、ラグナ、瑞希も同様だ。ただ、気になるのが・・・

「明久君」

「ってどうしたの、瑞希」

瑞希が話しかけてきた。てっきり頭がパンクしていると思ったが、思ったより頑丈だったみたいだ。

「・・・胸はそんなに柔らかそうなのに」

「い、いきなりどうしたんですか!?」

「瑞希止めてよ。そんな大きなメロン２つぶら下げて学校に来るなんて破廉恥だよ」

「・・・瑞希、明久を誘惑するのは許さない」

「いや私何もしていませんよね!?」

「全く、その肉まん２つ自体が青少年を誑かす重罪だということに気付いていないのかね、この淫ピは」

「淫乱じゃありませんよ!?巨乳とピンク髪だけで判断しないでください！」
「はいはい、ところでどうしたの？」
ここまでは細かい言葉こそ違えど、何回も繰り返されてきた応酬である。
「うう・・・明久君と翔子ちゃんとの会話は疲れます・・・」
「それは大変だねぇ・・・。僕に出来ることがあれば力になるよ」
「今怒ってもいいですよね私」

「雄二のこと？」
「はい」
フェンスに寄り掛かりながら翔子と一緒に、瑞希の話を聞いている。自己紹介の件もあってためちょっとドキッとしたが、雄二の話をする瑞希の顔は、そこまで険しいものではなかった。笑顔とも程遠いが。
「何というか・・・ものすごい頭の切れる方だと」
「そりゃあ雄二だし」

「・・・雄二だから」

瑞希の言葉に、自然と返答が出た。雄二は本当の意味で頭がいい。１言えば１０まで理解し、１００の言葉で返してくる・・・とまではいかないが、とにかく皆の先をみていることが多い。おかげで本当に会話がつかれる。・・・あ、瑞希もこんな感じで疲れてるのかな。それは悪いことをした。止めるつもりはないけど。

「繰り返しになるけど、雄二は僕の誇れる親友だからね。瑞希とも仲良くなってもらいたいんだよ」

「それはまあ・・・善処します。まだ会ったばかりですが。それより気になることがあるんです」

「気になること？雄二のことで？」

「はい。その・・・こういうのはあれですが、何故坂本君がＦクラスなのかと思いまして」

瑞希の口から出たのはもっともな疑問だった。さっきまでものすごい密度の作戦を披露した彼が底辺クラスだなんて誰が信じるだろうか。

「それは僕も疑問に思っていたことなんだ。雄二は去年そこまで成績が悪かったわけではないし」

「へ、そうなんですか？」

瑞希が声を少し上げ、返してくる。少なくとも中間試験の時は平均点より上の点数だったのだ。だとすると今の点数は・・・

「絶対何か企んでるんね」

「・・・うん」

2人で頷く。彼がミスしたと考える方が、よほど非現実的である。

「まあ、気楽に構えた方がいいよ、今はDクラス戦の為に雄二の作戦内容を頭に入れること！いいね」

「そ、そうですか・・・」

雄二の狙いなんて読めるはずがないので、強引に話をまとめた。下手なことに頭を使うより、目の前のことに集中した方がいい。もうすぐ戻ってきそうだしね。

１３話：みんなで渡れば怖くない

時計の短針が１２と１の間を指している。太陽が頭の真上にある時間帯、いや、それを少しだけ過ぎた時刻といった方がいい。

文月学園の時間割では昼食休憩の時間であり、授業中とは打って変わって、若さあふれる高校生の喧噪が学校中を包み込むときでもある。飯を食いながら友達との馬鹿話、盛り上がらない方が不自然である。

・・・が、Ｆクラスはちょっと違った。

別に静かなわけではない。男子が９割を占めるクラスだけあって、他のクラスよりも力強い声がオンボロ教室内を木霊している。その喧噪っぷりは学年でもトップクラスだろう。

ただ、聞こえてくる内容を確かめると、その異質さが分かるだろう。

「ラグナー、ちゃぶ台は全部こっちでいいのか？」

「ああ・・・あ、いや、５つくらいは残しておいてくれ。補充試験の時必要になるな」

「おーい、椅子借りてきたぞ。どうすればいい？」

「お、サンキューな。それをドアの前に重ねてバリケードみたいにしてくれ。片方だけな。両方やったら俺たちが出られなくなるからな」

ラグナの指示を中心として、Ｆクラスの面々が教室を駆け回っている。弁当を持っている者はだれ一人いない。とっくに空になっているからである。いくらＦクラス代表から、早く食べろ、と指示が出ていたとはいえこれだけ早いのは若いからだろうか。もちろんそれだけではないのだが。

というのも、その代表様の言葉の所為だと思うのだよワトソン君。

「明久、ボーっとしてないで準備しとけ」

「あ、はーい」

ラグナの声が聞こえた。一旦思考を止めてカバンから筆記用具を持ってくる。鉛筆、シャーペン、消しゴム、替え芯、よし。準備は万端。あ、小型の鉛筆削りも用意しておこう。持ってきた鉛筆が全部折れてシャーペンの芯も切らしたなんてことになったら目も当てられないからね。

え、そんな奇跡的な確立、起こるわけないだろって?・・・・・・うん・・・そうだね・・・。

よし、過去のことは忘れよう。今一度思考の海に戻ろう。畜生、目から変な液体が・・・。

ぐすっ・・・雄二の言葉っていうのは、早く食え、を指すものじゃない。いうまでもなく、自己紹介の時の言葉だ。繰り返しになるから多くは言わないけど、皆のやる気を焚き付け、Ａクラスと言う目標を掲げて士気を高めている。

こういうのは悪いけど、最も総合点数の低いFクラスは、最も学習意欲の低いクラスと言い換えることが出来る。授業では机に突っ伏し、最後まで教科書のページは同じ場所、家ではゲーム三昧、テスト直前に焦るが後の祭り・・・いや、自分の事じゃないよ。

とにかく、そんなメンバーに対して勉強関連のやる気を出させるのには一筋縄ではいかない。単純に勉強しろ、というだけで机に向かうのなら苦労しない。・・・自分の事じゃないからね。ふふん、僕は四六時中勉学を中心に据えた生活をしていて今もこうして人類の発展の為ごめんなさい嘘ですゲーム大好きですからお願いそんな目で見ないで翔子。

うん、つまりはFクラスを勉強バリバリモードにさせた雄二すげえってことです、はい。実際、屋上から戻ってきたとき全員が必死に問題を解いていたからね。鉄人が見たら感激のあまり涙するんじゃないかと思う。

今回の試験召喚戦争に反映させることは難しいだろうけど、次回以降、少なくともAクラス戦までには効果が出るはずだ。もちろん、この勢いがずっと続くとは思わないけ

ど、その時は自分や翔子が協力しようと考えている。

「ラグナ、他にやることある？」

補充試験を受ける体勢を整えたところでラグナに質問をする。他の人が忙しく動き回っている中で、自分だけ動かないのもアレである。何か仕事をしようといったん降ろした腰を上げたが、当のラグナにやめるように言われた。

「そんなことしている暇があったら少しでも試験内容詰め込んどけ。高得点取るのがお前の仕事だ」

「・・・りょーかい」

こう言われたら何も言い返せない。結局、皆に申し訳ないと思いつつも、参考書を読むために、もう一度カバンの場所まで歩いて行った。

本来ならラグナも自分、翔子、瑞希の復習の輪の中に加わるはずなんだけど、陣頭に

立ってクラスに指示を出している。雄二が出すべきなんだろうけど、その雄二が見当たらないのだ。

これだけ教室を改造（？）しているのだからラグナが勝手にやっている訳ではないはずだ。おそらく伝言だけ残してどっかにいったのだろう。トイレかな？うーん・・・それにしては随分と見ていない気もする。いつからいなくなったんだっけ、雄二。

・・・結果として、雄二が戻ってきたのは１２時５０分、試召戦争の始まる、僅か１０分前だった。ただで帰って来たのではなく、２人の男性教師が雄二と共に教室に入ってきた。若い男性教師は教室を目の当たりにして顔を険しくし、年老いた教師は見渡して、小さなため息をついた後、教卓に持ってきた用紙を置いた。

それもそのはずである。教室には前と後ろの２つに扉があるのだが、前方の扉が見えない。比喩ではない。ちゃぶ台や椅子が高くまで積み重なっており、開けるどころか近づくことさえ恐怖を覚える。内側からはそのようになっているし、外側から開けて入っ

てこようとしても、かき分けるのには相当な勇気がいるはずだ。仮に籠って戦うことになった場合、相手との接触場所を１つに限定できる理屈である。

教師に何か言われる不安もあったが、反応を見るに、なんとか見逃してくれるようだ。その２人は、自分たちが補充試験を受けるため、そして初動の為に雄二が呼んできてくれたのだろう。連れてくるにしてはやけに時間がかかったような気もするが、ありがたいことに変わりはない。

「さあ、もうすぐ始まる。打倒Ａクラスへの第一歩だ。今のお前らのやる気ならＤクラスにも打ち勝てる！俺を信じて進め！」

「「「「おっしゃあああああああああ!!!!」」」」

体育会系よろしく声を張り上げるクラス。大声に顔を顰めた教師陣にひやひやしながらもじっとその時を待った。

・・・・・・午後1時、試験召喚戦争開始。

様子見でDクラスからFクラスへ向かった数人が見たものは・・・

「「「「おらあああああああああああ!!!!!」」」」

廊下を埋め尽くさんばかりの、Fクラス生徒群の突撃だった。

捕捉：試験召喚戦争事項

試召戦争のルールをここにまとめました。前半部分は他のサイトに記載されていたものを転載したものです。最後に、ＵＲＬを貼ります。また、そのほかに、自分が付け加えた試召戦争のルールも書き記します。

正直、読まなくてもこの先の本編で捕捉を入れていくので、このページは、「今のうちにルールを詳しく確認していきたい！」という方を対象としております。役に立ったのならば幸いです。

文月学園におけるクラス設備の奪取・奪還および召喚戦争のルール

一、原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師の立会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。なお、総合科目勝負は学年主任の立会いのもとでのみ可能。

二、召喚獣は各人一体のみ所有。この召喚獣は、該当科目においてもっとも近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。総合科目については各科目最新の点数の

和がこれにあたる。

三、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減点され、戦死にいたると０点となり、その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

四、召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、テストを受けなおして点数を補充することで何度でも回復可能である。

五、相手が召喚獣を喚びだしたにもかかわらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける。

六、召喚可能範囲は、担当教師の周囲半径１０メートル程度（個人差あり）。

七、戦争の勝敗は、クラス代表の敗北を持ってのみ決定される。この勝負に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。あくまでもテストの点数を用いた『戦争』であるという点を常に意識すること。

その他のルール・慣習

クラス別に行われるクラスとクラスの召喚獣を用いた戦いで、上位のクラスに勝てばそのクラスと設備を入れ替える事が可能（上位クラスは宣戦布告を断る事は出来ない）。敗北した側が下位クラスだった場合、設備が１段階下がる。

基本的に代表を討ち取るまで戦いは続くが、両者が望めば勝敗なしでの終結も可能。

そのため、クラス代表が撃破された場合でも、撃破した側が、敗北（＝設備を交換）か条件を呑んでの引き分けなどの二択を提示した場合、勝敗なしでの決着もあり得る。
勝敗が決した場合、負けたクラスは3ヶ月の間自分達から試召戦争の申し込みはできない（ただし、勝敗が発生しなかった場合は適用されない）。これは負けたクラスがすぐに報復を行うことによる戦争の泥沼化を防ぐ為。
両クラスの合意の上で且つ、テストを使っていれば別の方法（代表を選出しての「一騎打ち」など）での勝負も可能である。

・・・以上が他サイトからの転載です。ここから追加ルールをいくつか。

一、『補充試験は自分が所属する教室、または自習室でのみ受けることができる』
さすがに屋上とかで受ける人はいないと思いますが、一人一人が様々な場所で受けるとなると、教師の数が足りなくなってしまうため、受けられる場所を限定します。2クラス＋自習室の3場所に限定すれば大丈夫・・・なはず。

一、『補充試験を受けている者への戦闘行為を禁ずる』
要は、回復中の人に宣戦布告は駄目、ということです。もししてしまったら鉄人が飛んできて、ＴＨＥ　ＥＮＤ。素敵な補修室へご招待♪（ＢＧＭは連行される生徒の悲鳴）

一、『試験召喚戦争中、クラス代表は補充試験を受けることを禁ずる』
上記のルールの補完的なもの。上記だけだと、討死しそうな代表が補充試験を宣言した場合、最長で1時間、攻撃できなくなってしまいます。そのような逃げ道を塞ぐ意味があります。まあ、代表が討死しそうな状況から1時間逃げたところで、逆転できるとは思えませんが、念のため。

一、『試験召喚戦争は午前9時から午後5時までの時間帯でのみ行えるものとする。午後5時になっても決着がつかなかった場合は一旦停戦し、次の登校日の午前9時から、同じ状況を作り、再開する』
原作1巻のＢクラス戦でこんな状況が描写されていましたが、ルールで明確に記載されていなかったため、追加しました。相手をこれでもかと押し込んだのに、翌日、2クラスとも教室スタートではあんまりだと思いまして・・・。これと並行して、戦争中の2クラスは、時間外での補充試験を禁止とします。

一、『総合科目での戦闘中にダメージを受けた場合、全科目から均等な割合で点数が減少する』

例として、総合科目の点数が現代文１００点、古文５０点の計１５０点で、半分の７５点分ダメージを受けた場合、現代文５０点、古文２５点になってしまう、ということです。

全教科にダメージが行くので補充試験も大変、とかなりリスクが大きい設定にしています。とはいっても総合科目は総力戦、というカッコいいイメージがあるので、完結するまでに、１戦くらいは書くことを目標としています。

以上となります。

おかしな点があれば、教えていただけたら幸いです（読み手にすがりつく駄目駄目作者の図）

転載元

ｈｔｔｐ：／／ｊａ．ａｎｉｍａｎｇａ．ｗｉｋｉａ．ｃｏｍ／ｗｉｋｉ／％Ｅ８％Ａ９％Ａ６％Ｅ９％Ａ８％９３％Ｅ５％８Ｆ％ＡＣ％Ｅ５％９６％９Ａ％Ｅ６％８８

%A6%E4%BA%89

転載日・・2014年3月24日

１４話：大声出しときゃ士気は上がる

「だ、代表～!!」

試験召喚戦争開幕。それから5分も経っていないうちに、教室に転がり込んできた人物を見たとき、嫌な予感がした。

命からがら、といった状態で帰ってきたのは、開始と同時にＦクラスへ様子見に行かせたクラスメートらの内の一人だった。だるそうな顔で出て行った時の面影などどこにもなかった。

「どうしたんだ?」

驚きつつも、突然のことで固まっている皆を代表する形で（実際自分がＤクラス代表なのだが）話しかける。あ、今結構リーダーっぽいことできたな。

「Fクラスがっ・・・すぐそこまで!」

・・・・・・・・・

「「・・・へ?」」

変な声が出た。無意識につぶやいてしまった。皆もそうみたいだが。
Fクラス。自分たちと戦争をしているクラスである。すぐそこ。とても近くにいるという意味である。つまり・・・

「・・・マジかよ!?」

言うが否や、廊下を確認しようとドアを開けようとし、

「・・・って代表!あんたが出ちゃ不味いって!戦闘申し込まれたら大変なことになるだろうが!」

「代表落ち着いてくれ！」

クラスメートに羽交い絞めにされた。

須川だ。試験召喚戦争が始まって俺たちはすぐに教室を出て、Ｄクラスへ向けて一直線に走り出した。その数４０人。クラスの５分の４である。地響きを立て、喚声をあげながら廊下を突っ走るその姿は、真面目な教師が見たら卒倒しそうな光景だ。現在進行形で、ついてきている若い教師がよろしくない表情をしているが、今は目をつぶって欲しい。

先陣に半分以上の人数を投入するのはあれだが、代表の指示なのでやるだけである。いくらＤクラス相手と言えどこの人数なら大丈夫なはずだ。みんなで逝けば、じゃない行けば怖くないのだ。

さて、そのＤクラスだが、新校舎の端にある。教室が挟み撃ちにされないという利点がある（と代表が言っていた。俺にはそんな細かいこと分からん）が、それを補って余りある欠点があるみたいだ。それを浮き彫りにする作戦を代表から言い渡されているが、俺たちでも出来る分かりやすいものだった。すなわち・・・

「須川、敵が来たぞ！５人だけだ！」

「ＯＫ！踏みつぶせ！」

「「おおおおおお!!」」

戦いは数だよ兄貴＋サーチ&デストロイ。単純明快、⑨でも分かる戦法だ。

相手はこっちを見てヤバいと思ったのか、全員が回れ右をした。いくら格上とはいえ４０人対５人じゃ勝負にならないのは明白である。その判断は正しい。

だが遅い。

「先生、お願いします！」

「承認します」

教師の声と共に、教師を中心とした透明に近いフィールドが広がる。近くにいたＦクラスらはもちろん、逃げようとしたＤクラスの面々にまで届いた。その数４人。

「Ｆクラス須川亮、Ｄクラス４人に勝負を仕掛ける！」

自分の前にまで広がったフィールドを見て観念したのか、４人は振り返える。１人逃がしてしまったが、上々だ。

４人は振り返ったのはいいが、改めてこちらの人数を確認し、汗を流しながらじりじりと下がっていく。勝負を申し込まれてから出てしまうと失格になるのは分かっているはずだ。それでも下がるのは本能的なものだろう。

もちろん、逃がすつもりはない。

「試獣召喚（サモン）！」

言葉を発すると同時に、足元に怪しげな魔法陣が出現した。白色に光ったかと思うと徐々に中央に収束し始める。それは人の形だった。

光が収まると、そこには自分がいた。

・・・いや、それでは語弊が生まれる。自分そっくりの者がいた、と言い換えよう。

全長は１ｍに届かないそれは、俺と同じ服装をしており、右手に薙刀を持っていた。銃刀法違反待ったなしの姿だが、誰も、教師すらも騒がない。

当然である。その者に触れようと手を伸ばすが、何の手ごたえも感じずにすり抜けた。薙刀にも手をやったが、こちらもすり抜けるだけで、傷など一つもつかなかった。実体がないのである。

『試験召喚獣』

獣、なんて物騒な文字があるが、それが先ほど現れた自分のそっくりさんの正体である。あのＢ・・・学園長が生みの親と言われているが、誕生した原因は全くの不明であり、今でも解析中なのだとか。

そんな不安定なもの使うな、と言いたくなるが、聞かされたのは入学後だったため打つ手なし。よくよくパンフレットを読めば、学費の安さとの因果関係（要は、学費安くするから在学中に試験召喚獣動かしてデータ取られてくれ、というもの）に気付けたと思うが、そんなの見てる暇あったら寝る。

話がずれたが、今召喚した試験召喚獣、縮めて試獣を使って戦うのがこの戦争の根本である。

「くっ・・・試獣召喚」

観念したのか、１人が小さな声でつぶやき、自分と同じように試獣を召喚する。他の

３人もそれに習った。

『　教科　　日本史
Ｄクラス　西川裕也　　１４２点
Ｄクラス　足立夏樹　　１２２点
　　Ｄクラス　星川彩　　１２０点
Ｄクラス　山中俊介　　９７点
　　ＶＳ
Ｆクラス　須川亮　　１６１点』

「・・・はい？」

いざ、突っかかろうとした相手がピタっと動きを止める。呆けたような表情。その視線は、俺の試獣の頭に表示された点数にくぎ付けとなった。

「ドッキリ大成功・・・ってでも言われたような顔だな。生憎本当の事だ。日本史なら

あんたらに負ける気はしないぜ」

試獣に意識を傾けて念じる。すると棒立ちの状態から若干腰を落として、薙刀を構えた体勢になった。去年の授業で少ししか動かしていないため、動きがぎこちない。だが、それは相手も同じである。条件は同じ。勝敗を分けるのは点数の差、そして・・・

「「試獣召喚!!」」

『Ｆクラス生徒　３９人　　平均６８点』

「数の差じゃあああああ!!!突撃いいいい

「・・・嫌な、事件だったね」
「いや代表まだ終わってませんから！確かに４人は今地獄部屋だと思いますが現在進行形で戦争続いてますから！」
生き延びた者から詳細を聞いたときは、普段信じてもいない神に４人の冥福を祈ったが、クラスメートの女子の言葉で我に返った。
起きてしまったことはしょうがない。まさか全力で突っ込んでくるとは思わなかった。が、読めなかったのは代表である自分の責任である。
「すまん、誰か１人外の様子を見てきてくれないか？」
「分かった」
自分の言葉に反応した男子生徒が１人、教室の扉を開け・・・
『ピシャン』
速攻で閉めた。
「どうした？」
「あの、代表・・目の前にいたんだが」
「マジかいっ!?」
「いやだから代表自らが確認しようとしちゃ駄目だって！」

この目で見ようとして、再びクラスメートに取り押さえられて、床と友達になった。
「すまない・・・とにかく、もう近くにいるんだな」
止めてくれた生徒に謝り、一旦落ち着いて考えてみる。
戦争が始まって、とりあえず偵察に行かせた５人、その内４人が戦死して補修室逝き。
Ｆクラスはその勢いでＤクラスの教室前近くまで来ている。
・・・あれ？
Ｄクラスは隅にある教室であり、他の階に行くには、中央階段を使わなければいけない。
その階段に行くに廊下を進む必要があるが、その廊下をＦクラスに塞がれている。
つまり・・・
「・・・閉じ込められた？」

15話：その一秒は金より重し

新学期早々に始まった試召戦争は、開始から10分が経過した現在、奇妙なこう着状態になっていた。

先陣に人数の大半を投入したFクラスは数の暴力でDクラス先陣を蹴散らし、そのままD教室前まで足を進めている。その初戦はDクラスが戦死者4人を出したのに対し、Fクラスは0人だったことからも、一方的な展開ということが読み取れる。

これでDクラス側は、教室を出ても片や物理的な壁、片やFクラス生徒らによるある意味物理的な壁に囲まれる事態となってしまい、教室内に引きこもっている。顔を出したのは、先ほど外の様子を見るといった男子生徒一人くらいのものだ。

対するFクラスはどうか。言うまでもなく、格上相手に完勝したことで、士気は上がっている。敵の城に攻め入るとすれば今が最善のタイミングだろう。士気が低いと突撃したとしても及び腰となってしまい、あと一歩踏み込めば勝てる戦でも誰も前に出

ずに負けてしまう恐れがある。ついでに言えば、時間が経てば経つほど下がっていくため、突撃するなら今しかない。

しかし・・・

「いいか、押すなよ！じゃない動くなよ！絶対に動くなよ!!」

「頼む須川！少しでいいから敵の様子を見てきたいんだ！」

「代表の命令だ。余計な事は一切してはいけないって言われているからな。諦めろ」

「お願いだ！先っぽだけでいいから！」

廊下に響く2人の口論。先陣の隊長に任命されている須川と、一人の男子生徒のものである。前に出ようとする男子を須川が止めている形となっている。

が、代表の名前が出てからは男子生徒の声の勢いが少しずつ小さくなっていった。そ

の後も言い争いは続いたが、最終的には須川が押し切った。

「駄目だ。下手に刺激して団体さんで来られたらどうする？勝てるとでも思っているのか？」

締めとばかりに、全員に聞こえるように、それでいてたしなめるように須川が言った。その言葉を聞いた生徒らはバツが悪そうな表情になり、そっぽを向いた。恨みがましく須川を睨みつける者もいたが、当の本人はどこ吹く風といった顔をしている。

声には出していないものの、何人かはこのまま突撃して、一気に勝負を決めるつもりだったのだろう。勢いをつけた状態で敵陣に攻め入り、代表を討ち取る・・・理想的な展開、結末だ。『衝撃！Ｆクラスの底力！』という見出しと共に、明日の校内新聞の一面に掲載されるであろう。

が、勿論それは理想でしかない。初戦とは何もかもが違うのだ。人数がほぼ同数となってしまえば今度こそ点数の差が勝敗の要因となってしまう。そこに士気を加味しても、勝てる構図が思い浮かばない・・・

『・・・だから、敵を閉じ込めたらそこから動かないでくれ。絶対にだぞ。時間を稼ぐ

ことが、一番の勝利への近道だ。そして・・・』

雄二の言葉を誤りなく実行している須川。朝、一人的確に雄二に質問したことで、その冷静さを買われ隊長に任命されたが、その抜擢は今の所、成功していると言えた。

代わってＤクラスはどうか。４人戦死したとはいえ、『今現在』では戦力で勝っている状態だ。いくら相手が大勢とはいえこちらとて大勢、全員で打って出れば、悪い結果になることはないだろう。

それでも動かないのにはそれなりの理由があった。

「不味いぞ・・・早めに先生を連れてくるべきだった・・・」

代表の平賀が呟く。教室内にいるのは生徒４６人だけ、他はいない。

油断があった。格下相手ということもあって、ほとんど何も準備しないままDクラスは戦争に突入したのだ。教師は相手が用意しているであろうからそれで戦おう、さっさと終わらせて帰ろう、と作戦も何もあったものじゃない。逃げ帰ってきた男子生徒の報告を聞いてようやく真面目に戦争について考え始めたのだから手遅れもいいとこである。

とはいえ、これで平賀を責めるのはお門違いだ。他のクラスメートも多かれ少なかれ、同じような思考だったからだ。『馬鹿どもがイベント感覚で仕掛けてきた』と思ったものもいたくらいだ。本気でFクラスが自分たちに勝とうとしているとは思わなかったのだ。

学校が始まって1日どころかその半分も経っていない状況で、どうやって上位クラスに勝てるというのか。

後悔ばかりが浮かぶが、頭を抱え込んだところで何も事態は好転しない。一旦気持ちに区切りをつけ、今の状態を冷静に考えようとする。

深くまで攻め込んだFクラスと閉じ込められたDクラス。頭の中に構図を浮かべたところで自然と出てきたのがさっきの言葉である。

準備をしていなかった、つまりフィールドを展開する教師どころか、回復試験用の教師すら呼んでいなかったのである。教室内にいるのは生徒だけだ。回復アイテム縛りで一狩りしようぜ！というようなもので、結構つらい。

呼んでくればいいじゃないか。

ごもっともな質問である。いないなら職員室まで行けばいい。問題は、道を塞ぐＦクラスが通してくれるかどうかだが、抵抗なしの素通りはありえない。必ず、戦闘が起きる。その時の教科は何か。日本史だ。自分たちより高い点数をたたき出している生徒（須川）と戦わなければいけないのだ。ここで問題が発生した。

『お前が逝け』・・・この一言にＤクラス生徒の感情が集約されているといえた。

何度も言うが、今ぶつかればどう考えてもＦクラスのラインは後退する。須川一人の、仮に須川以外にも高得点者がいたとしても数人が高得点程度では支えきれない。精々、Ｄクラスの何人かを道連れにできるくらいだろう。

そう、裏を返せば、最初に突撃したものは点数の減っていない状態の須川と当たることになり、戦死する可能性が高いのだ。

Dクラス生徒は学年全体から見ると、平均より少し下に位置する人々で固められている。頻繁に、というほどではないが、昨年に鉄人の補習を経験している者が多く、その恐怖を身に持って知っている。戦死すれば、あの惨劇をもう一度味わうことに・・・。

まとめると、名誉ある一番槍の譲り合いという日本人特有の精神（）により、先頭が決まらないまま時間だけが過ぎていっているのだ。

平賀は気が強い方ではないため、他生徒に「お前が逝け」とは言いたくない。仮に心を鬼にして突っ込ませた場合、後々根に持たれないかという心配もある。

「・・・誰か、先頭に立ってくれる者はいないか？」

この言葉を言うのも何度目だろうか。皆の反応・・・全員が目を逸らす・・・を見るのも何度目だろうか。平賀は頭を抱えた。

最終的に批判を最小限に抑えるじゃんけんで決めることになるが、Dクラスは結構な時間を無駄にすることになった。

「おい、本当にそれでいいのか？」
「ああ」
　再び視点が変わってＦクラス。須川は戸惑いの表情を見せるクラスメートの言葉に、しっかりと頷いた。前々から知らされていた数人を除いて、他の皆も困惑している。ここでも雄二の名前を出すことで理解してもらったが、納得までしている者は多くないようだ。
（・・・まあしょうがないか。俺も最初は同じ反応したしな）
　苦笑いを浮かべる須川。彼自身も初めは納得がいかなかった作戦だ。懇切丁寧に雄二から説明されていなければ、何を馬鹿けたことを思っただろう。冷静な今、考えてみれば、その方法が一番いいことが分かる。
　ふと、前方で音がした。Ｄクラス教室内からだ。今までしなかった音だ。
（・・・そろそろだな。）

時計を見る。長針は4を指していた。それは、膠着状態が優に１０分以上続いていたことを表している。

上出来だ、と須川は呟いた。

「木下、そろそろだ」

「わかったのじゃ」

呆れたような顔を浮かべる木下。その顔を見て、やっぱり女子なんじゃないかと思ったが、口に出す前に、遠くから大声が聞こえてきた。その大きさたるや、Ｆクラスと比べてもそん色ない。後ろは見えないが、間違いなく、自分たちと同じくらいの人数はいる。

恐らく、数と点数に物を言わせて、こちらを壊滅させるつもりだろう。

・・・そう上手くはいかないだろうけどな。

敵が迫ってくるのを見ながら、自らも肺に息を溜め、叫んだ。

「走れお前らあああああ!!!」

自分が大声を出すと同時に、Ｆクラスは体の向きを１８０。変え、走り出した。ちらっとこちらを見て、すまん、という者もいたが、自分の言葉には従ってくれた。

段々と近づいてくるＤクラス生徒らは驚きの表情を浮かべている。逃げたぞ、という声も聞こえてきた。

残った味方は５人。予め、作戦内容を言い渡されていたメンバーである。内容は至極単純なものだった。

『死んで来い』

「いくぞお前らあああああああああ!!!!!」

「「「ひゃっはあああああああああああ!!!!!」」」

多勢に無勢の中、５人は覚悟を決めた目で敵に飛びかかった。

・・・これは余談だが、

「という訳で他の奴らを逃がして死んでくれ」

「断る。誰が好き好んで鉄人の補習受けに行くか」

「「「そうだそうだ!!」」」

「・・・ムッツリーニ、あれを」

「・・・（スッ）」

「「「「乗った」」」」

という会話が交わされていたのだが、取引に応じた５人の名前を出すのは、本人の名誉のために控えさせていただく。また、その様子を見ていた秀吉がため息をついていたが、殿方とはそのようなものであると彼女も知ることが出来たであろう（ぇ

16話：壁に耳あり障子に目あり

カリカリカリ・・・とペンの動く音が聞こえてくる。

教室の中には代表の雄二、補充試験中の明久、ラグナ、その他数名しかいない。腕組みをしてじっと目を閉じている雄二、真剣な表情で問題用紙と向き合い、回答欄を埋めていく明久、ラグナ。

他の生徒らはくっちゃべっている・・・訳はなく、極力声を落としてヒソヒソと会話をしていた。

本音を言えば静かな空気よりも騒がしい空気の方が好きなのだが、夢のようなAクラスの設備、そのきっかけとなるものがかかっているのだ。そのきっかけを掴むには、詳しいことは聞かされていないが今問題を解いている2人がカギとなることくらいは分かる。その2人にちょっかいでも出そうものなら、代表から物理的なちょっかいが飛んできそうですごく怖い。

そんな状況ではさしものFクラス生徒らも大きな声を出す勇気も無い。騒ぐことが好きとはいえTPOは弁えている。

では、Fクラス生徒らは何を話しているか。その答えは彼らの目線の先にあった。

「・・・・・・・」

補充試験を受けている１人、吉井明久である。

彼らは、明久とは親しいわけではない。去年同じクラスだったものは１人いるが、あくまでクラスメートという関係であり、グループ活動の時会話をしたかどうか、という程度である。そのほかの生徒とは接点が無いと言っていい。１年の時の関係を言葉にするとすれば、同学年だろうか。実際、明久は彼らの顔を名前を一致させることができないだろう。

しかし、彼らは明久の顔と名前がはっきりと分かる。

別に明久を恨んでいるわけでは、いや、確かに霧島翔子さんという才色兼備な方と絶賛両想いラブラブ中というのは万死に値する行為であり今すぐ極刑にかけたいのだが決して恨んでいるわけではない。パルパルしたいが。ものすごく妬ましいが。

また、明久に恩があって覚えている、という訳でもない。

理由は、彼の肩書にあった。

『観察処分者』

文月学園生徒、吉井明久につけられている肩書である。処分、という単語からいい意味ではないことが感じ取れるだろうが、実際、かなり悪いものである。まだ創立から四半世紀も経っていない学園とはいえ、その中でたった一人しか任命されていないと言えばその凄さが伝わるだろうか。

重さとしては停学より一段階軽い懲罰であり、なった者は定期的な生活指導と学校の雑用を強制的にすることとなる。生活指導は鉄人との面談が主であり、雑用は書類運搬を中心としたものである。

なにしろ学校初のことであり、明久の名前は悪い意味で有名になった。どんなことをしでかしたのかはプライバシーということで公表されなかったが、秘密としたことでかえって黒い噂が広まったりもした。特別明久と接点が無い生徒が今回の件で彼をどう思ったか、わざわざ言葉で表す必要はないだろう。

だからこそ、それから2か月後、明久と翔子が交際を始めた、という事実は文月学園中を仰天させた訳だが。

その彼を代表はあたかも切り札のような口調で語っていた。ラグナが切り札なのは分かる。去年から熾烈なトップ10争いをしており、今回の戦争の勝敗を左右する存在だ。

では明久は?

一言で言うなら、『馬鹿』だ。去年、観察処分者になった直後のテストで学年最下位になっていたのを見ており、点数がモノをいう今回では、一番戦力にならない奴だと感じている。

そんなのに何故、代表は補充試験を受けさせているのか。

そして何故、そいつが霧島翔子さんとお付き合いをしているのか。

橋姫が寄ってきそうな嫉妬と疑問に満ちた空気を出しながら会話を交わすＦクラス男子生徒たち。代表、明久、ラグナとは距離を十分に取って話していたため、彼らに聞こえることはなかった。

彼らには。

「・・・・・・・」

教室の壁にもたれかかるような姿勢をして立っている女子生徒、島田美波。彼らの会話を、ぎゅっと唇を噛み、睨みつけるような表情で、聞いていた。

「戦死者は補習うぅぅぅ!!」

「「ぎゃあああああああああ!!」」

俵担ぎの体勢で担がれる2人の生徒。2人は何とか逃れようと手足をばたつかせるが、そんな悪あがきが通用するのは一般人が担いでいる場合だ。人間の域を一歩はみ出していそうな鉄人に効果があるはずもなく、絶叫のハモリを響かせながら中央階段へと消えていった。

残って廊下を埋め尽くしているのはDクラスの生徒だけだ。対戦相手がいなくなったことで召喚フィールドが徐々に薄らいでいき、10秒と経たないうちに完全に消えてしまった。

見て分かる通り、Dクラスの圧勝に終わった。Fクラス5人は最初の内は頑張ったが、須川が集中攻撃を受けて最初に戦死するとその後はあっという間だった。いくら叫んだところで状況が変わるはずもなく、最後は2人同時に倒されて特攻隊は全滅となってしまった。

焦らずに攻めたことでDクラス側の戦死者は0人。須川を相手した何人かは点数を大きく削られたが、戦死してなければリカバリーはいくらでも効く。懸念していた生徒を倒すことが出来て代表も満足、

「・・・何故だ」
・・・とはいかなかった。

「何故、あの場面で下がった?いや、下がらなかった?」
ぽつり、とつぶやく。
こちらが総力を上げれば相手が下がっていくことは一応、考えてはいた。相手がどんな作戦を立てているのかは分からないが、点数に物を言わせた押上げには敵わないだろうと。
だが、ぶつかる前にほとんどが逃げて行ったのは予想外だった。そして、話に聞いていた点数の高い　生徒が残ったのはさらに予想外だった。
昔でいう捨て奸(すてがまり)戦法に近いが、１００点台後半の生徒はＦクラスにとって大変貴重な戦力のはずだ。
何故、こうもあっさりと戦死させたのか。
悩む平賀、そんな彼の心を知らないクラスメートが話しかける。
「おっし、楽勝だったな!こんな早く決まるんだったら何もじゃんけんしなくて良

かったな」

「あ、ああ・・・」

悩みに思考を持って行かれていた所為で、そっけない返事になってしまった。不味かったかと思ったが、幸い相手は気にしていないようだった。なおも明るい声で話しかけてくる。

「教師もFクラスが置いて行ってくれたし、このまま突撃して決めちまおうぜ。早く帰りてぇよ」

何気ないその一言。適当に頷こうとして、

（・・・まてよ）

ぴたっと動きが止まった。

今の戦闘で使われたのは日本史である。Fクラスがいなくなったことで、フィールドを展開していた教師はDクラスが抱えることとなった。このまま突撃して・・・

（それが罠だったら・・・）

嫌な汗が流れた。

そう、最初は教師0、相手の一人が高得点者と最悪なスタートだった。それが今、『偶然』にも教師を奪い取ることが出来、『何故』か高得点者が無駄死に近い戦死となった。うまくいっている。否、うまくいきすぎている。

高得点者が一人とは限らない。もしかしたら、さらに高い生徒を隠しているかもしれないのだ。そう考えれば、先ほどの戦死者の説明も理由がつく。自分らを油断させるためにはもってこいの人物だからだ。

なら、日本史は避けるべきだ。

「・・・いや、まずは他の教師を確保しよう」

皆に聞こえるように出した提案。確実性を求めたそれは、

「ええ～なんでだよ」

批判でもって受け取られたようだ。さっきの生徒が口をとがらせてくる。表情も芳しいものではない。早く終わらせたいというオーラをかもし出している。他の生徒も口には出さないだけで、同じことを考えている者多そうだ。

「えっと・・・まあ、万が一に備えてだ」

「万が一って・・・まあ、いいけどさ。なら早く連れてこようぜ」

先ほどの考えを話すとなると、多少の時間が必要となる。敢えて明言は避けたが、何とか納得してもらえたようだ。

Dクラスは職員室にいる教師を呼びに行くため、とりあえず中央階段前まで固まって進んだ。

そして平賀が指示を出そうと前に出た所で・・・

「先生、お願いします！」

「承認します」

聞き慣れていない教師の声が聞こえた。

１７話：奇襲は大抵失敗する

どこからか聞こえてきた声。その言葉の意味を理解する前に景色が変わった。目の前に広がる廊下が若干ぼやけた、と思ったら小さな半透明のフィールドに囲まれた。その中に入っていた、いや入ることが出来た人物は自分にＤクラスの生徒数名、そして・・・

「あんたが代表だな！勝負を申し込むぜ！」

突然この場に出てきた１人の生徒だった。中央階段に隠れていたのか、自分たちの横から登場した彼は、間髪入れずに勝負を申し込んできた。

あまりにも不意の事にきょとんとしてしまったが、数瞬遅れて頭が回転を始める。

後ろの生徒がなんだなんだ、と騒ぎ始めた。人が壁になって見えないものもいるみたいだったので、心配するなと声を挙げたのち、隣の人物と顔を合わせた。

（奇襲？）

（・・・みたいだな）

小声でつぶやくと、反応を返してくれた。フィールド内にいた他のクラスメートも、状況を把握したようである。

自分が前に出てきたところを狙って勝負を仕掛け、あわよくばといった所か。クラスメート数人が自分をかばうように前に立つ。

「・・・おい！さっさと召喚しろよ！」

男子生徒が叫ぶ。顔を紅潮させて、こちらの召喚を今か今かと待ち構えているようだ。フィールド内で勝負を申し込まれたため、避けることは出来ない。ここで故意にフィールド内から出てしまったら、その瞬間自分らの負けが決定してしまう。そんなことになったらクラスメートから殺意の波動を一身に浴び、明日には皆勤賞が途切れてしまうだろう。

召喚したいのだが、気になるのは敵・・・Ｆクラスの人数だ。
中央階段にはもう人影が見えない。今出てきた生徒と先生の２人だけだ。廊下の先にも人が見えない。人数が少ないから先が良く見える。Ｆクラスの教室まで見えているが、誰も出てくる気配が無い。
そうなると、目の前の１人だけで戦うということになる。１人だけで？
「平賀君、早急に召喚をお願いします。」
その理由を考えようとしたが、教師に遮られた。その声で、それなりの時間考え込んでいたことに気付く。
（・・・やるしかないか）
どのような手を使ってくるか分からない。相手の動きを見逃さないよう、目を逸らさずに手を前に伸ばす。それを見て周りのクラスメート数人も同じような姿勢を取った。

「「試獣召喚！」」

声と共に、試験召喚獣が魔法陣から生まれる。自分の召喚獣は、戦国時代の武将が纏っていそうな鎧をガッチリと着込んでおり、背中に槍を背負っていた。その召喚獣を守るようにして、仲間の召喚獣が陣取った。

「試獣召喚！」

相手も掛け声をあげて自分の召喚獣を召喚する。

『　教科　数学
　Ｄクラス　平賀源二（代表）　１３２点
　他Ｄクラス生徒５名　　平均１１８点
　　ＶＳ
　Ｆクラス　内川宏治　　８６点　』

自軍６体、敵軍１体、計７体の召喚獣が場に揃った。フィールドが狭いため、こ

れ以上の人数は入ることが出来ない。フィールドの広さは教師によってまちまちで、このように１０人しか入らない場合もあれば、校舎の半分を覆うことができる場合もある。

わざと範囲の狭い教師を選んでこちらの人数を制限しワンチャンにかける、といった作戦だろうか。実際、点数もＦクラスということを考えれば悪くない。

とはいえ、この状況ではあちらに勝ち目はないはずである。どう動くのか・・・

「おらあ、行くぜぇ！」

って、いきなり突っ込んできた!?

「た、頼むっ！」

もっと様子見などをすると思っていたので、予想外のことに声が上ずった。サーベルを構えた相手の召喚獣がどんどんとこちらとの距離を詰めてくる。

自分がダメージを受けるわけにはいかない。フィールドのギリギリまで下がって、念のために槍を構える。前方には武器を構えた仲間たち。壁にするようで申し訳ないが、

今はこの方法が最善である、と自分に言い聞かせる。

敵は、自分が引っ込んでも尚、向かってくる。そして、仲間たちの間合いに入る直前に武器を振り上げた。こちらの召喚獣も対抗するようにそれぞれ武器を振り上げ、

『ザシュッ！』

「・・・・・・あ、あれ？」

戸惑うような声。その言葉をつぶやいたのは、先ほどまで威勢の良い声を挙げていたFクラス生徒だった。

彼の召喚獣はサーベルを振り下ろそうとした体勢で静止し、その体は串刺しとなっていた。誰がどう見ても致命傷という言葉以外が出てこない状況だった。

その体が徐々に消えていき、消滅する頃には・・・

「戦死者は補習うううううう!!」

悪魔の大声が聞こえてきた。

「なんだったんだ、今回は・・・」

自分らしかいなくなった廊下でため息が漏れる。

不意を突かれた形で始まった今回の戦闘だったが、文字通り一瞬でカタがついた。1人で突っ込んできた相手はこちらに1ダメージも与えることなく鉄人に連れて行かれた。最初に酷い目にあったので罠があるのではないかと警戒したが、肩透かしを喰らった格好である。

見通しがさらに良くなった廊下、遠くにはっきりとFクラスの教室が見える。戦闘中、そして戦闘が終わった後も誰一人出てこない。自分が召喚した時に何人か加勢に来るのかと思ったが、最後まで動きが無かった。1人のスタンドプレーだったのかと考えてしまう。

「いやー、しかしラッキーだったな代表」

「・・・そうだな」

盾になってくれたクラスメートが声をかけてくる。軽やかな声に合うように、顔も笑顔であった。理由は分かっている為、自分も頷いて見せる。

クラスメートの言葉通り、ラッキーなことが起こったのである。それも2つだ。

1つはタダで敵の数を減らせたことだ。最初の5人に加え、今回の1人で合計6人を戦死に追い込むことだ出来たのだ。しかも中々の高得点者を、である。今後の展開に有利に働くのは間違いない。

もう1つは、Fクラス生徒が連れて行かれたことで、数学の教師を取り込めたことである。教師を1人連れてくる予定だったのが、結果として敵が連れてきてくれた形になった。これで自分たちは日本史と数学、2教科を行使することが出来る。

「連れてくる手間省けたし、とっとと決めようぜ」

「そうよ、早く終わらせて帰りましょうよ」

クラスメートが口々に話しかけてくる。それはまさしく異口同音であり、全員がこのまま突撃して戦争を終わらせることを望んでいた。自分としても早く終わらせたい気持ちが強い。それに、教師をよんだら攻め入るといった手前、ここでまた様子見をすると発言したら、今度こそ非難されような予感がする。

結局、皆に押し切られる形で、Fクラス教室へ突撃する命令を出した。自分の言葉

を聞き、喜ぶクラスメートを横目に、後ろに下がる。
・・・まあ、大丈夫だろう、と自分に言い聞かせた。

廊下から足音が聞こえてきた。音からして１０人やそこらで無いことは明白であり、その音はどんどんとこちらに近づいてくる。
「来たか」
誰にも聞こえないようにつぶやき、教室に備え付けられていたオンボロの時計を見上げる。長針は既に6を過ぎていた。
足音を聞いたクラスメートが色めき立つ。最初の先頭から無事に帰ってきた生徒らで教室中があふれていたため、一気にうるさくなった。
「静かにしろ、２人の迷惑になるだろーが！予定通りに動け！勝利はもうすぐだ!!」
バカ久、ラグナをチラ見しながら叫ぶと、彼らは大人しくなり、教室の扉の前に歩いて行った。勝利、という言葉に反応したのだろう。現金な奴らである。最も、現金であるが故、自分の指示に素直に動いてくれるのでありがたい。
「よし・・・島田」

何重にも扉の前を塞ぐクラスメートを見ながら、1人の名前を呼んだ。その人物は戦争が始まった時からずっと壁に軽く背中を預けており、自分の呼びかけに対して

「・・・・・・」

返事を返さなかった。

いや、違う。そもそも自分の言葉が聞こえていなかった。

ゆっくりと島田の方に歩いていくと、じっと同じ場所、というより同じ人物を見ていた彼女は、こちらに気付き顔を向けた。

「どうしたの・・・代表」

「敵が来たみたいだ。頼んだぞ」

「・・・ああ、分かったわ。気付かなくてごめん」

こちらの言葉を聞き、何回か瞬きをしたのち口を開いた。その後、フッと顔を背け、クラスメートが集まっている扉の前に移動した。

足音はもうそこまで迫ってきていた。

１８話：アイエエエ!ダイヒョウ!?ダイヒョウナンデ!?

廊下を走るＤクラスの面々。出鼻を挫かれてからいい思いをしてこなかっただけに、その足には自然と力が入る。下位クラスに振り回されてきた嫌な感情をぶつける為、そして戦争を終わられるため、相手のいる教室、Ｆクラス教室に向かって足を進めていく。

本来であれば、もっと早く終わっていたはずの戦争である、とＤクラスの大半、いやほとんどの生徒は思っていた。当然である。敵は最下位であるＦクラスであり、今日が初日のため回復試験すら受けていない状態である。回復試験を受けていないということは振り分け試験の点数で戦うということのため、１０分もあれば決着がつくだろう、と高をくくっていた。

それがＦクラスに押し込まれたばかりか既に３０分以上の時間が経過している。さっさと圧勝して帰ろうとしていたＤクラスは当てが外れたばかりか、いらない恥まで

かいてしまった。というのも、ほかのクラスは自分らの戦争により自習中となっている。教師が見ていないことをいいことに騒いでいるクラスがほとんどだろうが、それでも扉越しに廊下の状況ははっきりと伝わっているはずだ。つまり、下位クラスに押し込められたことも他クラスにはきっちり伝わっているのだ。

準備をしないで戦争に挑んだことを考えれば自業自得なのだが、Dクラスは格上としてのプライドを傷つけられたことになる。自分たちも下から数えたほうが早いとはいえ、最下位クラスに苦戦したというレッテルを貼られることは我慢ならないのだ。それに加え、時間がかかりすぎていることも、拍車をかけている。

だからこそ、Dクラスは全力で走った。この突撃で瞬時に勝負を決め、Fクラスなど敵ではない、という事を証明するために。さっさと終わらせ、自由時間を作るために。

だからこそ、Dクラスは最後まで気づかなかった。自分たちが負ける可能性が十分にあるということを。勝敗は初めから決定されたものではないということを。

「先生、お願いします！」
「承認します」
先を走っていた男子生徒が教師に声をかけると同時に、フィールドが出現した。展開したのは先ほどDクラスに加わった数学教師である。ゆえに、その範囲は日本史の教師と比べると明らかに狭いものであった。Fクラスの目の前で展開したというのに、Fクラス教室全体を囲えていない。まあ、扉さえフィールド内にあればよいので問題ないといえばそれまでだが。

ともかく、フィールドを展開したことで教室内にいるであろうFクラス生徒らも自分たちの接近に気付いたはずである。だが、出てくる気配はない。
後ろから続々と生徒が到着し、完全に教室前の廊下を占拠した状態になっても、相手は出てこなかった。

（籠った状態での持久戦に持ち込む気か？）

それはまずい。自分たちのクラスは面子的にも、感情的にも早期決着を望んでいる。教室内に同じ科目の教師がいた場合、回復試験を上手く使われゾンビ戦法なんてされたら、イライラによってクラスメートの感情が爆発する可能性がある。

そうならないためには、相手に回復の余裕を与えず押し切ることしかない。

「もう敵は袋の鼠だ！押し切れ！」

「おうよ！サモン！」

代表である自分の掛け声とともに、先頭に立ち人物が扉に手をかけ、一気に開いた。生徒はそのままの勢いでなだれ込もうとしたが、教室内から聞こえてきた声に足を止めた。

「勝負を仕掛ける！サモン！」

その声が、教室から少し離れている自分のところまで届いてきた。Ｆクラスの生徒が迎撃に召喚獣を出してきたみたいだ。できればもう少し前に出て状況を確かめたいが、これ以上進めば自分もフィールド内に入ってしまうため、前にいる人から口頭で伝えてもらうしかない。先頭の生徒に向かって叫んだ。

「おーい!どうなっている!?」

大声をだしたつもりだった。しかし、返事は返ってこなかった。こちらに顔を向けず、視線を教室の中に固定していた。・・・その横顔をよく見たら、目を見開いているようだった。

聞こえていなかったのかと思いもう一度声を出したら、ギギギギ、と壊れたおもちゃのようにようやくこちらを向いた。その顔は、一言でいうなら『驚愕』だった。

「だ、代表っ!相手の」

そこまで言いかけたところで教室内から物体が飛んできて、小さな放物線をかき、フィールドの壁に当たった。

それは男子生徒の召喚獣だった。頭に表示されている数字は既に０になっており、すぐに消滅した。

「戦死者は補習うううううう!!」

そして点数がなくなったら地獄行き。生徒はどこからともなく現れた鉄人に担が

れ、聞くものすべての心に響く絶叫を残して遠ざかって行った。

・・・彼はいったい何を見たんだ?最後まで言い終えることができずに消えていった彼だが、内容が気になる。次いで指示を出す。

「斉藤、中の様子はどうなっている!?」

「待ってろ、今すぐ見てくる。サモン!」

戦死したものからは情報をもらうことはできないため、先頭付近にいるまとめ役を頼んだ人物に声をかける。数学が得意という事で任命したのだが、どれほどの点数だろうか?

出てきた召喚獣は西洋風の鎧を身に纏って、腰に細剣(レイピア)を提げており中々の格好だった。次いで、点数も表示される。

『教科　数学

Dクラス　斉藤俊憲　１８５点』

１８５点。Bクラス、もしかすればAクラスにも匹敵する点数であり、クラスメートからも歓声が起こった。自分も思わず声で驚きを表現してしまった。それほど高い点数なのだ。

これなら行ける。彼を中心にして絶え間なく攻撃すれば、あっという間になだれ込めるはずだ。ようやく終わりが見えてきたが、逸る気持ちを抑えて、聞こえるように叫ぶ。

「斉藤、敵を蹴散らしてくれ!フィールドに入っている者は加勢するように!扉を突破次第、日本史に切り替えて全員で攻める。そうすれば勝ったも同然だ!なんとしてでも突破してくれ!」

「ＯＫ!、行くぜ!」

「「分かった!」」

フィールド内にいた生徒らが声を挙げ、扉から中に入り込もうとする。そのとき、小さな影が２つ、教室内から廊下に飛び出してきた。先ほどとは違いまだ教室に入っていないため、敵の召喚獣だろう。その姿をよくみようと背伸びをして、

「・・・・・・は?」

間抜けな声が出た。自分でもこんな声が出せるのか、というような変なものだった。周りのクラスメートに聞かれたら嗤われ、２週間くらいはネタにされそうなものだ。が、それはない。

自分以外の生徒も同じような声を出していたからだ。フィールド内にいる斉藤も、だ。

なぜなら・・・

「おお怖い。もうここまで来たのか。まあ、相手になってやるよ」

『Ｆクラス　坂本雄二（代表）　４７点
Ｆクラス　島田美波　　２７２点』

相手の代表が最前線にいたのだから。

耳元に、アラーム音が入ってきた。どうやら時間のようだ。せわしなく動かしていた手を止めて、うん、と背伸びをする。

アラーム音を発した腕時計を覗き込む。・・・問題用紙との格闘は４０分間だったようだ。できればもう少し点数を上げたかったが仕方ない。勝つために最後まで解こうとして、その間に雄二が討たれては本末転倒である。

「先生、早いですが採点をお願いします」

筆記用具を片付けながら、先生に答案を渡す。チラッとラグナを見ると、順調に問題を解いているのが分かった。ラグナは時間いっぱい使って回復試験を受けることになっている。まあ、自分のほうが短いからと言って点数で負けるつもりはないが。

「まあ、ぼちぼち行きますか」

採点結果を待ちながらつぶやくのはＦクラス生徒、吉井明久。

事態は終盤戦に差し掛かろうとしていた。

19話：切り札は最後まで取っておくべきそうするべき

Fクラスの代表が最前線に出てきた。そのことを認識したとき、俺は欲を抑えることができなかった。

「斉藤！代表を討て！」

「言われなくても倒すぜ！」

その言葉は無意識の内に出た。自分も代表という立場のため、この戦争中は常に冷静であろうと言い聞かせながら動いてきたのだが、突如目の前に出てきた勝利の可能性に飛びついてしまったのだ。

普通なら、これは罠だと考える。考えてみてほしい。戦死すれば即クラスの敗北が決定してしまう代表が、大した点数を所持していない状態で先頭に出てきたのだ。馬鹿な

Ｆクラスだから出てきた、という考えはもう通用しない。この場合の『馬鹿』とはあくまで点数が低い者への言葉である。

逆に言えばそれだけだ。点数が低いからと言って、自分たちＤクラスと同学年であり、今までの生活を通してそれなりの常識を身に着けているはずである。代表が先頭に立つという行為がどれだけ非常識なものであるか・・・仕掛けられた自分たち以上に、実行したＦクラス自身が分かっているはずだ。例えるなら未来日記をジャグリングしながら相手とバトルをするような状況であり、リスクが大きすぎる。このことを考慮すれば、出てきたＦクラス代表に対して点数の低い生徒をぶつけて様子を見る、といった行動も考えられた。

だが、無理だった。自分にはそれができなかったのだ。

「うおおおおおお!!」

斉藤の召喚獣が敵代表の召喚獣に突っ込む。これで終わらせる、という気迫のこもった声と合わせての突進であった。レイピアを真っ直ぐに構え、わき目も振らずに走って行った。その勢いに乗り、最前線のクラスメートもすぐに召喚獣を召喚した。

『数学

Dクラス　蘆谷瀬　　１３１点
山崎蓮子　　１２２点
大谷孝弘　　１０１点

』

出現した召喚獣は、地に足を付けると同時に駆け出していく。3体の、いや、合計4体の召喚獣とその召喚元である4人の視線は当然のごとく、一点に集中していた。追随するようにフィールド外の生徒らも隙間無く扉を包囲する。フィールドの狭さが響き、これ以上は召喚できないが、誰かが戦死してもすぐに入れ替わることができる体勢をとっている。もちろん、斉藤が勝負を決めてしまえばそんなことをしなくてもよい。

「・・・ったく、モテ期到来か?男には興味ないんだがなぁ」

そんな緊迫した場にそぐわない声を挙げる者がいた。赤に近い髪を持つ長身の男子、坂本雄二その人である。どんどんと近づいてくる敵の召喚獣が見えているはずなのに、二ヤついた笑みを隠そうとしない。その表情からは、緊張や不安が読み取れなかった。

絶対に何かある。

こうまでされたら、いくら自分でも違和感に気付く。だが、その時には最前線の人物らが突撃をしていた。瞬時に、止めようとしても無駄だと感じた。代表である自分が宣言した攻撃命令、それを止めることができるのは自分だけである。しかし、ここで中止命令を出せば、一度生まれた勢いを消してしまう恐れがある。

何より、優柔不断な代表だと思われるのが嫌である。命令して、それをすぐに取り消すような者にいつまでも従ってくれるほど、クラスメートは仏様ではない。なにより、教師を呼んでくる時の件で、軽い反発を受けている。

（これ以上信頼を失うのはまずい・・・）

そう考えた自分が選んだのは、『突撃を止めずに戦況をみる』ことだった。言い方を変えれば命令だけ出して何もしない、とも読み取れる行動である。その決定の根本にあったのは、クラスメートとの関係の配慮であり、この戦争の勝敗への影響などはあまり考慮されていなかった。

相手がＦクラスとはいえ油断してはならないと思っていたはずなのに、最後まで『自分たちはＤクラスだしなんとかなる』という気持ちを捨てることが出来なかったのだ。

自分が心を決めた時には、斉藤の召喚獣は間合いに入ろうとしていた。相手と倒そうと武器を手元に引き寄せ、溜めの体勢を作り、どんどんと相手との距離を詰めていく。それでも相手の代表は動かない。召喚獣とともに、腕組みのポーズをしたままでいる。

そして、剣の間合いに入った。溜めた状態からレイピアが突き出される。その剣先は真っ直ぐに、相手召喚獣の胸に吸い込まれようとしていた。

いけるか!?、と思わず身を乗り出した。

『教科　数学

Ｆクラス　島田美波　２７２点

ＶＳ

Ｄクラス　斉藤俊憲　０点　』

一瞬後には、斉藤の召喚獣が真っ二つに切り裂かれていた。
何が起こったのか、さっぱり分からなかった。あれだけ勢いある声を挙げていた斉藤が口を開けたままの状態でピタリと止まった。本人も何が起きたか分からないようだった。１８１点あった点数が０点になっている。・・・いや、正確に言えば、自分も斉藤も分かりたくなかっただけなのかもしれない。
エースが戦死したことで他の３人も足を止めている。本来なら、戦死した人数分カバーに入らなければいけないはずの、周りのＤクラス生徒らも足を止めている。希望の星がこうもあっけなく散ったのだから仕方のないことだ。
そんな中、ゆっくりと動く人、いや、召喚獣がいた。西洋の軍服のようなものを纏い、右手に持ったサーベルを振りぬいた格好から、静かに構えを解く。Ｆクラス代表の召喚獣にレイピアが触れる直前、教室から飛び出して武器もろとも斉藤の召喚獣を真っ二つにしていたのだが、この時の自分は代表の召喚獣だけを見ていたせいで、その動きに気付くことが出来なかった。生徒らは放心した顔でその召喚獣に焦点を合わせ、表示されている点数を視界に収め、再び呆然とした。

「代表、引き付けすぎ。少しヒヤッとしたわ」

沈黙を破るように、廊下に声が響く。あまり大きい声ではなかったが、Dクラス全員が呆然としている状況だったため、その声は自分のところまではっきりと聞こえてきた。間を置かずして、女子が一人、教室から出てきた。その姿は、着ている服装を除けばサーベルを持った召喚獣と酷似している。

それと入れ替えるように、相手の代表の召喚獣が扉の向こうに隠れてしまった。攻撃が当たる瞬間に後ろに跳び、そのまま味方が大勢いるであろう教室に入って行ってしまったのだ。しかも、女子のほかに数体の召喚獣が扉を通せんぼする形で出てきた。

この光景を見せられれば、いくら呆然とした頭脳でも理解できる。

自分たちは嵌められた。最初、代表だけでなく女子の点数も表示されていたにもかかわらず、自分たちは代表ばかりに目がいってしまい、ほかのことを見ようとしなかった。仮にきちんとみていたとしても、Fクラスだからという理由で、見間違いと処理していただろう。

「釣られクマー・・・ってか？いやはや見事に引っかかってくれてありがとうな」

「・・・っ、てめぇ！」

「ば、馬鹿！追うな！」

代表の言葉が気に障ったのか、すでにフィールドに召喚している生徒３人が、扉を突破しようと突っ込んだ。だが、２００点近くあっても一撃で粉砕されたのだ。Ｄクラス平均レベルのものが束になって掛かったところで、勝てる見込みは薄い。声を挙げて止めようとしたが、その時には相手の間合いに入っていた。

３体の召喚獣が剣を振りおろし、対する相手の召喚獣はサーベルを振り上げる。ガキン！、と耳障りな金属音がして、お互いの武器がぶつかったのだが、意外なことに、そのまま拮抗状態になる。１対１であればバターのように武器が真っ二つにされていたところだったが、３体分の力が集まったことでなんとか相手の点数に対抗できていた。

しかし、それでは負けと同じである。

『ザシュッ！』『ザクッ！』

３体のうち、両脇の２体が剣で、槍で体を貫かれ消滅した。それにより点数の拮抗が崩れ、残った１体の召喚獣の剣が真っ二つにされる。点数で負けているうえに武器なしでは勝てるはずもなく、数秒も持たずにサーベルで切り裂かれて０点となった。

『数学
Ｆクラス　島田美波　２７２点
　　飯田清　　８４点
　　伊東真司　４９点
ＶＳ
Ｄクラス　蘆谷瀬　　０点
　　山崎蓮子　０点
　　大谷孝弘　０点　』

こちらが束で戦うことができるなら相手だってそうである。２体の召喚獣が動いたところは、Ｄクラス生徒３人も見えていたみたいだが、迎撃しようにも今目の前にある

サーベルを抑えるので精一杯だったため、動くことができないままモロに攻撃を受けてしまったのだ。

鉄人に担がれ、（絶叫付きで）去っていく3人に心の中でお祈りをしながら、これ以上数学で戦うのは不味いと考えた。Dクラス平均レベルの点数では、3，4人が束になってやっとあの女子と戦えるか、といったところだ。当然、ほかのFクラス生徒も相手にしなければいけないため勝てる見込みが薄い。数で押そうにも今の教師が展開している召喚フィールドが狭すぎる為、十分な人数を召喚できないだろう。

見渡すと、いまだに混乱から抜け出せていない状態のクラスメートらがいた。考えている余裕はあまりない。すかさず、大声を出す。

「落ち着け皆！今からフィールドを切り替える！相手はFクラス、一教科たまたま高かった相手だ！日本史のフィールドに変え次第、皆召喚して扉に突撃するぞ！・・・先生、お願いします！」

数学教師にフィールド解除をお願いし、同時に日本史教師にフィールドの作成を頼んだ。二人の教師は大声に驚いた表情を見せたが、自分がよほど必死な顔をしていたのだろう、すぐに承認してくれた。フィールドがいったん消え、直後に何倍もの広さを持つフィールドが生成された。その範囲たるやFクラス教室はもちろん、隣のEクラスにま

で届きそうな広さである。自分たちDクラス全員がフィールドに入ることができ、なお余裕があるほどだ。自分の声の効果もあったのか、あるいは展開されたフィールドに気付いただけなのかは分からないが、クラスメート達が正気に戻り、次々と召喚の呪文を口にしていく。

『日本史
　Dクラス　合計４２人　　平均１２９点』

召喚獣を人口、といっていいかは疑問であるが、もともと詰めて立っていたFクラス前廊下の人口密度がさらに高くなった。これでDクラスの全戦力がここに集結したことになる。
対するFクラスは・・・

目をこする。錯覚だろうと思い、いや必死に思い込み、何度も目をこする。何度も、何度もだ。目の前の光景を否定するために、自分は目をこすり、はっきりと目を開いても

う一度それを・・・その人物を見た。
「この瞬間を待っていたよ！試獣召喚！」
その人物をはっきりと目にし、その声をはっきりと耳で聞き、それでもなお、自分は否定しようとした。ありえないと首を振った。目の前の人物を現実として認めてしまえば、それは・・・
「・・・何故だ」
それは・・・
『日本史
Ｆクラス　吉井明久　５６２点　』
「何故君がっ、Ｆクラスにいるんだ!?吉井君！」

自分たちの敗北を認めることと同じなのだから。

２０話：チートってレベルじゃねえぞ!

一旦、わずかに教室内まで作用していた半透明のフィールドが消え、すぐに教室全体を覆う大きさのフィールドが展開し直された。

「今だ明久!」

雄二がそう叫ぶ前に、自分は教室から飛び出した。

試験召喚戦争開始時の時点では、全教科０点だったため補充試験を受けなければならず、４０分ちょっとの間に一教科の点数を回復させた。選んだ、というより雄二に指定された教科である日本史の補充試験を必死に解いて５分前に先生に提出、つい先ほど採点が終わり点数補充が完了したところだ。

自分に課せられた作戦自体は至って単純、『点数補充後、日本史のフィールドが展開され次第、思う存分暴れてこい』というものだった。実は試験を受けている間も、

（暴れてこいって言われたけど、そうそう簡単に狙った教科が展開されているかなあ）

と疑問に思ったりもしたがさすがは雄二、ベストの状態を作ってくれた。

ここまでお膳立てをしてもらったのだ。やる気が起きないわけがない。自分の採点を担当した教師が何か驚いた表情をしているみたいだったが、そちらに注意を向けることはなかった。

「この瞬間を待っていたよ！試獣召喚！」

叫びながら教室を出ると、島田さんとばっちり目があった。

「「あ・・・」」

奇しくも声が被る。ついさっきまで彼女が戦闘をしていたことは聞こえてきた音か

ら分かっていたが、目を合わせると、今までの件もあり、戸惑いが生まれた。
しかし今は試験召喚戦争中である。個人的な感情をなんとか抑えて、島田さんを守るように前に出た。

「し、島田さん!作戦成功したから後は下がって!」

「・・・う、うん・・・」

背を向けていたため島田さんがどんな表情をしているのかは分からなかった。・・・正確に言えば、これ以上彼女の態度をこの目で見るのが怖かったから、前にでたのかもしれない。
島田さんは自分の登場に驚きをみせたが、その後の返事とともに気配が遠ざかって行った。戸惑いながらも聞き入れてくれ、教室にもどったみたいである。

このまま島田さんとモヤモヤした状態を続けていくのは不味いと思いつつも、目の前のことに集中する。勝敗は自分にかかっているのだ。よそ見して戦死なんて真似をすれば雄二に殺される。いやマジで。

廊下を見渡すと、全員の生徒とその召喚獣がこちら側を向いていた。どうやらFクラスは自分一人だけのようである。となると島田さんが最後の一人だったみたいだ。まったく、最後まで女の子を前線に立たせているなんてダメじゃないか雄二。そうゆう役は瑞希が適任だって。今瑞希いないけど。

『日本史
　Fクラス　吉井明久　５６２点』

５６２点。まあ、一時間フルで受けることが出来なかったししょうがない。本音を言えば、この人数相手だったらもう少し点数がほしかったところだ。といっても最初は直接戦うわけではないのだが。

「・・・お、おい、なんだよその点数！ふざけてるのか!?」
「よ、吉井!?なんであの吉井がFクラスなんかにいるんだ！」
「いや吉井ったら観察処分者の馬鹿だろ！Fクラスにいて当然じゃ・・・」

「馬鹿はお前だ!吉井だぞ!?首席候補の!」
「首席!?お前こそ何言ってんだ!」

自分を見たDクラス相手がギャーギャーと騒ぎ始める。こちらを見ながら怒鳴る者もいれば、クラスメートの言葉に反応して、後ろを振り向いて声を挙げる者もいる。僕自身についての内容のようだが、意見が食い違っているようだ。自分の召喚獣をフィールドに出しているにも関わらず相手から目を離すなんてと思ったが、自分にとってはありがたい行動のため、わざわざ注意する必要はない。

手加減はしない。一気に決める。

深呼吸をした後、自分の利き手である左手を見た。そこには、フィールド内に入るまでは存在しなかった、黒と紫の色が混じった、毒々しい腕輪が手首に嵌っていた。

それは高得点者の証にして、一つで試験召喚戦争のパワーバランスと一変させる希望の、相手から見れば絶望の道具である。

「さあ、『潰れろ』！」

腕輪を相手に見せるようにして起動する。自分の声を聞き、喧騒の中でもじっとこちらを警戒していた何人かが、召喚獣を動かそうとした。

だが、動かなかった。

指示ミスをしたのかと思ったらしい。Dクラスの生徒らはしっかりと召喚獣を見て動かそうとし、異変に気付いた。

召喚獣たちが、地面に倒れていた。

いくら動かそうとしても、召喚獣は動かない。

手を付き、必死に起き上がろうとしても、体が地面から浮かない。

まるで、糊で貼られたように。まるで、『重力に押しつぶされるかのように』。

数人単位ではない。明久を囲うようにしていたＤクラス召喚獣のほとんどが地面に倒れていた。

そして１０秒後、廊下を埋め尽くさんばかりだった召喚獣は

ぺしゃんこになって消滅した。

『日本史
　Ｆクラス　吉井明久　　２３７点
　　ＶＳ
Ｄクラス　平均１３６点×４人
Ｄクラス　０点（戦死）３８人』

喧騒にまみれた廊下に再び静寂が訪れた。

腕輪の効果は聞いていたし、観察処分者という身分柄、ほかの生徒より召喚獣のことについて詳しいと自負している。それでも言わせてもらおう。

「・・・チートすぎるっしょ、これ・・・」

いや、強力だっては聞いていたけどここまでだとは思わなかった。なんだろう、爽快さを通り越して寒気がする。廊下にいたのが自分だけで本当に良かった。もし、ほかのクラスメートがいたらもれなくＦＦ（フレンドリーファイア）して、リアルファイトが始まっていただろう。

予定としては腕輪の能力で４～５人くらいを戦死させ、Ｄクラスの戦意を削いでから突撃する作戦をとっていたのだが、その必要もなくなったみたいだ。

それと同時に、納得もできた。自分たちより前の世代に行われた試験召喚戦争では、Ａクラスが下位クラスに負けることは一度もなかったという。こんな能力を持っている腕輪を持っている生徒が何人も、下手すれば１０人以上いる可能性があるクラスなのだ。そりゃあ下剋上なんて起きないはずである。・・・と目の前の惨状を見ないようにしながら、考えていた。

さて、Ｄクラス生徒はみんなぽかーんとしている。影響を与えた自分でも軽い放心状

態となったのだ。影響を与えられた方が平常心を保っていられるはずがない。
戦死を受け入れられず何度も試獣召喚と言っている生徒、力が抜けへたり込んでいる生徒、魔王を見るような目で自分を見ている生徒と様々である。
共通しているのは、全員戦死しているとことか。

「・・・・・・あ、ああ・・・」

少し遠くから、うめくような声が聞こえてきた。
初めから後方にいたのだろう。自分が発動させた腕輪の効果範囲外にいた４人、そのうちの一人の言葉だった。

面識はないが、このような戦闘中に後ろで待機している人物、となれば限られてくる。
ゆっくりと４人の方向に歩いていく。４人は元々フィールドの端付近に待機していたため、動くことが出来なかった。
４人の顔は、一様にひきつっている。

「どうも、君たちの内誰が代表かは分からないけど・・・まだ勝負する？」

一応は提案のような口調で言ったつもりだったが、相手には全く別の意味で聞こえたかもしれない。

４人全員がこれでもかというくらい、首をふっていたからね。

こうして、自分の一撃が原因となって、Ｆクラスの勝利が決まった。

21話：敗軍の将にも優しく接するのが大人の醍醐味

「おいおい、出番ねえのかよ。折角この俺が真面目に受けていたってのによ」

明久の奴が気合を入れながら教室を出て行って1分後、シン、と静まり返ったかと思ったら教室にいたクラスメートたちが一斉に叫び声をあげ、我先にと廊下に出て行った。ご丁寧にもドタドタという効果音付きだ。あまりのうるささに思わずペンが止まったほどである。

元気がいい奴らだ、と考えながらまたペンを動かそうと思った時だ。

「ラグナ君、そこまでです。ペンを置いてください」

と、いう声が聞こえてきた。年季の入った声であり、生徒のものではない。顔を上げると、オンボロ教卓に手を掛けていた白髪の教師と目があった。声が聞こえてきた方向を考えても、この人が自分に話しかけてきたのだろう。

しかし、そこまでです、とはどういう事だろうか。回復試験の時間は1時間である。時計の長針はまだ一回転していない。

「どうしｔ・・・ましたか?カンニングとかはしてませんよ」

「いえ、たった今試験召喚戦争が終わりましたので」

「ああそうですか・・・・・・・・・・・・・・はい?」

相槌を打とうとした体が硬直する。一拍遅れて、廊下からの歓声が耳元に入ってきた。

「勝ったぞおおおお!俺たちがDクラスに勝ったんだあああああ!」

「胴上げだあ!吉井を胴上げするぞお!」

なんて声が聞こえてくる。それはどのように解釈しても、Fクラスの勝利を知らせる叫び声だった。

・・・おいおい、いくらなんでも早すぎるだろ。明久が出て行って状況が好転、最後の詰めに自分が出陣っていう作戦だったはずなんだが。大トリを飾れるかもしれないという事でいつもより1割増しで気合をいれていたんだが、鎧を着けて武器を構える前に敵がいなくなってしまったようだ。

はあ、とため息をついて横に立っている人物を軽く睨む。

「悪い悪い。勘違いしないでくれ、この結末に関しては俺も予想外だ。」

苦笑いの表情で弁解の言葉を口にする代表。表情を見る限り、嘘をついているようには見えない。腹の中まで完璧に読むことはできないが、申し訳ないという気持ちは十分に伝わってきた。なにより、自分たちは勝ったのだ。こんなところで機嫌を悪くしても何の意味もない。

立ち上がって途中まで書いた答案用紙を教師に渡す。できれば次回の戦争で腕輪を使えるくらいの点数は取ってあってほしいが・・・。仮に４００点越えていなかったとしても戦えることは確かだが、どうせなら使ってみたい。Ｄクラスもあと１０分くらい

粘ってくれればいいものを、と無茶な要求を心の中で言い、固まった肩を動かす。

「決まり手は明久か？」

「相撲みたいな言い方だな。ああ、明久の腕輪で一網打尽、敵の戦力と士気を削り取っての勝利だ」

「すげえな。一騎当千ここに極まれり、ってか？もう明久一人でいいんじゃねえのか？」

「いや、今回は相手が油断してくれたのにも助けられた。次・・・も油断してくれるはずだがそれ以上は続かないだろうな。Ａクラスの奴らなら明久の点数だって知っているはずだ。遅かれ早かれ、お前の力を頼ることにはなる」

代表の呟きにはうなずくしかなかった。

明久は去年の半ば、翔子と付き合い始めた頃を境に人が変わったように勉強をし始め

た。授業中に寝る回数が極端に減り（無くなったとは言っていない）、放課後も自習室や補習室に積極的に赴くようになった。

文月学園は一応は進学校という事もあって、部活も勉強もせずに帰る人はそんなに多くない。大抵の生徒は授業が終わった後も学校にとどまるため、明久の努力を目にする生徒が日に日に多くなっていった。ここで言う帰宅部に当てはまる生徒は勉強をしない、つまり現在下位クラスにいるような者が大半を占めているため（もちろん、帰宅部ながら上位クラスの生徒もいることにはいる）、Ｆクラスのほとんどとの半数程度の生徒は、明久の実力に、今この瞬間まで気付くことが出来なかったのだ。

「だが、次はどうするんだ？Ｃクラス以上はさすがに明久の実力を知っているから本気で来るぞ」

「心配すんな、一通りの作戦は立ててある・・・先生、今から戦後対談をするので同行をお願いします」

代表は軽く欠伸をして、教室の扉に手を掛けた。

「ラグナ、お前はクラスメートが落ち着き次第、教室の片づけをしてくれ。明久のおかげで結局ちゃぶ台のバリケードは使わなかったけどな。終わったらそのまま帰っていいぞ。ああそうだ、明久には俺から声を掛けておく」

「分かった」

俺が返事をしたときにはもう、代表は廊下に出ていた。視線を水平にずらし、積み重なったちゃぶ台を見る。

・・・まあ、がんばりますか。

教師と共に廊下に出てから、騒いでいた明久を初めとする生徒に指示を出した。バカ久の奴が胴上げされていたのには笑ったが、Ｆクラスの奴らにとっては試召戦争のＭＶＰ的存在である。あるいは救世主か。たった一人で勝負を決めたのだから胴上げしたくなる気持ちもわかる。とはいえ俺が話すや否や、明久を降ろし、すぐに教室に戻って

くれた。1日だけでこれくらいの信頼を受けられるようになったのは朗報である。

願わくば最後までこの信頼が続いてくれればいいが・・・と考えながら、廊下の壁にもたれかかっていた一人の男子生徒に声を掛ける。そいつは両手で頭を抱え、首を振っていたが、だんだんと近づいてくる足音に気付いたのか、ゆらり、と顔を上げた。

その表情は呆然、諦め、失意・・・ありとあらゆる負の感情を混ぜ合わせたようなものだった。周りに人はいない。Dクラス生徒のほとんどが補習室送りとなったみたいだ。確証が持てないのは、明久が腕輪の効果を発動する瞬間は教室内にいたため、見れなかったからである。今後の戦略を考えるためにも目に焼き付けておきたかったが、二発目が放たれる前に戦争が終わってしまった。

（ちょっと危険だが前に出て確かめたほうがよかったか?・・・まあいい。腕輪の効果は明久から聞いているし、これからも見る機会はあるだろう。Aクラス戦までに確認できればいい）

過ぎたことだと区切りをつけ、目の前の人物に話しかける。

「Fクラス代表、坂本だ。これから戦後対談をするが・・・いいか?」

目の前の人物・・・Dクラス代表、平賀は自分とその後ろに立つ教師を交互に見やり、

一度ため息をついた。来るべき時が来た、という表情に変わる。

「平賀だ。今回は完敗だったよ・・・自分たちが負けたからＦクラスとＤクラスの入れ替えをしなければいけないんだったな。今すぐに始めるか？自分らのほうはほとんどが補習室に連れて行かれたが、今の内に交換するべきかな・・・」

平賀は感想もそこそこに設備交換の話を切り出してきた。声に張りは無い。あまり触れてほしくないのか、さっさと終わらせて帰りたいのか・・・はたまた他の理由か。ともかく、ポジティブな理由でないことは確かだろう。そう思いながら、懐から一枚の紙を取り出す。

・・・さて、ここだ。十中八九乗ってくれるはずだが・・・どうだ？

「これが俺たちの要求だ。事前に鉄ｚ西村先生に許可をもらっている」

手にしているのは折りたたまれている一枚の紙だ。平賀に言えば怒られるだろうが、一週間前にＤクラスに勝つことを前提として書いたものだ。

設備交換だけだと思っていたのだろう平賀は困惑した表情を見せながら紙を受け取

り、広げる。そして書いている内容に目を通していき・・・

ガバッ!、と顔を上げた。
「お、おい!?これは本当か!?」
「ああ、絶対って約束はできないがそうなる確率は高いと思っている。どうだ?それでいいか?」

「も、もちろんだ!」

驚愕の表情を浮かべている平賀に、にやり、とした笑みを返す。

「なら、さっさと終わらせよう。補習室組も早く解放されたいだろうし、職員室に行って手続きを済ませようぜ」

自分の言葉にうなずいた平賀は、3人で職員室に入るまで渡した紙を食い入るように何度も何度も読んでいた。まだ他のクラスは授業中のため、誰ともすれ違わなかった。途中の廊下で外を見る。窓の外、校門付近に3つの影が見えた。3人の真ん中になっ

て歩いているのは明久だった。明久は両脇に、黒髪とピンク色の髪をした二人の女子生徒を従え、学校から遠ざかって行った。

・・・これでいい。

閑話：島田美波の場合～その1～

少女マンガのような恋に憧れていた。苦しんでいるヒロインの元へ颯爽と駆けつけ、助ける白馬の王子様に憧れていた。恋に落ちた少女は様々な困難を乗り越えて、王子様と両思いになる・・・

文字通り、マンガでしか起こらない展開だったと悟った。

私、島田美波は帰国子女だ。お父さんの仕事の都合で私が小さいときに家族でドイツに引っ越したらしいのだが、あまり詳しいことは覚えていない。ただ、初めて見る土地に興奮し、その場所に住む人々が使っている聞いたことのない言語に不安を感じたことは脳内に焼き付いている。

今になって聞けば、直前までお父さんが単身赴任でドイツに行くか、家族みんなで行くかで両親が揉めていたらしい。お父さんは自分一人だけで行く、家族にまで迷惑はかけられないと言っていたが、最終的にはお母さんの「一緒にいてこそ家族じゃない」という一言に折れたとのことだ。もしここでお父さんの意見が押し勝っていれば私はずっと日本で暮らしていただろう。どちらがより良かったのかは分からない。ただ、ドイツで両親や妹とみんなで生活出来たことは間違いなく幸せな時間だったと断言できる。本当に両親には感謝している。

完全に移住したわけではなく仕事での引越しのため、明日日本に呼び戻されることになってもおかしくない、とお父さんが言っていた。そのため、家に帰ってからは日本語とドイツ語の両方の勉強をすることとなった。

助かったのは、まず日本語を最初に学び、使えるようになったことだ。これによって

頭の中で、日本語で思考が出来るようになった。人は、最初に覚えた言語を使って生活していく。最初に覚えたのが日本語であれば、その後、ほかの言語を習得して会話するときも一度日本語に変換してから意味を理解し、会話するようになっている。ドイツにいるから、と安易にドイツ語から学ばせなかったことについては本当にお母さんに感謝している。もちろん、その分だけドイツ語の習得が遅れ、学校で苦労はしてしまったが。

ドイツでの暮らしは10年以上続いた。ドイツの人々から見れば外国人である私だったが、学校生活は充実したものだった。見た目で完全に浮いている私を気にせずに接してくれる人が多く、ドイツ語の勉強に付き合ってくれたクラスメートもいた。偏見や差別の目で私を見るクラスメートも少数いたが、私のところまで被害が来る前に友達が守ってくれた。本当に感謝してもしきれない。私もできる限り友達のために色々なことをしたが、まだまだ借りの方が大きいだろう。

そんな生活が終わりを迎えたのは、日本でいう中学3年生の時だ。お父さんが本社に勤務することとなり、日本に戻ることが決まったのだ。しかも、ドイツに来る前に住んでいた所とは違い、かなりの都会らしい。

「美波と葉月には申し訳ないと思っている。特に美波には2度も引越しを経験させることになってしまった。ドイツでの生活にも慣れただろうし、こちらで出来た友達もたくさんいるだろう。」

お父さんはそう言って謝ってきたけど、心配ないから大丈夫、となるべく明るく伝えた。ドイツへの愛着もないわけではないが、自分もれっきとした日本人だったのだろう、日本への愛着は捨てきれずにいたのだ。もちろん長い年月を過ごしたドイツへの感情もあるが、母国への想いがそれを上回っていた。日本で暮らしたい、日本で生活したい、という気持ちが心に満ちるのに、あまり時間はいらなかった。

私がはっきりと賛成を口にしたことで、前にドイツに来た時とは打って変わってスムーズな引越しとなった。・・・クラスメートとのお別れ会では号泣してしまったが。おそらく、涙でぐちゃぐちゃになった顔を見られただろう。ただ、友人も泣いていたのでおあいこということもできるかも。涙を流しながら見送ってくれた友人を見て、いつか、いつになるかは分からないけど、絶対に借りを返しに来よう、と心に誓った。

そんな訳で約10年日本に帰ってきた私だったが、その気持ちを噛みしめる間もなく、手続きに追われた。

高校入学の試験である。帰国子女の私が義務教育を受けないまま高校に入れるかどうかが心配だったが、そこはお父さんもきちんと考えていたらしく、文月学園という私立高校を勧められた。私立にもかかわらず学費が安く、とにかく『学力を伸ばしてくれる』高校ということで、私もいい印象を抱いた。おまけに家からそんなに離れている訳ではなく、私でも十分に徒歩で通えるくらいの近さであった。「善は急げ」という諺が日本にはあるが、早速お母さんと一緒に学校へ見学しに行った。

そこで1人の教師から文月学園の特色などについて詳しい説明を受けた。召喚獣と

か試験召喚戦争とかいろいろな話を聞いたが、いずれも勉強への意欲を伸ばしてくれる制度だと感じた。少々不気味ではあるが（実際お母さんは危なそうだからここはやめておいた方が、とささやいてきた）、なにより学費の安さが魅力的である。ここに入学できればあまり両親に迷惑を掛けずに済むと考え、受験することに決めた。

家に帰ってからお母さんは、危なそうだからやめておいた方がいいかもとお父さんに相談していたが、ここで私が猛烈アピールを決行した。結果、しぶしぶながらもお母さんも受験を認めてくれた。

ドイツではそこそこの順位だったこともあり、帰国子女用の特別入試に無事合格することが出来た。喜ぶ家族に囲まれながら、日本での高校生活に胸を躍らせていた。

そんな期待は入学早々吹き飛んだ。

先生が教科書の内容を日本語で話しながら黒板にどんどんと文章を書き連ねていく。

周りの生徒は（遊んだり眠ったりしているごく一部の生徒を除いて）すらすらとノートに文字を書いていく。対する私のシャープペンシルは授業開始から不動の立ち位置をキープしていた。

「・・・かんじ、わからない」

思わず、小さな呟きが漏れてしまった。それと同時に、冷や汗が流れてきた。

そう、確かに日本語の勉強はしていたし、そのおかげで会話もなんとか様にはなっている。だけど、勉強してきたのは平仮名である。それだけ覚えていけば頭の中での翻訳には不都合が生まれなかったため問題なかった。

だけどそれはドイツでの話である。日本で平仮名だけで生活できるはずがないと気付くのが遅れた代償が今の状況である。説明会や特別入試の時に日本語をつっかえながらも話せたことで、先生もこれなら大丈夫だと思っていたのかもしれない。おかげで、ドイツにいた頃と変わらない状態で日本の授業を受けることになってしまった。

こんなことなら、もっと町に出ておくべきだったと今さらながら後悔する。出かけていれば平仮名だけでは生活できないと気付けていたかもしれない。本屋にいけば一発で気付いていたのに。ここで自分の読書嫌いが牙を抜くことになるなんて思ってもいなかった。

・・・理不尽なのは分かっているが、漢字を教えてくれなかった両親を少し、少しだけ恨んだ。

結局、先生の言っていることだけは理解できたが、教科書がまったく読めないまま授業が終わった。

そんなこんなで、家で涙目になりながら小学生用の漢字ドリルと格闘する日常が始まったのである。

22話：一戦去って、また一戦

『Fクラス下剋上』

その報は自習しながらも試召戦争の行方を気にしていた2年生、自らの経験から勝てるわけないと思い込んでいた3年生の間を瞬く間に駆け巡った。

現時点では圧倒的な戦力差がある2クラス。文月学園と関わりのある者に聞けば10人中10人がDクラス圧勝で終わる、と答えるくらいの力の違いがあった。3年生や一部の教師は、1時間持てばいい方、1日持てば大健闘だとも考えていた

それが蓋を開けてみれば、最初にDクラスを教室まで追い込む、その後長い間Dクラスを教室内に押し込む、戦争が終わった時点でFクラスは戦死者たった6人、とどめに開始1時間以内での決着という、仮に格下相手でもここまで圧倒するのは難しいと言えるほどの完勝を収めたのだ。実際にはDクラスは教室に押し込まれていたのではなく議論中で動かなかっただけなのだが、蚊帳の外から見ていた他クラスには分からない事情である。

勝利に湧くFクラスを一目見ようとする生徒が多数いたが、自習とはいえ授業は授業、教室の外に出ることは許可されていなかったため、形だけ机の上に勉強道具を広げ

て周りのクラスメートと会話をする者が多かった。ただ、教室から出てはいけないと言われていたが、教室の扉を開けてはいけないとは言われていなかったため、体を半分廊下に乗り出して、リアルタイムで見学をする生徒はたくさんいた。

新学期新クラス1日目、初対面の人々が多いクラス内ではあるが、「試験召喚戦争」という共通の話題が転がり込んできたため、自習中、戦争が終わった後もその結果をタネにおしゃべりを続けられる生徒が多かった。クラスメートとすんなり会話をすることが出来る話題を供給したという点では、Ｆクラスに感謝をする人も少なからずいた。

さて、試召戦争の結果で会話をするとなれば誰もが持つこととなる疑問がある。

Ｆクラスはどうやって勝負を決めたのか？

試召戦争の一般的な勝敗決着条件は、いずれかのクラス代表が戦死すること、あるいは双方の代表の合意の上で戦争終結が決定されることが示されている。今回はＤクラス代表の平賀が降伏を宣言し、Ｆクラス代表の雄二、およびその場に居合わせた教師が承諾という形となったための後者に分類される決着条件となった。

降伏の意味は万人が理解しているが、簡潔に言うと自らの敗北を認め、それ以上の戦闘行為を中止することである。

つまり、平賀がこれ以上Ｆクラスと戦っても勝てないと悟ったということとなる。実際、戦争終了時点でＤクラスは5人も残っていなかった。どう頑張っても覆せないほど

の人数差が発生したため、降伏したのか。

だが、Dクラスは格上クラスである。なぜ、最低クラスのFクラス相手にそこまでの戦死者を出してしまったのか。

一番の疑問点は、しかしすぐに解決した。先ほども言った通り、教室の出入り口を開けて戦況を見守っていた生徒は多数いるのだが、そのうちの何人かが、吉井明久が召喚獣を使っている所を目撃したのだ。広い敷地を誇る学園とはいえ、広がるのにそう時間はかからない。

『何故かは分からないが、吉井明久がFクラスに所属しており、彼の攻撃で試験召喚戦争が終結した』

上位クラスはそのような結論に至った。放課後も課題や自習のために残ることが多かった人々は、明久の努力をしっかりと目で見ていた。そして、その努力が見事に実となったことも知っている。久保や木下といった一部のメンバーは翔子を通して明久の学力向上プロジェクトに携わったため、むしろ今回の結果は当然だとさえ思っていた。

ともかく、明久の努力、実力を知る上位クラスの面々は明久がいると分かった時点で何故勝てたのか、その理由を見抜くことが出来たのだ。

・・・・・・上位クラスは。

「へー、中々のモンじゃねーか」

学生ズボンのポケットに手を突っ込みながら教室に入ったラグナは、内装を見るなり感嘆の声を挙げた。１日だけとはいえ昨日生活した山奥の廃墟とは似ても似つかぬ光景が広がっていた。

世間一般的な学校机と椅子、傷の付いていない黒板に比較的新しいタイルの床。さすがにＡクラスと比べれば雲泥の差だが、普通の教室といって差し支えない程度には元Ｄクラス教室は整っていた。

豪勢な生活に人は憧れる。もちろん自分もその気持ちがないと言えば嘘になるが、普通という言葉がどれだけありがたいことかをラグナは実感していた。昨日までこの場所にいた人々も今頃は普通のありがたさを身を以て実感していることだろう。

時間は朝８時を少し過ぎたあたり。ＳＨＲまではまだ時間があるが、昨日と比べると明らかに教室にいる人数が多い。たった１日で生まれ変わった教室（実際は単に場所を

移動しただけだが）を確かめたくて早めに登校したクラスメートが多いのだろう。かくいう自分もその一人である。

ぐるっと教室を見渡し、つい昨日見知った顔を見つけ、そちらに足を進めた。その人物も自分の存在に気が付いたらしく、手を挙げて挨拶をしてきた。

「昨日と違って早いな、ラグナ」

「本来ならこれくらいは早いぜ、代表」

笑顔でジョークを言ってきたのは昨日、Ｆクラスおよびクラス相手に堂々の立ち回りを見せた代表、坂本雄二だった。頑丈な教卓に腰掛けながら教室全体を見渡す姿勢はそれなりに様になっている。

おまけに、代表が見渡している教室全体には活気があふれている。代表の言った通りに動き、その結果大勝を収めることが出来たのだ。このままついていけばＡクラスも夢ではない、と考えているのかもしれない。

「しかし見事なもんだな。たった1日でここまでランクアップできるとは」

「それは明久のおかげだ。さすがにあいつがいなければ初日からは仕掛けなかったさ」

「そうか・・・そうだな。そういや明久はどうした？あいつももう来ておかしくない時間だろ」

会話をしながら教室内をもう一度見渡したが、試験召喚戦争のＭＶＰとなった明久が

いない。登校時間の詳しい把握はしていないが、少なくとも、いつも自分より早く学園に来ていたのだ。ついでに言えば、翔子と瑞希の２人もいない。

「ああ、明久なら翔子、姫路とデート中だ」

「朝っぱらからリア充全開かよ」

にやにやしながら言ってきた代表の言葉に、反射的ながらも口を合わせた。つーかその言い方だと２股じゃねーか。もっとマシな嘘つけよ。

「安心しろ、試験召喚戦争までには戻ってくるさ」

「そっか、さすがに授業までにはもど・・・・・・」

・・・・・・は？

何かおかしな言葉が聞こえた気がした。頭を掻いていた手を降ろし、まじまじと代表を見る。

代表の姿におかしなところは無い。ついでに言えば、教室のざわめきも聞こえていることから、自分の聴力にも問題はない。ここ数年は病院の世話になったことは無いので、自分の体調には自信がある。

万が一聞き違えたのかと思い、もう一度聞こうとして・・・

勢いよく開かれた扉の音が、耳に飛び込んできた。

「Eクラス代表、中林よ。Fクラスに試験召喚戦争を申し込むわ！」

自信にあふれた、その大声と共に。

２３話：事前の準備って大事ですよね

カリカリカリ・・・とシャーペンが紙の上を走る音が部屋の中に響く。本来ならばその音は決して大きいとはいえないもので、他の要因、例えば人の会話や足音があった場合には簡単にかき消されてしまうほど弱弱しい。

それなのに響いているとなれば、理由はおのずと限られてくる。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

目一杯入ろうとすれば生徒１００人は詰め込めるだけのキャパシティはあるだろう大部屋。廊下側には『自習室』と書かれてあるプレートが扉の上に設置されている。

自習室自体は朝のＳＨＲ前からでも利用でき、実際に早めに登校してこの部屋で勉学に励む生徒も少なからずいる。しかし本日は新学期２日目、赤い門の大学を目指しているならば話は別だが、文月学園はちょっとだけ特殊な試みをしている以外には取り柄がない私立高校である（学園長は進学校と銘打っているが）。この時期まで頑張る一般生

徒はさすがにいなかった。

自習室内にいる人物は4名、内1名は学年主任という肩書を持つ教師、高橋女史である。ピシッと着こなすスーツにはしわ1つ入っておらず、メガネの奥の瞳は一見優しいようで隙がない。事実、彼女の瞳は一心不乱に問題を解く3人の生徒に注がれている。

止まらないシャーペンの音を生み出している残りの3人は、よく言えば3通りの個性を持っている。

一人は大和撫子という言葉が相応しい長い黒髪の女子生徒である。昨年の前半から首席争いの常連となるほどの超高成績を出し続け、生活態度に関しても全く問題ない。それどころか「彼女を見本にしなさい」と言えるほどだろう。

もう一人は桃色の髪を持つ女子生徒である。先の少女とは違い、若干ふんわりとした印象を受ける。成績は首席争いにこそ加わっていないが、というより上位4人が異次元なだけだが、上位10人には必ずと言っていいほど彼女の名前があるため、いい意味で教師の覚えがいい。

最後の一人は、明るい茶髪の生徒である。去年の前学期から様々な伝説を残してくれた彼は、今では黒髪の女子と同じくらいまで、つまり首席争いをするまで成績を上げている。生活態度は・・・・・・前と比べれば少しはマトモになったといえないこともない。

そんな3人の共通点を見つけるとするなら、一つは極めて成績優秀なこと、もう一つは全員が現在、Fクラスに所属していることだろう。

「・・・残り5分です」

高橋女史の声が響く。その声に反応した明久と瑞希はちらっと顔を上げ、すぐに目線を落とした。翔子はよほど集中しているのか、紙面から目をずらすそぶりも見せなかった。

仮の話だが、もしも3人と共に補充試験を受けることになった生徒がいたとすれば、その生徒は全教師から心からの同情を受けることが出来るだろう。なぜなら、3人の問題を解くスピードが常人の域を超えているからだ。自分とは次元が違うスピードで問題を解いている人物が近くに複数人いたとすれば、自信という言葉が置手紙を残して家出しても仕方がない。

カリカリカリ・・・と音が続く。誰も持っているシャーペンを止める気配はない。3人が解いた解答用紙の束は尋常ではない厚さとなっていた。

「へー・・・本当にいいのか？」

にやにやとした笑みを浮かべた代表が、腕を組みながらそんな言葉を口にした。どことなくからかいの混じった口調だが、代表の視線の先・・・声を掛けられた、あー・・・

「・・・・・・・中村？」

「中林よ!?」

・・・中林はそれを受け取る余裕はなかったみてえだ。勢いよく俺らの教室に入ってきた所までは良かったが、そのせいで皆の注目を集めてしまったみたいだ。入ってきたのが男子だったらまだ良かったが、中林は女子である。このことで、女子分が著しく不足しているFクラスの野郎どもの好奇、いや興味深い視線を独占する形となってしまったみたいだ。遠巻きにとはいえ、決して少なくない異性に好奇の目でジロジロと見られてはいい気持ちはしないだろう。

「全く・・・人の注目を集めるんだったら予め慣れとかねえと駄目だぞ？」

「ラグナ、多分お前の考えは外れてるぞ」

諭すような口調で言った言葉はしかし、隣に立つ代表に否定された。マジか。結構自身があったんだがなあ、と思いながら頭を掻く。人の感情を読み取るのは得意ではないが、たまには当たってくれてもいいじゃねえか。それに比べ、代表は言い方からして中林の考えを理解しているみたいだ。そうじゃなかったら人の意見を否定できないはず

だしな。
　とか考えながら視線を送っていると、代表は苦笑いの表情を浮かべた。初めて見る表情だった。
「少し訓練すればお前でも初歩的なことは出来るようになるぞ」
「・・・あんた本当はさとり妖怪なんじゃねえのか？いやそうだろ。絶対サードアイ隠しているだろ。ちょっくら服脱いでみてくれ」
　ガタッ、という音が違う教室から複数聞こえてきた気がしたが、そんなことお構いなしに代表に詰め寄った。やましいことはないとはいえ、自分の考えを見透かされるのはどうも落ち着かない。
「おいおい、俺にそっち系の趣味はねえぞ。」
「いや代表俺だってねえよ。つーかそういう奴今まで会ったこともねえし・・・」
「日本はともかく海外には結構いるみたいだが、お前はこっちに来る前も会わなかったのか？」
「・・・・・・おとうｔ、いや何でもない。一切いなかった１人たりともいなかった」
「・・・・・・ここでの生活は楽しいか？」
「ああ」
「それなら良かった。まあ時々は家族に連らｋ「無視しないでよおおおお!!」・・・

おお」

代表から同情が込められた視線を受け取っていたが、突如として響いた大噴火によって中断された。

「な・ん・で!あなたがここにいるんですかブラッドエッジさん!?」

噴火した山の名前は中山さんだった。ぐいっと詰め寄ってくる彼女の気迫に押され、少し後ずさりをしてしまった。彼女は現在進行形でヒートアップしているようで、下がった俺の代わりに近くにいた代表に詰め寄った。

気の強い女だな、嫌いじゃないぜ。それでいて表情、姿勢から真っ直ぐなオーラが出ている。・・・・・あの兎も中井さんくらい純粋だったらと考えてしまったのは秘密だ。

さて、俺の代わりに詰め寄られた雄二だったが、余裕の笑みを崩さないでいた。前の言葉から彼女だ来ることを予想していたようなので、冷静でいられるという事だろうか。

「どうした、不安になったか?先生もいないし、今なら戦争発言取り消してやってもいいぞ」

雄二の発言に、元々赤かった彼女の顔がさらに赤くなった。ぐぐぐっとさらに近寄り、代表につかみかからんばかりの勢いで真っ向から反発した

「だ、誰がＦクラスにビビるものですか！１人や２人高得点者がいるからって図に乗らないでよね！」

「ほう」

「今日の１０時から開始よ！教師にはこっちが話しつけとくから教室を明け渡す準備をしておくことね！」

頭にのぼった血の量と声の大きさは比例しているのか、教室中に響く声を出しながら中林さんは去って行った。・・・俺がいる理由、聞いていかなくてもよかったのか？

「なあ代表？どうしてＥクラスが俺たちに宣戦布告してくると確信してたんだ？」

代表の指示でせわしなく動き回る生徒らを横目に見ながら、俺は当の本人に話を振ってみた。

あの後、教室にいた生徒は大なり小なり動揺を見せた。昨日代表の計画に賛同し、Ｄクラスを倒したと思ったら、たった一日後に（設備的には）１ランク下のＥクラスから宣戦布告を受けたのだ。

代表がうまく皆をなだめ、試召戦争の準備に取り掛かったが、後から来た生徒に説明するために時間を取られることとなった。昨日より人数も少ないため、中々作業が進ま

ないでいた。

・・・え、俺も手伝えって?断る。めんでえのは嫌いだ。とりあえず代表と話をしていれば作戦会議中なんだなって勘違いしてくれるだろ。

「確信なんてしてないさ。ただ、常に悪い状況を考える癖があるからな。もしかしたら、って思ってはいた」

「へえ、そういう考え方か」

「色んなことに思考を向けれるようになって中々便利だぞ。ラグナ、お前も試してみないか?」

「止めとくぜ。後ろ向きの考えなんて柄じゃねーよ」

「はっはっは、それもそうだな」

笑い声をあげる代表に釣られ、自分も笑みを浮かべる。常に周りの出来事におびえる自分を想像すると、なるほど確かに滑稽だ。

「代表!今回はどれくらい机が必要なんだ?」

「ん?んー・・・・・・10個もあれば十分だ。他は邪魔にならんよう端っこにでも寄せておけ」

時々指示を仰いでくるクラスメートには返答をする。それを聞いた男子は、分かった、と短く返事をしてすぐに作業に戻った。1日だけですげえ信用である。この方につ

いていけば間違いない、という信頼が既にクラスに出始めているみたいだ。
「これだけ期待されているんじゃあ、今回の勝負にも負けるわけにはいかねえな、代表」
「安心しろ。既に手は打ってあるさ」
代表が笑う、と同時に３人の生徒が転がるように教室に入ってきた。男子１人、女子２人で構成されたそのグループは、走ってきたのか、ピンク髪の少女がにきつそうに息を上げていた。・・・ああ、明久、瑞希、翔子の３人だよ。
「せ、セーフ・・・危なかったよ本当に・・・まだＳＨＲの時間じゃないよね？」
「・・・・・・うん、まだ余裕はある」
「ぜえ・・・ぜえ・・・ふ、２人とも早すぎます・・・」
「瑞希が遅いだけ！そんな空気抵抗大きそうな体しているんだからしっかり鍛えておかないとおいてかれるよ？」
「幅ですか!?幅のことなんですか!?確かに翔子ちゃんには負けますがしっかりと体重管理はしｔ」
「ああいやメロンの方」
「だから今胸は関係ないですよね!?」
ギャーギャーとわめきながらの登場に、一斉にクラス中の視線が集まる。特に、両手

に華状態の明久に視線、というか殺気が集まりかけたが、かけただけで行動として表すものはいなかった。さすがにＭＶＰに対して恩を仇で返すことはしたくない、というところか。

「珍しくおせーな明久、あと2人も。何かあったのか？」

「うん、ちょっと雄二に頼まれててね。まあ間に合ってよかったよ」

明久は頭を掻きながら苦笑いを浮かべていた。明久も代表の指示かよ。どんな作戦を描いているんだよ、と思いながら代表を見ると、彼はいつもの顔をしていた。

「なあに、打倒Ａクラスに向けての準備さ」

さらっと言う代表を見て、今回もとんでもないことが起こりそうだ、と予感、いや確信を抱いた俺がいた。

２４話：別に全滅させてしまっても構わんのだろう?

「諸君、我々は何故、美少女に惹かれるのか?それは人間の、いや、生物の根本的な本能に従っているからだ。生物は例外なく、種族の存続、繁栄の為に子を産む。この時、ただ産むだけでなく、より優れた子を産み、次世代に繋げたいという感情が芽生える。美少女は優れた容姿を持つため、我々は無意識の内に惹かれ、その美少女との子を次世代に残したいという感情に支配されるのだ」

「「サー!!!その通りであります、近藤教官!!!」」

「そして、それは女性にとっても同じこと。イケメンという優れた要素を持つ者に惹かれることは確かだ」

「「しかし!!!それだけではありません!!!」」

「そうだ!顔が良いというのは優れた要素の1つでしかない!身体能力の高さも要素の1つ!社会的地位の高さも遺伝に絡めれば要素の1つ!・・・そして!」

「「頭の良さも要素の1つです!!!サー!!!」」

「その通りである！頭脳明晰というのは列記とした女性が惹かれる要素の１つ！世の女性は賢い異性を頼りにするのだ！いいか皆！頭がいい奴はモテる！」

「「「頭がいい奴はモテる!!それがこの世の真理であります!!」」」

「それでは、我々がＡクラスに勝利した場合どうなる!?」

「「「最高学年のＡクラスよりも頭脳明晰という事になります!!!つまり・・・」」」

「「「「俺たちがモテモテになるという事だあああああああああああ!!!!」」」」

「・・・・・ねえ瑞希、あのクラスメート達に惹かれた?」

「いえ・・・惹かれたというか・・・引いたというか・・・」

「所詮は頭の良さも要素の１つでしかないってこと忘れてるなあいつら・・・」

「・・・・・・明久みたいな優しさも重要な要素」

教室に響き渡る男子たちの魂の叫びを、自分、瑞希、ラグナ、翔子の４人はなるべく距離をとって眺めていた。男子の一人が教卓の上に立って演説を行い、その周りを他のクラスメートが囲んでいる。どうみてもヤバい宗教である。というかそうとしか見えない。

こうなった原因は間違いなくあのゴリラにある。

ＳＨＲにおいて担任の先生からＥクラスとの試験召喚戦争の旨を伝えられた。二日連続の試験召喚戦争ということで、さすがに嫌な顔を見せるＦクラス生徒は多く、不満の声を挙げる者もいた。やる気が出たとはいえ元々が勉強アレルギー（重症）持ちの集まりである。むしろ当然である。

早く来ていた生徒はＳＨＲが始まるまでに教室の改造、もとい整理をしていたみたいだけど、あまり乗り気ではなかったみたいである。昨日の戦争では自分の攻撃のせいで、苦労して築いた秘密兵器ちゃぶ台バリケードが秘密兵器のままで終わってしまったことにより、今日も使わないまま終わるのではないか、と思った生徒もいたらしい。うん、ごめん。自分もあの威力は予想外だったんだよ。

そういう訳で担任の教師が出て行ったあと、雄二に不満をぶつける生徒がちらほらいた。考えてみれば打倒Ａクラスはクラスの総意であり、雄二一人で決めたことではないため、ひどい八つ当たりである。また、試験召喚戦争は最終目標の達成の為に避けては通れない道である。それを、２日連続続いただけで文句を言ったとなると、本当にＡクラスに勝つ気があるのかと思ってしまう。・・・まあ、単純に言いたいことを言っているだけだとは思うが。

自分が雄二の立場だったら怒鳴りはしないが、負の感情の1つや2つが顔に出ていたと思う。しかし雄二は言いがかりに等しい文句を言われてもいつもの顔のままだった。

ポーカーフェイスってレベルじゃねえ。むしろ外野である自分たちの方が苦い顔をしていたはずだ。

不満の吐き出しは5分ほど続いただろうか。クラスメートの一部が次々に口を開き、それを雄二が頷きながら受け止める、といった状況に変化が起きた。

不意に雄二が文句を言っている生徒一人に近寄って行った。笑顔のまま、である。

騒がしかった教室が静まり返った。

ヤバい、代表がキレた、という小声が聞こえてきた。・・・後悔するなら最初から言わなければいいのにと思ったが、止めることはしない。昨日以上に自業自得であるし、なにより面ど（ｒｙ

「坂本君っ！」

ゆっくりと歩く雄二の前に一人の生徒が立ち塞がった。・・・苦労を苦労と思わないクラスの清涼剤、瑞希だった。雄二を止めるのが面倒と思っていた自分、罪悪感がマッハである。

「た、確かに気持ちは分かりますがっ、その、暴力はいけません！」

「安心しろ姫路。そういうのじゃねえからよ」

勇気を振り絞ったのだろう、手を広げ、顔を紅潮させながらも道を塞いだ瑞希。雄二はそんな瑞希の頭にポン、と手を置きながらさりげなく力を込め、瑞希をどかした。自

分が瑞希と同じことをしたら、もれなく熱い拳でどかされていただろう。扱いの差が違いすぎる。

「いや、我が親友のバカ久ならシャーペンで勘弁してやるよ」

「雄二、本当の親友なら暴力に頼ったどかし方を選択しないと思うんだけど」

「親友相手になら遠慮は必要ないだろ」

「わーお早速の矛盾」

舌の根も乾かぬうちの手のひら返しである。というよりシャーペンって昨日のあれですか?あの弾丸並みの速度で飛んできたシャーペンのことですか雄二さん?つーかもう手にしてるし。どうやって壁から回収したんだよそれ。そして元辿ればそれ自分のシャーペンなんですが・・・。

「まあ、さすがの俺も暴力は振るわないさ。ちょっとしたお話をするだけだから安心してくれ」

「・・・分かりました」

軽い口調で告げる雄二に対し、瑞希は暴力が無いという事が分かったのか、黙って引き下がった。瑞希自身も今回、クラスメートを庇うつもりはあまりないらしく、すぐに自分の席に戻った。いや、瑞希も最初は自分と同じく苦い顔をしていたから、雄二が動かなければその内瑞希が立ち上がっていたかもしれない。翔子もそうだったし。ラグ

ナ?あくびしながら見守っていたみたいだよ。

ともかく瑞希がどいたことで、雄二の道を阻むものは無くなった。雄二の標的にされたクラスメートは、顔が青ざめる→瑞希の乱入で生気を取り戻す→再び青ざめる（今ここ）、という地獄から天国への往復列車を満喫した直後だ。

・・・顔をよく見たら、昨日雄二に焚き付けられてDクラス宣戦布告の大役を務めあげた人物だった。ああなるほど、そりゃあ文句も言いたくなるね。小町に会う寸前まで逝ったっていうし。雄二が覚えているかどうかは別として。

とかなんとか思っている間に、雄二が男子生徒・・・近野君?近藤君?いいや、コン君の前に立った。笑顔だけどすれ逆に怖い。コン君も雄二の顔を確認して体引いているし。

「な・・・なんだよ・・・?」

「なあに、少し耳貸してくれ。1分だけでいい」

「・・・へ、耳?」

「ああ」

身構えながら滝汗を流しているコン君、そこに届いたのは説教ではなく、雄二の意味ありげな言葉だった。軽く耳を塞いでいた自分にとっては朗報だったけど、雄二が話す内容が全く想像つかない。散々文句を言われていたから何かしらはあると思っていた

けど、雄二がコン君に話し始めた言葉は小声で、こっちまで聞こえてこなかった。

・・・いったい何を話しているんだろう。と考えていた時に始まったのが今のあれである。今のFクラス生徒に不満や文句というものは欠片も見られない。全員がただ一つの目標に向かって一致団結している様は、何も知らない人から見ればこれぞ青春、輝いて見えるだろう。会話内容を聞けば一気に幻滅するだろうけど。

ともあれ、クラスメートのやる気が上がったのは事実である。

「・・・で、雄二。自分達は始まったら何をすればいいの?」

青春（）を視界の片隅に収めながらいつの間にか隣に来ていた雄二に話しかける。士気を上げるのは結構だけれど、戦争の時間まであまり余裕はない。午前中から開始のため、教師の確保、作戦内容の確認などするべきことがたくさんある。仮にそれが無くても補充試験の時間が取れない。下手に２０分ほど受けるよりは朝の内に受けた教科を軸に戦った方がいいかもしれない。

・・・もしかしたら、Eクラスが昨日の今日、それもこんな朝から戦争を仕掛けた理由は、自分の補充試験を嫌ったせいかもしれない。

だとしたら、昨日の雄二の指示は、これを見越したものだったのかと思い、寒気がしてきた。本当に雄二の頭はどうなっているのだろう?

「勝つためには最悪の想定から考えろ・・・ってな。まあ今回は簡単に行くさ。明久は最初、数人を引き連れてEクラスを受け止めてくれ。仮に30~40人ほど来てもお前の点数なら大丈夫だろう。ヤバくなったら合図をくれ。もう一つフィールドを展開して相殺させるから、その間に逃げてこい。相手さんの動きを見てその後の指示を考えるから翔子とラグナ、姫路はとりあえず待機だな」

「へえ・・・昨日と比べたらずいぶんシンプルじゃねーか」

「本来作戦はシンプルなほうがいいからな。ま、昨日より余裕が出来たし大丈夫さ。」

「・・・・・・分かった」

にやり、笑う雄二。この顔をした雄二は何かをたくらんでいることが多いけど、推測すること自体が不可能に近いため、黙って従うしかない。従って損はないしね。ちなみに本来相殺することはあまり褒められた行為じゃないんだけど、いまさらかもしれない。

床から立ち上がり、準備運動を開始する。と、直後にズボンを触られた感触があった。後ろを向くと、しゃがんだ体勢の翔子と目が合う。

「・・・・・・明久、埃を取るから待ってて」

「ああ、りょーかい」

翔子は自分の言葉を聞くとすぐにズボンのゴミをつまんで、集め始めた。30秒ほど

で集め終えたのか、手にまとめてゴミ箱の方に向かっていった。
「羨ましいぜ、ああいう彼女がいて」
「・・・?ラグナだっているじゃん?」
「・・・羨ましいぜ、『ああいう』彼女がいて」
ラグナは翔子の方に視線を向けながらも、その焦点は遥か彼方にあるようだった。
「いるだけマシじゃねか」
「そうですよ!」
振り返ると、現在フリーの２人がいた。・・・雄二と瑞希なら相手から寄ってきそうなんだけどね。外見はいいし。外見は。

１０時になり、試験召喚戦争の始まりを告げる専用のチャイムが鳴り渡る。それと同時に自分は数人のクラスメートと一緒に、廊下に飛び出した。
あれからクラス全体への簡単な作戦の説明があり、その後、やり残していた教室の整理に時間の大半を割いた。思ったより時間がかかり、雄二が５分前に複数の教師を連れてきた時にやっと終了した。

それからは雄二が連れてきた若い教師にすぐ動くことを説明し、伝え終えたところで開始である。予想以上にどたばたしてしまったけど、間に合ったし何も問題ないね（汗）

廊下に出ると、旧校舎側から男女入り混じって団体で爆走してくるＥクラス生徒の姿が見えた。運動部の生徒が多いのか、瞬く間に距離を縮めてきた。あわてて声を挙げる。

「先生！お願いします！」

「承認します」

『日本史』のフィールドが広がり、一瞬で向かってくる生徒の半分近くを飲み込んだ。しかし、相手は臆することなくどんどんと向かってくる。展開を終えた１０秒後には見える範囲内で全員がフィールド内に入った。性格まで体育会系が多いみたいである。

「大丈夫よ！吉井君は昨日の戦闘で点数を大きく消費しているはずだわ！一気に押し込むわよ！」

「「「「おおおお

「待ちなさい！Ｅクラス代表中林よ！あなたたち５人に勝負を仕掛けるわ、覚悟しなさい！」

さっきの女子だ。しかも代表!?・・・・・・先陣での指揮とはかなり強気みたいだ。だけど、今回はこちらの作戦勝ちである。

「逃げたりはしないよ・・・。『試獣召喚』！」

自分の声に反応して、魔法陣が生成され、召喚獣がでてきた。

相手の代表はああいったが、自分の点数は削られていない。むしろ昨日より増加している。雄二の指示のおかげで、朝一で補充試験を受けることが出来たからだ。補充しなかったら今頃冷や汗が止まらなかっただろうが、この点数なら腕輪を連発できる。ヤバくなったら逃げろと言ってたけど、腕輪を使えば自分だけでも勝てる！

「行くよ！皆も召喚して、なるべく一塊になって！」

クラスメートへの指示を出し終えると同時に、自分の召喚獣の具現化が完了した。

『教科　世界史
Ｆクラス　吉井明久　０点』

「「「「・・・・・・へ？」」」」

廊下の空気が止まった。

教室内にまで響いてきた、『戦死者は補修ううううう！』という野太い声。それを聞いたとある赤髪のクラス代表はニヤリ、と笑みを浮かべた。

２５話：敵を騙すにはまず味方から

新学期2日目にして早くも2回目となった試験召喚戦争。そのＦクラス　ＶＳ　Ｅクラスの初戦は、明久の戦死によって勝敗が決まったといっていいだろう。

元々Ｆクラス先遣隊５人に対し、Ｅクラスは５０人全員での突撃である。多勢に無勢、しかもＦクラスのほうが点数が低いのだ。先遣隊に抜擢された４人は、相手が地響きを立てながら迫ってくるや否や瞬時に明久に期待の視線を向けた。自分たちで何とかしようという気は皆無のようである。ある意味自分の成績をわきまえているともいえるが、少しくらいは頑張ろうと考えないのだろうか。

そんな状態だからこそ、明久の召喚即戦死を目の当たりにした彼らはこの世の終わりを迎えたかのような表情となった。

明久の召喚獣の点数を見て顔が固まり、あっという間に消滅したのを見て何度も目をこすり、鉄人に担がれて去っていく明久の姿を見てようやく事態を理解したのか、ムンクのような表情となった。

最後に自分たちが召喚した召喚獣の点数を見て何かを悟ったかのか、はたまた憑き物

が落ちたのか、穏やかな表情になったという。

・・・・・・廊下のＦクラス生徒全員が補修室行きとなる、３０秒前の光景であった。

「お前ら、扉を固めろ！」

現Ｆクラス教室に居座る代表、坂本雄二は大声で叫んだ。

まさか開始早々攻め込まれるとは思っていなかったＦクラス生徒。事前の説明でも明久が相手の点数を削り、しばらくした後に突撃して中林を討ち取る、と聞かされていたためほぼ全員がリラックスムードだった。

そんな所に明久戦死の情報が迫り来る大勢の足音と共に届けられたのだ。思い思いの格好で寛いでいた生徒らは慌てて片方の扉の前に陣取った。悲しいことに、今回は早くも机のバリケードが効果を発揮する場面が来たみたいだ。

元々広いとは言えない教室のおかげか、すぐに扉の前に何重もの人だかりが形成され、直後に教室内の教師が承認し、『日本史』のフィールドが広がった。

「何なんだよ！吉井の奴もうやられたのか!?」

扉の前に陣取った生徒の一人が愚痴を漏らす。彼なりに思い描いていた展開とは（悪い方向に）かけ離れた現状に焦り半分、不安半分といった感情だ。前回はほとんど何もしない内に勝利したため、今回が実質上の初陣といえよう。悪態をつきながらもその瞳は揺れながら扉のほうを向いていた。

彼を含めた生徒らは明久がどうやって戦死したのかを実際に確認していなかった。雄二に「５人の他は絶対に教室から出るな。いらない挑発をすることになる」と釘をさされていたためだ。おかけで扉から覗き見することさえできなかったのだ。

もし見ていたとしたら、吉井の奴がチョンボで補修室送りとなった、で済ませられたが誰一人その様子を確認できなかった。それは、

『もしかしたら吉井以上のエースがいるかもしれない』

という不安を生徒らに持たせる事態となったのだ。その所為でＤクラス戦の時とは違い、Ｆクラスは決して士気が高いとは言えなかった。

ガラッ！

そこに付け入るかのように扉が開いた。試験召喚戦争中となれば、開けた相手は決まっていた。

『教科　日本史

Ｆクラス　４１人　平均６４点
ＶＳ
Ｅクラス　５０人　平均９７点』

Ｅクラスは初戦の勢いそのままに突撃を敢行した。一致団結で一つの目標に突き進むという体育会系の強みを存分に生かし、幾重にも重なったＦクラスの試験召喚獣をぶち破らんと武器を手に挑みかかったのだ。

こうして教室の入り口内でいきなり始まった本格的な戦闘。その端っこで、俺は１人の女子生徒に迫られていた。

「・・・雄二、どういうこと？」

「すまないな、黙っていて」

ご存じというか、明久ＬＯＶＥを貫く才色兼備、霧島翔子だ。通り過ぎる男子生徒を必ず振り向かせるほどの少女は、今は万人を遠ざけるオーラを発している。

簡潔に言うと、めちゃくちゃ怒っていた。オーラどころか背後から毘沙門天が出ているあたり、かなりヤバい。明久に貸したエロ本が見つかった時もこんな表情をしていた

のかと思うと、わが親友への同情を禁じ得ない。その本が未だ返ってきていない所をみるに、翔子に処分されたと見ていいだろう。

「・・・あの本、雄二のだったの？明久に変な本渡しちゃダメ」

「悪い悪い、あいつがどうしてもって言ったんでな・・・ところでその本は」

「処分した」

即答である。あの本気に入っていたんだがなあと思いつつも、今はもっと重要なことがある。翔子と、そのすぐ後ろにいるラグナ、姫路を見た。

３人にはあらかじめ、親衛隊という口実で傍に置き、俺の指示があるまでは試獣召喚をしないようにと伝えてある。Ｅクラスが攻め込んできた瞬間、姫路が駆け出していきそうになったが、ラグナに頼み何とか止めてもらって事無きを得た。おまけに明久はもういないため、今戦闘を行っている生徒はＦクラス相当の学力しかない者ばかりである。とはいえ人数はほぼ同じ、加えて相手もＥクラスのため、何とか教室の入り口付近で受け止めることが出来た。

現在は一進一退の攻防が繰り広げられているものの、微妙に点数差があるためかＦクラスがやや押され始めている。突破はされないにしても、何もしなければ時間の経過とともに悪化していくだろう。

・・・正直、Ｄクラス相手に明久一人で決着がついたのだから、今いる３人を戦線に

加えればすぐにケリが着く。しかし、それでは『ダメ』だ。そもそも全力で勝ちに行くのなら明久という尊い犠牲を生ませるつもりはなかった。

「ま、さっきの質問についてだが対Aクラス戦に向けての布石さ。今はとにかく実践経験を積ませたいと考えてな。犠牲になることは明久も了承済みだ」

扉付近の激戦にも目配りしながら、小声で3人に話す。そもそも、前のDクラス戦でも少しくらいは戦わせる予定だったのが一瞬で終わってしまったため、最初から激戦にしようと思った所もある。ガンガンいくタイプのEクラス相手と戦闘となれば、さぞかしいい経験となるだろう。おまけに、精神的柱がいなくなったことで皆少なからず動揺している。逆に相手は、こちらのエースがいなくなったことでさらに勢いづいておる。言ってしまえば、前回と違って戦力的にも精神的にも万全とは言えない状態で格上と戦うことを強いられているのだ。その状況で戦った事実はAクラス戦で必ず生きる。

・・・要約するとその様な考えを、3人に話した。さらりと明久関連で嘘を混ぜたが、こうでもしないと彼女様の機嫌が戻らないからな。少し色を付けてゲームを貸せば明久もほいほい賛成してくれるだろう。（都合の）いい親友を持てて俺は幸せだな、うん。

さて、3人の反応は、ラグナは相変わらずの余裕そうな笑みを浮かべていたし、翔子と姫路は納得はできないが理解はできた、という微妙な表情をしていた。とりあえず翔子の怒りは収まったみたいである。

「なるほどな、だとすれば俺たちを前線に送らないのもその為か？」
「ああ、理解が早くて助かる。お前らが戦闘に加わっても雑魚狩りで終わっちまうからな」
ラグナはすぐに悟ったらしく、壁に寄りかかってのんびりと観戦モードに入った。すまんなラグナ。今回もお前の出番はないから、ゆっくりしていてくれ。
「うーん・・・坂本君の考えは分かりましたが、えーと、その・・・」
そのラグナとは対照的に困惑した顔の姫路が、言葉を選ぶように口を開けた。指をもじもじとさせながら、何かを言おうとしてすぐに口を閉じる。
どうしたんだ、と思ったが、ちらちらと扉付近の激戦に視線を送っているのを見てすぐに合点が行った。確かにやさしい性格のこいつでは言いづらいことだ。
「どうした姫路、あいつらだけじゃ勝てないだろ、とか思ってるんだろ？」
「もう少し言葉を選んで下さい！」
キッとした表情で姫路が睨んできた。言葉の内容を否定しないあたり図星だろうが、どう表現するかで迷っていたらしい。翔子にも目を向けると、小さく頷いた。どうやら、女性陣は同じことを懸念していたようだ。
ラグナはすでに欠伸をかいて、我関せずを貫いていた。自分の役割がなくなったらすぐにだらけているあたりが、明久と似ている。類は友を呼ぶとはこのことだろう。その

分、次の試験召喚戦争ではきっちり働いてもらうつもりだがな。
「確かに今戦っているメンバーだけでは厳しいだろうな。だから翔子、頼んだ。姫路はラグナと一緒に待機していてくれ」
「・・・・・・・?」
俺の発言に翔子はきょとんとした表情を見せたがすぐに納得し、その足を激戦区に進めていった。と、その途中で振り返る。
「・・・点数は?」
「最初は使わないでくれ。あと、手も出すなよ」
「・・・分かった」
「・・・って坂本君!いいんですか!?」
そこで、一拍遅れて内容を咀嚼した姫路が慌てて翔子を止めろうとした。・・・そっか、姫路には伝えていなかったな。
「大丈夫だ姫路、少しだけの手助けだ。翔子は戦闘には加わらないさ」
ほら、と翔子を指さす。姫路が視線を向けた先では、翔子が召喚獣の展開を終えていた。

『教科　日本史

霧島翔子　Ｆクラス　６７２点』

・・・いつみてもすさまじい点数である。あれで得意教科ではないというのだから恐ろしい。

しかし、囲いの一番外側で召喚したためか、Ｅクラスには翔子の召喚獣は見えていない。言い方を変えれば、もっと内側に行かないと敵と対峙することはできないのだ。

本来ならエースを内側に送るべきなのだが、今回は例外である。高い点数を持つ召喚獣は、武器を振るわなくても戦闘に影響を与えることが出来るのだ。

静かに腕を前に出す翔子。その右手には、いつの間にか青色の腕輪が装着されていた。

「・・・・・・『結界』」

ぼそっとした小声が耳に入ると同時に、青いフィールドが召喚獣を中心に広がった。

それは、瞬く間に召喚フィールド全体を覆いつくす。

そして、これまた瞬く間に、戦場に変化が訪れた。

「教科　日本史
Ｆクラス　霧島翔子　６７２点
Ｆクラス　他４１人　平均７４点
ＶＳ
Ｅクラス　５０人　平均８１点」

２６話：唐突な考察は負けフラグ

試験召喚戦争における重要な要素として、『腕輪』というものがある。これは科目試験で４００点以上（総合科目なら４０００点以上）もの点数を獲得した生徒のみが使用できる能力であるが、実際に戦争中に使われた記録は多いとはいえない。

既に高い点数を取っているＡクラス生徒らが手加減したのでは？という考えもある。しかし、過去に腕輪を手に入れた生徒らは出し惜しみなくその能力を発動させている。

何故か？

理由の一つとしては、そもそも過去に試召戦争自体が『思ったより』は活発に行われていなかったことが挙げられる。設備に不満のある下位クラスが上位クラスの設備を手に入れるために下剋上を目指すことが試召戦争の基本的な仕組みだが、下位クラスとなった者は一部の例外を除いて、勉強に関する意欲が薄い。クラス設備に惹かれることはあっても、その為に一生懸命勉強に取り組むという生徒はそこまでいないのだ。

部活動に熱心な下位クラス生徒はどうか。彼らは、上位クラスの生徒らが熱心に勉強をしているように、物事に必死で打ち込めるだけの熱意を持っている。その熱意を勉強に向けさせれば一気に伸びるのでは？という考えもあったが、そもそも両方に打ち込め

る生徒はその時点で上位クラスにいる。下位クラスの生徒は、自分のすべてを注ぎ込んでいる部活動の時間を割いてまで、勉強に取り組もうとは思わない。

要は、勉強に対する意欲がわかない＆意欲はあるが物理的な勉強時間がとれない生徒が集まっているのだ。

その点、今年のFクラス代表、坂本雄二の演説は絶妙であったといえる。彼は初めに『Aクラスの設備を手に入れる』と断言をした。過去の代表は、精々1つ上のクラスを目指し、クラスメートらに発破をかけた程度である。意欲のない勉強に必死に取り組んで、その報酬がちょっといいくらいの教室では割に合わないと自分勝手に解釈をし、やる気を出さない生徒も多かった。

対する雄二の目標は、最上位設備である。そこまで大きな報酬があるなら、いくら意欲のわかない勉強アレルギー人でもやる気は起きる。さりげなく、『あとはお前らの頑張り次第』という旨のことを言って、しっかりと逃げ道をコンクリートで整備しているあたりは抜け目ないが。

下位クラスが努力をし、それに危機感を覚えた上位クラスも勉強に励む。そのような相乗効果を期待している学園長にとっては、今年のような活発な年は正に望んでいた状況であるといえる。

・・・閑話休題。

一つ目の意見は出た。さて、二つ目である。こちらは前とは逆に、高得点者が原因となっている。いや、そういってはかわいそうかもしれないが、一つ目よりは原因が分かりやすいのだ。

簡単な話、１科目とはいえ４００点以上取れる生徒がほとんどいないのだ。

なにせ、最高クラスのＡクラスでさえ、一科目の平均点数が２００点台前半であり、３００点を超えれば最高学年でも一目置かれる存在となる。それが４００点越えとなれば学年のＴＯＰ１０に名を連ねられるエースとなれる。

そして、そんな生徒らは必然的にＡクラスに固まることとなる。下位クラスにも一科目特化の生徒はいるが、数は圧倒的に少ないのが去年までの状況であった。

・・・さて、もしも下位クラスが腕輪の能力を乱発できるとしたらどうなるだろうか？その答えは今年の試験召喚戦争が導き出してくれるだろう。

「どういうことよ!?」

現Ｆクラス教室前の廊下で中林は湧き出る苛立ちを抑えきれなかった。

Ｆクラスの先遣隊を蹴散らし（しかも警戒していた吉井が戦死）、そのままの勢いで教室に突撃したＥクラスは、点数の差、士気の差よりどんどんと教室の扉付近に出来た包囲網を食い破っていった。さすがに代表ということもあって先鋒を他生徒に任せた中林だったが、戦況に気を良くし、あと少しで自らも前線に加わろうと考えていた。

その勢いが急に萎んだ。

いきなり召喚フィールドの色が青色になったかと思えば、自分の点数が減少してしまったのだ。いや、自分だけではない。Ｅクラス全員の点数が下がっている。さらに、見間違いでなければ、相手の点数が若干増えたように感じる。扉からちら見することしかできないが、５０～６０点台クラスが多かったＦクラス生徒の召喚獣が、今では７０点台が多い。結果、こちらの点数減少と噛み合って、点数の差があまりなくなってしまった。

目に見えて、人の流れが鈍った。押し込んでいたクラスメートの足が止まり、一種の

こう着状態になっている。
　それでもほんの少しずつ前に進んではいる。突撃の勢いと微妙な点数差が残っている証だが、結界が展開される前と比べると、雲泥の差であることには変わりない。おまけに片方の扉の先は机やら椅子やらが積み上げられており、こちらからの突入は不可能な状態だった。
　明確に見えていた勝利の道が急に隠れてしまい、思わず髪を掻き毟った。続けて壁を蹴り上げようと足を後ろに引いたところで、何とか思いとどまる。もし振りぬいていれば中々のサービスショットになっていただろう。
「落ち着きなさい・・・」
　胸に手をあて、深く呼吸をする。中林はいったん閉じた目を開け、新たに展開された結界に目をやった。
「恐らく腕輪の効果ね・・・。吉井君がいない今、ブラッドエッジさんが発動させたとみるべきかしら」
　激戦区域に目を移しながら一人、中林は思考の海に潜った。
　昨日の下剋上は、当然ながらその日のうちにEクラスの耳にも入っていた。ただし、体育会系部活動所属の生徒が多いせいか、まともに自習するものが少なく、勝敗が決した瞬間は体育館やグラウンドで思い思いにトレーニングをしている者が多かった（その

生徒らはその後、きっちりと鉄人に絞られたが)。

そのため、Fクラス勝利という情報を皆が共有したのは、決着がついた時からだいぶ経っていたのだ。

慌ててFクラスについての情報を得るためにDクラス生徒を捕まえた所、吉井明久の腕輪によって全滅したと聞いた。

『あの』観察処分者の吉井明久である。冗談かと思ったが、その表情から嘘は言っていないと感じた。半年前から霧島さんと交際をしていたことは有名なため、もしかすれば霧島さんに感化されて真面目になったのかもしれない。

ともかく、その情報を基に集まったクラスメートを説得した。

『Fクラスは腕輪の能力によるマグレによって勝利しただけ。予め知っていれば対策の立てようはある』

『そして、吉井君さえどうにかすれば残るはFクラスのみ。楽にDクラス設備を手に入れられる』

その提案に難色を示すものも少なからずいたが、多数決の原理を存分に利用して今日この戦争に持ち込んだ。

昨日の今日を選んだのは、ひとえに吉井君の回復時間を取らせないためである。その目論見は見事成功したようで、最初に出てきた吉井は何もできずに補修室送りとなっ

た。

・・・誤算といえばブラッドエッジさんがＦクラス所属だったことか。試験召喚戦争を申し込んだ後に気づいてしまい、さらには相手の代表の口車に乗せられてしまったためほぼブラッドエッジさんの対策なしで戦争に突入することになったのが痛手か。

ふと顔を上げると、心配そうな表情をしたクラスメートと目があった。

「なんでもないわ！とにかく押しなさい！」

ずっと声を上げていた状態だったので、少し黙り込んでしまったのを気にしたらしい。自分の声を聞いたその生徒は慌てて扉付近の激戦に加わった。

（・・・大丈夫なはずよ。点数はこちらが有利、おまけに腕輪の効果は長時間続かないはず）

自分に言い聞かせるように、心の中で反芻する。そう、大丈夫だ。Ｆクラスにはもう切り札はない。このまま攻勢を維持して腕輪の点数を消費させていけばいずれこの結界は消える。

そうなれば我々、Ｅクラスの勝利だ。

27話：慢心、ダメ、絶対

「・・・そろそろだな」

戦況をじっと見守っていたが、無意識にその言葉が口から漏れた。

Eクラスが突撃を掛けてきてから既に1時間半が経った。両クラスの一進一退攻防はその間休むことなく続いており、少しずつEクラス側に天秤が傾いてきている。

翔子の腕輪でなんとか持ち直したとはいえ、点数差はある。どんなに小さなものであっても長期戦になればなるほど、人数差と点数差の影響はより濃く出てくる。あれからFクラスは12人が、Eクラスは9人が戦死しした。戦死まではいかずとも点数を削られた者を含めれば両クラスの半数以上に上り、今回の戦争がいかに激しいものであるかが分かる。

こちらは著しく点数を削られたものを下げ、回復試験に回しながら戦っているが、相手は恐らくノーガード、不退転のままFクラスを押し切る気でいるはずだ。Eクラス代表を挑発した経緯もあるが、あの中林が押して引いての駆け引きを仕掛けてくる可能性は低い。

現に、Eクラスからの圧力は一向に弱まる気配を見せないでいる。もし、回復試験な

りを受けに戻っているとするならば、多かれ少なかれ攻撃の『波』があるはずだ。
今回、相手のＥクラスからはその『波』を感じない。ということは、戦争開始から現在に至るまで、常に全力全壊の精神で攻勢を仕掛けてきているはずだ。
全力攻撃というものは、単純そうに見えて意外と侮れない。特に自分らのような格下相手には有効な手段の一つと言っていいだろう。策がないという欠点こそあるが、戦力差を最も浮き彫りにできるという大きな利点がある。対処しようにしても下手な策で対抗しようものなら、逆に勢いのまま食い破られてしまう怖さもある。
策を弄するとは簡単に言うが完璧に実行するのは難しい。少しのタイミングのずれで相手に与える影響が激変してしまう。もちろん、策の内容自体に問題があるならば、それはもうタイミング以前の問題となる。
・・・今回の戦争において用意した作戦は、実を言うと一つだけである。明久の戦死から翔子の腕輪効果補助による戦闘、という流れをまとめて作戦としていたため正確に言えば一つではないが、他に策は用意していないため複数と言わなくてもいいだろう。
さて、その用意している策だが、いよいよ最終段階に入った。後は戦況を見て、どのタイミングで発動するかである。最高のタイミングは、『相手の代表が教室に攻め込んできた時』だが、その瞬間に決まれば勝利確定と言っていい。
だからこそ、その瞬間を見極めなければならない。

「須川、ちょっと来てくれ」

扉付近の戦闘から目を外し、椅子に寄りかかっていた生徒、須川の名前を呼んだ。回復試験も終わって採点待ちという名の休息を満喫していたのだが、その邪魔をされたことで若干眉を寄せる。

彼は前回、Ｄクラスとの対決で見事に役割を遂行してくれた。序盤で相手を押し込み、反撃してきたところで自分を犠牲にし、明久の回復時間を稼いでくれた影のＭＶＰと言っていい。Ａクラス戦ではラグナを指揮官にしようかと考えていたが、今後の結果次第では須川に任せる可能性も出てきた。

最前線の指揮官となると冷静な判断力はもちろん、長く指揮を執り続けられるよう、ある程度の点数もほしい。片方だけならまだしも両方備え持った人物となると、Ｆクラスでは片手で数えられるほど少なくなってしまう。

「どうした、代表？」

「仕掛けるぞ。お前に大役を任せる」

彼をＡクラス戦でどのポジションに就かせることが出来るか。自身の試すような目を認識したのか、須川の表情がさっきよりも厳しくなった。

いける。

大きく一歩踏み込んで突き出した槍が、相手の召喚獣を捉える。鋭い刺突を受けようと構えられたサーベルはしかし、簡単に弾かれ遠くへと飛んで行った。そのサーベルが地面に落ちる頃には、槍で体を貫かれた召喚獣の姿が薄れ、消滅した。

いける。

微妙な均衡を保っていた戦線が、明らかに押しあがってきている。もはや教室内に食い込んでいるＥクラスは自分を合わせて軽く１０人を超えている。激しい喧騒の中、一歩、的一歩と相手の喉元に刃が近づきつつあるのがはっきりと感じられる。

「いけるわ！みんな、もう少しよ！」

感情の高ぶりを抑えきれず、大声を出して発散させる。おおう！と周りから返ってきた力強い声を聞きながら、新たな召喚獣と武器を合わせる。

ほぼ一進一退だった攻防に変化が現れたのは２０分ほど前のことだ。こちらが前に出ようとすると必ず反撃をしてきたＦクラスだが、それが無くなったのだ。押し返すから受け止める体勢になったように感じる。

ついに戦力が切れたか？

自分たちEクラスと違い、Fクラスは教室内で戦闘していることから回復試験も並行しているはずだが、知っての通り試験は1時間もかかる。早く切り上げることも可能だとはいえ、テストは１００点満点ではなく上限なしの青天井式だ。３０、４０分で採点するとなるとどうしても点数に影響が出てしまう。

戦闘での被害に回復が追い付かなくなったか？そうであるなら最大の好機だ。

２、３人でいい。防衛網を突破できればあとはもう乱戦である。双方の総力が入り乱れた戦闘では相手も作戦の使いようがない。そして、そうなれば必然的に点数の高い自分たちが勝つ。

要注意のブラッドエッジさんも1時間を優に超えて腕輪を使用してるのだ。もう脅威となるだけの点数は残っていないはずである。

障害は、ない。はっきりとこの目に見えてきた勝利とつかむため、私は教室に押し入った。

『教科　日本史

　中林宏美（代表）　Eクラス　１１７点』

相手の腕輪の影響で若干点数が下がっているとはいえ、日本史は最も得意とする教科である。多少の弱体程度では止められるはずがない。

自分の姿を見たのか自分、相手双方の陣営から驚愕の声が上がった。慌てて話しかけようとしてくるクラスメートを一喝する。今は1秒も惜しい。

「私も加わるわ！このチャンス逃したら勝てるもんも勝てなくなるわよ！」

言葉を発しながら相手に切りかかる。あわよくば放心状態の敵を1人と思ったが、驚きからいち早く立ち直った相手に、薙刀で武器同士を合わせられた。軽く舌打ちしながら2回、3回と打ち合う。

『教科　日本史

　木下秀吉　Fクラス　７７点』

相手は、色々な意味で有名な木下さんだった。・・・本当に美人ね、性別を偽っているんじゃないかしら、と心の底から思う。少し、いやかなり妬ましい。思わず召喚獣を操作することに力を入れすぎてしまいそうになる。

「な、中林よ、何故そんなにワシを睨んでおるのじゃ!?」

「うっさいわ！誰が顔面ラストハルマゲドンよ！」

「誰もそんなこと言うとらんぞ!?」

私にも彼（彼女？）みたいな美貌があれば久保君にも想いは届くのだろうか。そこまで考えてハッとする。自分で1秒も惜しいと言っておきながら、戦闘以外のことに考えが及んでしまった。

その顔で無意識に自分の集中をかき乱すとは・・・付き合いたい女子ランキング３位に入った実績は伊達でないということね。

「本当にっ、厄介ねっ、木下さんは！」

端から見れば八つ当たり以外の何物でもない行為でもあるし、自覚もしている。それでも世の中の不条理に納得すること何でできない。

９割ほど私怨の混ざった槍の連続突きを、木下さんの召喚獣は死に物狂いで避けようと動く。だが、斬撃ならともかく刺突をそう何度もかわせるはずがない。数発目あたりから攻撃がかするようになり、その影響でどんどんと召喚獣の点数が削れていった。

相手は反撃をしようとこちらの攻撃をかわした後に薙刀を構えようとするのだが、その暇を与えるほど自分は甘くない。攻撃に攻撃を重ねる猪突猛進。相手に攻撃の隙など与えるはずがない。

援護を呼ぼうにも、我に返ったクラスメートらが相手への攻撃を再開している。相手もその対応で手いっぱいのはずだ。

「ええい・・・！」

猛攻を何とか凌いでいた木下さんだったが、このままでは負けると見たのだろう。躱した後の無理な体勢から薙刀を振るってきた。

当然、私はそれを待っていた。

「もらったあああ!!」

相手はワンチャンスにかけてきたのだろうが、それがやすやすと決まるならばワンチャンとは言わない。苦し紛れの反撃など躱すのは容易であり、躱した後の相手は隙だらけである。残ったのは体制を崩した相手の召喚獣のみ。

前にのめり込むように駆け出した自身の召喚獣。放った槍の一撃は木下さんの召喚獣をしっかりと捉えた。

『教科　日本史

木下秀吉　Ｆクラス　０点』

「まだよ！狙うは代表ただ一人、防ごうとする者はねじ伏せなさい！」

鉄人に連行されていく木下さんを見ながら、すこしだけすっきりとした私は、休む間もなく次の召喚獣に切りかかっていき、そして今に至る。

もう負けは無い。唯一警戒していたブラッドエッジさんは、自分が教室に入って２０分ほど経過しているのにもかかわらず前に出てこない。どうやら相当に腕輪の点数消費が痛いようだ。１時間以上発動し続けられるという時点ですごいのだが、これなら残りの効果時間もあとわずかと見ていい。回復が追い付かず、腕輪の効果も切れたとなったらあとはもうじり貧のはずだ。

「せやあああああああ!」

金属バットを構えた召喚獣に横なぎの一閃を与える。見事にクリーンヒットした相手は、はるか後方まで飛んで行った。

「上田あああ!」

「お、おい、誰か代表を止めろよ!あいつさえ倒しちまえば勝ちなんだ!」

「出来たらとっくにしとるわ!指示なしでどうやって倒せってんだよ!」

戦闘の合間に相手の喧騒も聞こえる。どうも指示系統が狂って、個人個人の判断で動いているようだ。

・・・もしかすると木下さんが指揮を執っていたのだろうか?だとすればあの私闘が案外クラスの勝利に貢献していたこととなる。今頃彼女は鉄人の補修を受けているだろう。かわいそうなので、明日には1ランク下がったクラス設備をプレゼントをしよう。

ふふふ、と含み笑いをしながら高らかに勝利宣言をした。

「今よ!全員突撃!!」

もはや相手は烏合の衆だ。私たちの突撃は止められない。

おおおおおおおお!!と大きな歓声を背に受けながら、崩れかけている防衛網にとどめを刺そうと自身の召喚獣を突っ込ませた。

その時、音が聞こえた。

『ガラッ！』

教室の扉が開く音だった。

２８話：映画とかで最前線に出る指揮官とかよく見るけどあれ危険じゃね？

信じられないことが起こった時、人は一瞬思考を止める。
それはあまりにも受け入れがたい現実を許容しきれないがために起こる一種の防衛反応であると言われている。当然、思考が停止しているのだから今まで行っていた行動も止まって、身体の硬直を引き起こす。
その時間は一瞬か、数瞬か、はたまたそれ以上か。そのわずかな違いが、命取りになることがあるのだ。

『須川。音を立てない様にバリケードを崩せ』
代表からその指示を受けたのは２０分ほど前のことだった。回復試験が終わり、時間経過と共に悪くなっていく戦況を見守っている最中に呼び出され、人員を１０人近くも

部下として付けられたのだ。

バリケードとは、Ｆクラスの前の扉を塞いでいる机の山のことである。開戦前になんとか完成までこぎつけたその防壁はＥクラスの侵入を防ぐのに一役買っていた。

もちろん、無理に崩して入ろうとすれば、やれないこともない。ただし、決して軽くは無い机の山であるため一歩間違えれば怪我では済まない事態を引き起こす可能性がある。教室内で組み上げたものなのでこちらから一つずつ降ろしていくには問題ないが、外から道を開けようとするのは非常にハイリスクだ。

学校行事で怪我をすることほど馬鹿らしいこともない。自然とＥクラスは何の障壁もない教室の後ろ側の扉から戦闘を仕掛け、Ｆクラスもそちらに人を集め、必死に防衛を行った。

Ｆクラスに若干分の悪い膠着状態が２０分、３０分と過ぎていく。止められてこそいるが手ごたえははっきりと感じているＥクラスは作戦の変更など考えるはずもなく、一転突破のためがむしゃらに圧力をかけ続けた。目の前の戦闘に集中力を全て働かせる生徒たちの頭の中からは、いつしか前方の扉のことなどすっかりと抜け落ちてた。

とはいえ、生徒らは目の前の戦闘で精一杯なのだ。万が一余所見でもして戦死でもしてしまったら、地獄の補修授業～鉄人を添えて～が執行されてしまうため、視野が狭くなるのは仕方がない。・・・・本来であれば、指揮官が全体を見渡さなければいけな

いのだが、Eクラスの場合はその当人が最前線でドンパチをやらかしていた。

・・・・・・とまあ外野から見ていた分もあってか、比較的容易に状況を察することが出来ていた。自分ひとりではなく貴重な防衛人員を割いてまで仕事を任された意味についても、ある程度は理解が及ぶ。

問題があるとすればタイミングがシビアなことだが、と思いつつも、他の生徒らと協力してバレないように机を一つずつ降ろしていった。

目の前で繰り広げられている激戦。それを見ていると無意識の内に焦りが生まれてしまうため、なるべく視界から外す様にして作業を続けた。

結果、何とか決壊前に、机の山を取り除くことが出来た。

それなりの重労働であり一仕事した後のような疲労感があったが、本当の仕事はここからだ。

Eクラスの歓声が大きくなった。後方の入り口を見ると、相手の代表である中林の召喚獣が、防衛線に穴を空ける寸前まで悪化した状況があった。もう、こちらの防衛網には十数人ほどしかいない。

「今よ！全軍突撃!!」

ここで勝負を決める。そんな意志が伝わってくる命令が、Eクラスに下った。

代表の掛け声に雄たけびを挙げるＥクラス生徒らと、代表本人。その意識が、完全に一転突破に集中した。

「今だ！須川!!!!!!!!」

中林にも劣らない大きな声が、教室内に響き渡った。その声を最後まで聞くことなく、自分は教室前方・・・・・・今し方封印を解いた扉を開け切った。

「代表！囲まれましたっ!!」

私がその知らせを受け取ったのは、最後の突撃命令を出してからわずか１分後のことだった。

あと少し。それこそあと数人倒せれば堰が切れ、全員がFクラス内に雪崩れ込める・・・そんな勝利目前の状況が過去のものになったことが、私は受け入れられずにいた。

相手の代表の叫び声と同時に聞こえた、扉を開ける音。一瞬、何の音だか理解できずに手が止まり、数瞬後に血の気が引いた。

「後ろっ・・・!?」

声を出そうとしたタイミングで、前方からFクラスの召喚獣が突っ込んできた。下がる一方だった相手からの突然の反撃。慌てて迎撃をして数秒後に退けたが・・・・・・その数秒が全てを分けてしまった。

少なくない戦死者に加え、押せ押せムードもあいまってFクラス教室内にほとんどのEクラス生徒が入り込んでいた所為で、廊下にいたクラスメートはわずか2、3人。

その数人が、何も状況が飲み込めないまま戦闘を仕掛けられ、鎧袖一触のような容易さで戦死者リストの仲間入りを果たした。

嵌められた。

序盤、最大の憂いを潰せたことで慢心があったのかもしれない。戦争中、自分が代表

だと強く自覚していたにも関わらず、我慢できずに最前線に飛び出してしまった。もし私が後ろから戦況を見守っていれば、自ら迎え撃つことで粘りつつ、加勢を呼んで対処できていたかもしれないのに。

自分の手でケリをつける。その意気込みがどうだ?自分の所為で勝ちが手の平から滑り落ちてしまった。代表である私の、一瞬の判断ミスで。

「クソっ・・・!」

戦闘の末、なんとか1体の点数を0にする。しかし、その状況を見ても他のFクラスの生徒らは悲観しない。状況が飲み込めたのだろう、先ほどまでとは正反対の燃えるような表情をして、こちらに踏み込んできた。

教室の入り口内側に、半円状に広がるEクラス。それを囲むように展開するFクラス。ここまでは少し前と変わらないがその入り口を、逃げ道を塞がれた。

袋のねずみとは、このことだ。士気の高さで戦闘を優位に進めていた私達。それが今、はっきりと折れる音が聞こえた。こんな状況では、多少の点数の違いはさしたる問題ではない。

包囲されたことで、逆転した形勢。あれだけ攻勢に出ていたクラスメートが1人、また1人と減っていった。

「やっぱすげえよ代表は!!」

その声が耳に届いた。その言葉を発したのは、相手方、Ｆクラスの生徒だった。
純粋に代表を称える叫び。その生徒の方角奥に、相手の代表がちらっと見えた。

代表は・・・・坂本君はニヤリとした笑みを浮かべていた。

新学期2日目に行われた試験召喚戦争『Ｆクラス』ＶＳ『Ｅクラス』。その試合は開始2時間で終了した。
序盤、吉井明久が戦死したことでＥクラスが攻勢を仕掛けた。その勢いのまま特攻し、Ｆクラス代表の喉下まで刃を近づけるも策に嵌り、逆転。
それでもその後数十分は粘ったが、最後は須川がＥクラス代表、中林を倒し戦争は終了した。
勝者、Ｆクラス。初日に続く、2日連続の番狂わせとなった。

２９話：投稿開始日から６年経ってようやく登場するオリキャラがいるらしい

明久は激怒した。

必ず、かの邪知暴虐のゴリラを抹殺せねばならぬと決意した。

ここまで怒りに身を支配されたのはいつ以来だろうか？鉄人の補修を受けながら自分の身に宿る憎悪を焦がし続けた。

あのゴリラを信じて受けた日本史の回復試験。しっかりと睡眠を取ったこともあり、過去最高ともいえる会心の出来だった。相手には悪いが、Ｄクラスよりも点数が低いＥクラス。そして１時間フルに受けたことで昨日よりもさらに上がっている点数という最高の状況。

もう、何も怖くない状態で真正面からＥクラス全員に対し、戦闘を仕掛けた。

２階全体に聞こえるほどの高らかな宣言。

派手な演出と共に具現化される召喚獣。

その頭上に映る『世界史　０点』

これ以上の恥はあるだろうか、いやない。あいつのことだ、ポカで異なる科目の先生を連れてきたなんてことはありえない。間違いなく、世界史担当の教師だと理解して、自分に託したはずだ。

何の相談も受けないまま、僕は雄二の描くストーリーの駒を演じる羽目になったのだ。死ぬことが確定している兵士を笑顔で前線に送りつける。こんな非道が許されるはずがない。

自信満々に散り、鉄人に担がれて退場する自分を、どこか可哀想な目で見つめるEクラス。時間経過と共に補習室に連れ込まれてくるFクラス生徒は、自分に向けてどこか冷たい視線を向けていた。ただでさえガラス製（１００均）で出来ている自分の心は、既に粉々である。

２時間後に試験召喚戦争が終わったという一報が入ってきたが、補習はそこからさらに1時間続いた。計3時間、3時間である。あのババコンガの所為で自分はそれだけの時間、言葉にならない辱めを受けた。

この罪、万死に値する。

午後1時、補修が終了した瞬間に、自分は一陣の風になった。

喩えこの身が朽ちようとも、刺し違えてでもあの男を屠る。いつまでも僕が君の言う

ことを聞くだけの人形と思ったら大違いだ。地球上でただ1人、誰の変わりでもない『ボク』という存在がいる。操り人形でも、イエスマンでもない。意志を持った人間を弄んだその罪、思い知るがいい。

鉄人が何か話しかけてきたが振り向きもせずにすぐに補習室から飛び出した。ただひたすらに最短距離でＦクラス・・・元Ｄクラスの教室に突っ込む。戦後対談を終え、やっと昼休憩に入った頃だろう。食事の最中という極めて無防備な時間帯、狙うにはもってこいだ。

階段を駆け上がり、新校舎の端に向かって一直線。何人も我を遮ること叶わず。過去最高と言えるスピードで僕は現Ｆクラス教室にたどり着いた。

そして・・・そのままの勢いで豪快に扉を開け放った。

「こんにちはあああああ死ねやゴリラあああああああああああ!!!!!」

「・・・・・・よ、吉井君？」

入り口付近にいたのはＤクラス代表、平賀君だった。
教室にいた生徒は、全員がＤクラスの生徒だった。全員が、驚いたようにこちらを見つめていた。

この日自分は、恥の上塗りという言葉の意味を知った。

～時は遡り１時間前～

「こんなの勝ち目無かったじゃないのよ・・・・・・」

猪女が一転、意気消沈した様子で落ち込んでいた。

Ｅクラス代表中林。彼女だけが現Ｆクラス教室に残り、それ以外のＥクラス生徒は自分の教室に返されている。戦後対談は代表同士だけで行えるため、正直その他はいてもいなくてもどちらでもいいことになっている。

勝利したならまだしも、敗北側での戦後対談など聞きたくないのだろう。代表に役割を任せて、全員が引き上げてしまったみたいだ。少しだけ、彼女に同情した。

まあ、勝ち寸前だと信じていた試合がひっくり返されて、しかも後から全然惜しくも何とも無かったと分かれば彼女でなくても気落ちするだろう。

自分の周りで教室の整頓を行っている3人・・・翔子、ラグナ、姫路の3人に目を向ける。ラグナが率先して机、椅子をもとあった場所に運び、翔子、姫路に加え秀吉や島田が掃除を行っている。

結論から言えば、今回の試験召喚戦争は予想以上の出来だった。

いくら翔子の腕輪の効果があったとはいえ、それでも点数は劣っていたし士気も低かった。そんな中でも必死に粘り、こちらの仕掛けが最高のタイミングとなる時間帯ま

で壊滅せずに持って見せた。

まだまだ課題は多いが、打倒Aクラスという目標は上辺だけではなかったと実感した。正直心の中ではラグナか姫路あたりを加勢に向かわせようか考えていた時もあったが、彼らを信じて正解だったみたいだ。

そして、今回も須川がいい働きをしてくれた。即席バリケードの解除と、Eクラスの退路の封鎖。最後に点数が削れていたとはいえ、中林にトドメを刺して戦争を終わらせた働きはMVPといっていい。

現時点で、俺がFクラスの指揮権を預けるとするなら、須川かラグナか翔子か。明久や姫路は咄嗟の機転に難があり、秀吉は須川以上に点数が不安定なので次点に留めている。

とはいえ、自分以外にクラスをまとめられる存在が複数人いるというのは大きい。代表がおいそれと行けない最前線。そこで一瞬の判断を逃さない頼れる現場指揮がいるといないとでは大違いだ。

出来ればもう1、2人は欲しいが・・・・・・それは次の機会だ。今は、目の前の事後処理に務めよう。

「吉井君とラグナさんだけかと思ったら・・・もう2人いるとか反則よおおお！」

小声ながらよく響く愚痴を繰り返している中林。自分がどれだけ無謀な挑戦に挑ん

だのか、今になって気づいたみたいだ。昨日、徹底的に翔子と姫路の存在を隠し、吉井と一緒に早く下校させたことが生きた。

「さて、中林。悪いが・・・・・・」

「はぁ・・・分かってるわ。悔しいけど今すぐに設備を・・・」

「その事だが待ってくれ。もう少しで来るはずだ」

「はい？」

来るって一体誰が？

そんな彼女の言葉に答えるように、教室の扉が開いた。立っていたのは男子生徒と女性教諭の２人だった。

「平賀君？それと高橋先生まで・・・」

中林が、疑問が詰まった声を出す。教室内に入ってきたのはＤクラス代表、平賀源二と学年主任の高橋女史だった。組み合わせの意図が読めず、困惑している様子が見て取れる。

俺も、何も知らなければ首を傾げていただろうが、２人が来た理由は把握している。呼んだの俺だし。

頭をかきながら近づいてくる平賀に向かって片手を挙げる。

「よう平賀。Fクラス教室の1日体験を経て感想はあるか？」
「そうだね、中々刺激的だったよ。校舎の中で廃墟での過ごし方を学べたからね」
出来れば二度と御免だよ、と苦笑いを浮かべる平賀の姿を見て自分も少し笑った。廃墟とは言いえて妙だ。あの状況で平気な人物は、普段からごみ屋敷に住んでいる人種なのだろう。
確かにあの環境なら瞬間的に勉強への関心は高まるだろう。だが学力が上がる前にやる気が萎えたり身体に異常をきたしそうな気もする。今までのFクラスがどうやって1年間あの地獄に耐えたのかは興味がある。
ちなみに平賀の顔からは、もう1日たりとも居たくない、というメッセージが伝わってきた。やはり勉強するにも、最低限の設備は必要みたいだ。今度、あの学園ｔ・・・妖怪ババアに掛け合ってみようか？
「高橋先生。今一度確認ですが、昨日言った処理方法で問題ありませんか？」
「はい。ルールにも抵触しておりませんし、設備ランク的にも問題ありません。あとはEクラス代表、中林さんの許可が降りれば承認と致します」
眼鏡をクイっと片手で直しながら、書類を確認する高橋女史。その言葉に、平賀がホッと息を吐いたのが見て取れた。
一方、自らが関与しない場所で着々と進んでいく話に我慢ならず突っ込んできた人物

がいた。話の蚊帳の外にいた中林、その人である。
「高橋先生、一体どういうことなのですか？」
「ええ、実は・・・・・・」
一呼吸置いて、高橋先生が説明を開始した。

そもそもの始まりは、昨日行われたＤクラス　ＶＳ　Ｆクラスの戦後対談である。
下位クラスが上位クラスに勝った場合、通常はクラス設備の交換が行われる。平賀もそれを覚悟して望んだのだが、相手側の代表、坂本から手渡された１枚のメモも読んだ瞬間、憂鬱な気分が吹き飛んだ。
その紙には、次のような内容が書いていった。

『今後、ＦクラスとＥクラスの戦争が行われてＦクラスが勝った場合、次の処理を行う。
・Ｄクラス教室にはＤクラス生徒が配属される。
・Ｅクラス教室にはＦクラス生徒が配属される。
・Ｆクラス教室にはＥクラス生徒が配属される。』

要はDクラスが元いた場所に戻り、EクラスとFクラスが教室を入れ替わった状態にするというものだ。

坂本は念のために初日に教師にも確認したが、勝者であるFクラスが通常の勝利条件以上に有利になる内容ではなく、Eクラスの設備降格も問題なく行われる内容だったため、相手の代表が承認すればと言う条件付で許可を降ろした。

明日から地獄の底辺生活が始まる平賀にとってはまさに、天から降りてきた1本の蜘蛛の糸に思えた。3ヶ月間もの間、あの教室で授業を受けることを覚悟していたが、それがなくなるかもしれない。

ただ、本当にそんな展開になるのかとも感じていた。試験召喚戦争は、下位クラスが上位クラスに宣戦布告した場合は拒否できないが、逆なら断ることが出来る。この場合の下位とは『設備』における下位という意味であり、Dの設備を持ったFクラスがEクラスに仕掛けても、拒否されるかもしれない。

それでも可能性がないよりは断然マシである、と思いながら過ごした新学期2日目、いきなり機会が訪れるとは思っても見なかったが。

「・・・とまあそんな訳だ。悪いがEクラスはFクラス教室に移ってもらうことになる」

高橋女史の説明を聞き終えた中林に俺は声をかける。ルール的には一段階降格という決まりも守っているため問題ない。

あとは中林が許可をしてくれるかどうか・・・・そう思っていたら、彼女がゆっくりとこちらを睨んできた。

不満があるのかもしれない、と考えたがその口からはあきらめの言葉が漏れた。

「・・・・・・私が仕掛けようとする前から全部お見通しだった、って言う訳ね。坂本」

「全部ではないさ。不確定要素も多かった。だが中林。お前なら勝負を挑んでくるって信じてたよ」

「あなたに信じられても嬉しくないっての・・・。まあ、敗者の言葉ではないわね」

中林は一度顔を下げ、両手で自分の頬をパチンと叩いた。その後、吹っ切れたような顔で高橋女史に取り決めの受け入れを申し出た。

「・・・そんな対談があったんだね、戦争終わった後に」
「・・・ごめん、すぐに伝えにいけば良かった」
元Eクラス教室にして、現Fクラス教室。その隅で僕は翔子の胸の中で泣いていた。
Dクラスにダイナミックお邪魔してしまった後、平賀君に事の次第を説明された。話を聞き終え、顔をまともに上げられなくなった僕は、か細い声で謝罪をして、教室を後にした。
自分でも分かるほど真っ赤になった顔に突き刺さる、他のクラスからの視線。突撃の際に放った魂の叫び声は遥か遠くまで響き渡っており、廊下を歩いている間、ジャ○ーズ顔負けの注目をこの身一身に受けることになった。
穴があったら入りたい。既に全焼寸前の精神を抱えながら旧校舎に渡り、現Fクラス教室にたどり着く。
さすがにここまでは届いていないはず。さすがにここまでは届いていないはず。そんな祈りをこめて静かに扉を開き、覚悟を決めて顔を上げた先には、我らがクラス代表が立っていた。

・・・後ろを向きながら。
「おう、お疲れ、あき・・・ククッ」
バッチリ聞こえていたみたいだ。僕は本能のままに翔子に駆け寄り、抱きついた。もう死にたい。

その状態のまま、今に至る。周りから尋常じゃない殺気が飛んできているけどゴメン、今だけは甘えさせて。心の応急修理が終わるまで少しだけ待って。
「・・・よしよし」
翔子に頭を撫でられる。ああ、気持ちいい・・・。
「あ、あの・・・明久君っ！そ、その内きっと良いことありますから！」
「ごめん瑞希それ以上は言わないで」
少しずつ回復している最中に傷口を抉るマネは止めて瑞希。全く悪意がないことが分かっているだけに余計辛い。
結局、５分ほどで最低限の修理は完了し、翔子から離れた。もっとしててもいいのに、とは言われたが、さすがにこれ以上情けない姿は見せられない。既に下限突破してそうだけど。
「いやあ、悪いな、明久」

そんな中笑顔で話しかけてくる赤ゴリラ。元凶とは思えぬほどのさわやかな笑みに、怒る記憶も失せた。

「・・・雄二、作戦だったのならあらかじめ僕にも「ゲーム3本」いやあほんと作戦通りうまくいったね雄二!僕の戦死なんか名演技だったでしょ!」

文句を言おうとしたところで、真面目なビジネスの話が来た。ふふん、いつもいい取引をしてくれるんだから最高だよ我が親友は。

翔子が何かを察したような表情で、軽く雄二を睨んだ後にため息をついていたけど何だったんだろう?

翔子の行動に疑問を抱いていると、廊下から声が聞こえた。

補習から戻ってきたのかな?と思っていたら・・・・・・

「よう!邪魔するで!」

ノリの良さそうな関西弁が聞こえ、扉が開いた。

そこに立っていた人物、いや人物らを見て、固まった。

「まずは勝利おめでとう、かな?」

「まあ、あの４人がいるならＥクラス相手には負けないでしょうね」
「久保君!?それに木下さん、工藤さん、アルカードさんまで・・・」

思わず声が出てしまう。挨拶と共に入ってきたのは、最高クラスであるＡクラスの生徒だった。
「ふふ、お邪魔するわよ」
優雅に入ってきた一人の女子、アルカードさんを見て、ラグナが「げっ・・・」と低い声を出した。
いきなりの意図が見えない訪問に分からず戸惑っていると、入ってきた5人の内、唯一知らない男子が絡んできた。
「おうおう!他の４人は名前呼んだんに、俺だけ無視かいな!」
「え・・・あ、あーごめん、君の名ｍ」
「あーそういえば初対面やったな!すまんすまん!はははは!!」
話しかけてきて返答を待たずに納得していた。返し方が分からずに黙ってしまったが、すぐに相手から次の発言がでてきた。

「そんなら自己紹介やな！俺は天王寺雄介！こんなんだがＡクラス代表をやっとるで、これからよろしくな！」

・・・そんな衝撃発言と共に。

３０話：明日やろうは馬鹿野郎

ついにこの時が来てしまった。

俺は頭に手を当てながら、現状の打開策をひねり出そうとしていたが、いい案が全く思い浮かばない。

昨日の朝から考え続けてついぞ出てこなかった名案が、この場面で都合よく出てくるはずがない。そう思っていても、奇跡に縋りたくなるのは人間の性か。

問題から目を背け、後回しにするという選択は大抵の場合いい結果に結びつかない。時間が解決してくれる事例もないとは言えねぇが、放置している間に問題が大きくなる事だってある。

早めに対応していれば後々笑い話になることでも、時間が経てばとんでもない化け物に変貌していることが少なくない。問題の放置・隠蔽も重なって、次の日から周囲に白い目で見られることは確実だろう。最悪の場合、自分が白い目になるかもしれないが。

・・・・・とまあ、『失敗をしたときはとにかく早く対処する』大切さを語ったわけだが、これを出来る人間はあまりいない。

対処できない、のではない。対処したくない、のだ。

早い行動が最善の結果に繋がる、と頭では理解していても、ミスを認め報告した時点で責められる。それが嫌だから目を背け、臭いものに蓋をするのだ。

その結果、時間を掛けて熟成された『モノ』が誕生すると言うわけである。そう、具体的に言えば今の状況のようなものが。

俺の目の前には1人の女子生徒が立っていた。

頭二つ分近く違う背丈。金髪に輝く長髪を、特徴的な形をしたリボンで結び、ツインテールを形成している。身に纏っているのは学校指定のセーラー服なのだが、校則違反にならない程度の黒い飾りが施されているせいか、外見も相まって人形のような印象を受ける。

何故だかは知らないが、彼女を見るたびに『まきますか　まきませんか』というフレーズが頭の中に浮かんでくる。何故だかは知らないが。

女子生徒としてみても小柄に分類される身長と、1種の装飾を連想させる服装のためか、初めて彼女を見た者は、その美しい容姿も相まって、可憐さ・繊細さを感じ取るだろう。

だが、俺は知っている。決して短くない付き合いなのだ、その本質を嫌というほど理解している。

真紅の瞳でこちらを見る彼女。顔には笑顔を浮かべているが、からかいの感情が隠れているのを見逃さなかった。いつもより瞬きの回数が多いのは、こみ上げる笑いを堪えているときの癖だ。

「ふふ・・・こんなところにいたのね、ラグナ」

お嬢様声、と言えばいいのだろうか。高貴とも傲慢ともとれる声がこちらに向かって発せられる。

口に手を当てて微笑する姿は、どこからどうみても名家の娘だ。この容姿に惹かれ、彼女に告白する男子生徒は後を絶たないという。既に彼氏がいると言うことは周知の事実なのだが、それでも1週間に1回は告白を受けるというのだからその人気ぶりが伺える。

出来ることならぜひともその男子とくっついてほしいのだが。

「あや嫌だ、私は他の男に靡くような軽い女ではないわよ」

「知ってるっつーの」

頭を掻きながら俺は微笑む少女・・・レイチェル＝アルカードを見やる。

明久や姫路よりも長い付き合いとなる彼女は、どこをどう間違ったのか、今は俺の恋人ということになっている。

・・・・・・まあ、日本に来る前に色々あったんだ。うん。

「そういえば、ラグナ。3月に言ったこと覚えているかしら?」

表情を変えずにいきなり切り込んできた。呼吸に合わせて小さく揺れるリボンは、細長い形状を保ったまま空に伸びている。重力に真正面から喧嘩を売っているその装飾のせいだろうか、俺は彼女のことをとある言葉で呼ぶことが多い。

「・・・何のことだ?『ウサギ』」

「とぼけても無駄よ。何ならこの場で、大声で、一言一句違わず言ってあげようかしら?」

「それは勘弁してくれ・・・」

思わず頭を抱えた俺に、ウサギの奴はクスクスと小さく笑う。それには、どこか小馬鹿にしたような態度が含まれていた。

事の始まりは3月の振り分け試験だ。そこで俺は名前を書き忘れるという痛恨のミスをしてしまったのだ。当然のごとく、氏名の未記入は問答無用で無得点扱いとなる。自分で言うのもなんだが、俺の学力はAクラス上位程度はあった。TOP4には割り込めなかったものの、常に一桁順位をキープしていたこともあり、名前さえ書き忘れていなければ間違いなくAクラスに配属されていた。

まあ、それはいい。自業自得、馬鹿なミスをした俺が悪いのだ。問題は、試験前にウサギと交わした会話にある。

こいつも成績優秀、もっと言えば俺と互角だ。それこそ１０回試験勝負すれば勝敗が丁度半々になるくらいには成績が拮抗している。そんな訳もあって、一つ、約束を交わしたのである。

『振り分け試験で負けたほうは、勝ったほうの言うことを一つ聞くこと』

さて、そして今の状況だ。

ヤバい。いやヤバイ。

昨日の登校時点まで名前未記入に気づいておらず、封筒の中身と西村先生の説明でようやく事の次第を理解したのだ。

前にも言ったとおり、自分の振り分け試験での点数は０点だ。この点数でウサギとの勝敗を決めるのだが、結果など考えずとも分かる。０だ。虚無なのである。どうしろというのか。この状態で『レイチェルを倒せ』みたいな感じで王様に命令されたら俺は手に持ったひのきのぼうで王の頭をカチ割る。

幸い、自分の行く先はＡではなくＦクラスである。たまたま出会った姫路（驚いたことにコイツもＦクラスだった）と一緒におんぼろ教室に向かい、ウサギと顔を合わせずに１日を過ごすことができた。

それが何の意味もない逃避だと言うことは自分でも分かっている。どうせ俺がFクラスだということもすぐにバレるだろう。だがそれでも、今一時の平穏を過ごしたかった。帰り道Aクラスに寄らなかったそれが原因である。

といっても、俺の家はバレているのだからいい笑顔と共に訪問されることを覚悟していたのだが、結局その日のエンカウントはなかった。

あれ、もしかしたらいけるんじゃね?とかすかにが、現実はそう甘くないことを知った。

第二学年となってからのファーストコンタクトは、新学期二日目に起きた。現在進行形で優雅にこちらを見つめるウサギ。外見だけはほんとにいい。中身が百鬼夜行も避けて通るほどの代物となっているが。

元Eクラス教室らしい、所々が欠けている椅子に座りながら朗らかに話しかけてきた。

「それじゃあラグナ、振り分け試験の結果でも聞きましょうか」

クスクスと笑うウサギ。もう勝敗は分かっているだろうに、本当性格が悪い。

「・・・ちなみにお前は総合何点だったんだ?」

「４８１５点よ」

「いや高ぇな!」

素でツッコミが出た。こいつ今まで４０００点台前半だったはずなんだが、いつの間にワンランク上がったんだよ。

あれ、これ俺が万全でも負けてたんじゃね？と変な冷や汗が流れた。

「私なりに頑張ったのよ。あなたに勝って命令権を手に入れるためにね」

ウサギは薄目でこちらを見据えてきた。そりゃそうだ、春休み中もちょくちょく会話の話題に出たのだ。彼女が忘れるはずがない。

今になってあんな約束をしなければ良かったと思っても後の祭りだ。

「あー・・・そのだな、ウサギ。あまりだな、ぶっ飛んだ命令は止めてほしいんだが」

言葉を詰まらせながら、何とか懇願する。自分が強い立場に立ったと分かれば途端にぐいぐい推してくる性格なのだ、何を言われるか分かったもんじゃない。

負けた後に懇願などプライドのかけらもない行動だが、背に腹は変えられない。トンデモ命令されるよりはいい。

結構な覚悟を持っての行動だったのだが、彼女は考え込む仕草をした後、意外な答えを返してきた。

「そうね・・・・・まあ、今は保留にしておくわ」

「・・・いいのか？」

ウサギのことだ。一晩かけて命令を練ってきたのかと思ったが、今回審判は下されな

かった。
疑問に思ったが、それをかき消すように彼女が立ち上がり、軽く腕に寄り添ってきた。
「お、おい・・・・・・」
「静かに。始まるわよ」
小さく、それでいて強い口調を当てられ、思わず口を閉じる。ウサギの視線は俺から外れ、教室の中央のほうに向かっていた。
釣られるように、俺も視線を移す。机や椅子がどけられ、ぽっかりと空いた空間に3人の人物が立っていた。
1人は俺の親友、吉井明久。1人は確か、Aクラス代表と名乗った男子生徒。
そしてもう1人、西村先生。先ほど教室に来た彼の、野太い声が響いた。
「では、これよりFクラス吉井とAクラス天王寺による模擬戦を始める！教科は日本史！はじめっ!!」
「「試獣召喚!!」」
教師の声に追随するように、二人の声が重なる。一拍の時を置き、二人の召喚獣が形成された。

『教科　日本史
Ａクラス　天王寺雄介（代表）　８１４点
ＶＳ
Ｆクラス　吉井明久　　８６３点』

具現化された２匹は、一瞬の間も無く距離をつめ、激突した。

31話：敗北フラグその1『序盤戦で有利になる』

何故こうなってしまったのか。自分、吉井明久は訳が分からなかった。
眼の前には活発そうな笑顔で笑う天王寺君と、頭を深く抱えている久保君。諦め顔の木下さんに、ムッツリーニと絡んでいる工藤さん。
後ろを振り返ると、事の成り行きを黙って見守る翔子とあたふたしている瑞希。視界の端で思案顔をしているインテリゴリラ。現状を止めようとする人物は誰もいないみたいだ。

事の発端は、天王寺くんの一言だった、と思う。

～十数分前～
Fクラスの自分、霧島翔子、姫路瑞希の3人と、Aクラスの久保利光、木下優子、工

藤愛子、そして天王寺雄介の４人。計７人が教室の中央付近に陣取っていた。
　この内、天王寺君を除いた６人は昨年中盤から自分の学力上昇プロジェクトに参加してくれたこともあり、友人と言っていい仲であるため会ってすぐに会話の花が咲いていた。初対面となった天王寺君に関しても、驚くほど早く打ち解けることができた。
「へぇ～・・・じゃあ天王寺君がこの学校に来たのはつい最近なんだね」
「おう！元は関西の学校にいたんやけどな。こんなおもろい高校あるって知ったらもういくしかないやろ！ってことで急遽こっちに引っ越したんや」
「・・・・・・すごい行動力」
　あっけらかんと笑う天王寺に、明久と翔子は苦笑する。
　天王寺は生まれも育ちもバリバリの関西であり、関東圏に来た回数は片手で足りるほどだという。そんな状態で単身こちらまで来たというのだから呆れるというか何というか。後ろで頭を抱えている久保を見る限り、彼も進級早々天王寺に振り回されていることが見て取れた。
　話題の尽きない集団を遠くから距離をおいて見守っているのは、他のＦクラス生徒らだ。
　試験召喚戦争終了後にいきなりやってきたＡクラスメンバー。しかも全員が成績最上位で構成されている。おまけに全員が容姿端麗と来ているため、学年の間では結構な

有名人となっている。

女子が3人ということもあり男子生徒が近づこうとしているのだが、聞こえてくる会話の内容に割り込むことができずに二の足を踏んでいる状態だ。

秀吉や康太は接点があるため加わろうと思えば加わることができたのだが、Aクラスメンバーは明久、翔子らと話したいだろうということで輪の中に入らずに見守っていた。最も康太は首からぶら下げている黒光りする獲物を片手にシャッター音を響かせていたが。

女子がいるのに話せない、楽しく会話しているFクラス男子は明久だけという状況に周囲からパルいオーラが醸し出されているが、さすがの彼らもこの状況で暴れてしまうほど自制心が効かないわけではない。

パルパルしい感情を抑えつつも見守ること数分、自然と彼らの脳内には一つの疑問が浮かぶこととなった。

『Aクラスは一体何をしに来たのか?』

当然ではあるが、学校にいる間は授業という苦痛、もとい時間がある。Fクラス、Eクラス以外のクラスは現在進行系で自習のはずであり、休憩時間にしてはいささか来てからが長い。

真面目なAクラスが明久との会話を優先してサボりに興じる・・・なんてことはない

だろうし、何らかの用事か？しかし今はただ駄弁っているだけである。
天王寺と積極的に話す明久、翔子、瑞希。頭を抱えながらも見守る久保くんに、手持ち無沙汰になったのか二人で会話を始める優子と愛子。
いよいよ目的がわからなくなった時、勢いよく教室の扉が開いた。
音に反応した生徒がそちらを見て、反射的に身構えた。その動作に反応した生徒も扉の方に視線を向け、同じように足を一歩引いた。
何てことはない、その身を持って体験してきた恐怖に、体が勝手に反応しただけだ。
「天王寺、すまんな。少し遅くなった」
角刈りの頭をかきながら入ってきたのは、筋骨隆々とした体格を持つ文月学園のガーディアンこと、西村教諭だった。
生活態度に厳しく、成績不良の生徒には容赦ない補修を課す。上位クラスからは慕われ、下位クラスからは恐れられる。当然ながら、テストの点数という点数が超低空飛行を続けているＦクラス生徒にとって鉄人の存在は悪魔そのものである。そこでもっと勉強しなければ！という発想が出てこないところが彼らしいが。
大股で明久らの集団に近づいてくる鉄人。それをみて一歩下がり身構える明久。お前もか。

そして、鉄人に声をかけられた天王寺はあっけらかんとした声を上げ、迎え入れた。
「すみません西村教諭。忙しい中いきなり呼んでしもうて・・・」
敬語の中に混ざる独特の訛りが耳に残る。かしこまった言葉を使っても硬い印象を受けないのは、やはり彼から感じるオーラが要因なのかもしれない。
「気にするな、天王寺。今日はまだ急な案件もないしな。それに、『面白いもの』を見せてくれると聞いている」
「ええ、それはもうめっちゃくちゃワクワクするもんですわ！」
「ほう！言い切るとはますます楽しみになってきたな」
天王寺と鉄人は笑顔で会話をしながら一人の人物・・・明久を見やる。
いきなり二人からの視線を向けられた明久はさらに一歩下がり、一瞬で辺りを見渡した。昔からの親交がある数人にはその行動の意味がわかった。あれは逃走経路を確認する仕草である。
「僕何かまずいことしましたかね、鉄人」
「真っ先にその可能性を思い浮かべる辺りがお前らしいな・・・」
目ざとく逃亡を計画する明久に、鉄人は苦笑いを浮かべるしかなかった。仮にそうだとしても反省、謝罪をせずに逃げ出す行動を取るのが、らしいといえばらしいが。
とはいえ、いきなり捕らえにこないのを見る限り、別件のようである。最初、教室に

入ってきたときの発言から天王寺関連であることは確かのようだが、何故天王寺と初対面の自分にも声がかけられたのか?と明久は疑問に思った。
その疑問に答えるように、天王寺は拳をまっすぐ前に向けた。
「ま、回りくどいことは面倒やから言うで・・・
ワイはＡクラス首席天王寺雄介や!今からＦクラス吉井明久に模擬戦を仕掛けるで!」
にかっとした笑みを浮かべながらの宣戦布告に、明久は反応が遅れた。

そして今の状況である。
Ａクラス代表直々の模擬戦と聞いて、Ｆクラス生徒ら全員が自分たちに視線を向けて

いる。　Aクラスが試召戦争をすること自体が珍しく、運が悪ければ在学中1度も見ることができない首席の戦闘。それが間近で見られるとなれば、全員が注目するのは当たり前だ。

さて、直々のご指名を受けた自分だが、困惑はしていても天王寺君との戦闘には前向きだ。

いずれは倒さなければならないAクラス代表と打ち合えるのだ。勝てばクラスの士気を十二分に上げることができるし、仮に負けても情報を引き出せるという大きな利点がある。まあ負けるつもりはサラサラ無いけどね！

雄二をちらっと見ると、腕を組みながら笑顔で小さくうなずいてくれた。Fクラス代表としても、今回の模擬戦には乗り気のようだ。まあ、自分以上に天王寺くんの情報を欲しているのは雄二だろうし。

どうしてこうなった、という感情は一旦心の隅にしまい、天王寺くんと対峙する。

幸いというべきか、今の自分には無傷の教科、日本史がある。あのマウンテンゴリラの策略でEクラスとの試験召喚戦争では秘密兵器のまま終わってしまったが、この場面で使用することができることには感謝だ。

そう、今回の日本史は今までで一番の出来と言っていい。一番得意な教科かつ最高の出来という、文字通りこれ以上はないシチュエーションだ。

逆を言えば、これで勝てない場合は・・・いや、今はいい。
「鉄人お願いします」
「西村先生、だ」
小言を言いながら鉄人が日本史のフィールドを展開する。高橋女子と同じく、全教科のフィールド生成権利を持っている数少ない教師の一人だ。もしかすれば、それを見越して天王寺くんも鉄人に声をかけたのかもしれない。
薄い青色をした『場』が完成する。その中に立つのは、自分、鉄人、そして天王寺くんだ。
にかっと笑う天王寺くん。来た目的は判明したが、何故そのような行動に出たのかは未だ分からずじまいだ。だが、それを考えるのは後回しでいい。メリットしかないこの戦闘にまずは集中だ。
周りの僅かな喧騒を掻き切るように、鉄人の合図が響いた。
「では、これよりＦクラス吉井とＡクラス天王寺による模擬戦を始める！教科は日本史！はじめ!!」
「「試獣召喚!!」」
僕と天王寺君の言葉と共に、召喚獣たちが具現化する。

『教科　日本史
Ａクラス　天王寺雄介（代表）　８１４点
ＶＳ
Ｆクラス　吉井明久　　８６３点』

点数は・・・勝ってる！
自分たちの点数を見て周りの声が一気に騒がしくなった・・・その前に二匹の召喚獣は激突した。
自分の召喚獣が持つサーベルと、天王寺君の召喚獣が持つ大太刀が真正面からぶつかり、

大太刀を一瞬で弾き返した。

「何やと!?」
天王寺くんが驚愕の声を上げると同時に、自分の召喚獣は更に踏み込んだ。

一回の激突で分かるくらいには、明らかに二人の召喚獣の動きが違う。
しかしそれは当然のことだ。
何故なら僕は、『観察処分者』なのだから。

３２話：戦闘描写が上手く書けないのはどう考えても地球が悪い

「・・・驚いたな」

目の前の光景を見ながら、僕は静かに眼鏡にてを掛けた。

本日昼過ぎ、何を血迷ったのかＦクラスに行こうと言い出した人物が約一名いた。丁度試験召喚戦争終了の報が届き、自習に一区切りがいた時だった。

「よっしゃ、勝ったＦクラスの顔でも拝んでくるでー」

といって一人で勝手に出ていこうとした馬鹿がいた。馬鹿というか、代表である。あまりに自然な宣言だったため呆けてしまったが、慌てて肩を掴んで止めた。

勢い付いていたせいか、ガックンと動きを止める代表。何するんやー！という目で睨んできたが、そう言いたいのはこっちの方である。戦後対談真っ只中に突撃かまして場を荒らそうとする学年首席がどこにいるのだろうか。いたらクラスの恥である。

木下さんや佐藤さんを呼んで説得にあたったところ、話の中で代表の主張が見えてきた。

『Ｆクラスの戦力を確認したい』

代表、天王寺君は笑顔を絶やさず、自分たちに考えを披露してきた。

原因の発端は、昨日の話し合いである。自分、木下さん、工藤さんがＦクラスへ配属となったであろう親友について話していたときに、彼とレイチェルさんが加わって来て盛り上がった話題。ＦクラスがＡクラスに仕掛けてくるかも知れない、というものだ。

自分が確認した限りでは、吉井君、霧島さん、姫路さん、ブラッドエッジさん、土屋君の５人が要注意人物に挙げられる。前の４人は言わずもがなだが、工藤さんの発言で土屋くんもマーク対象に入った。

工藤さんの話によると、保健体育学年一位は彼だという。何故そんな生徒がＦクラスなのかと思ったが、どうやら他の科目が壊滅的とのことだ。武器はたった１教科だけ。しかし、一つだけでも戦況をひっくり返せるものがあるとすれば無視できない。

全く想定していなかった要注意人物が、他にいるかもしれない。

そう思い始めていた時に、代表は動こうとした。最初は反対していた自分も、今後のことを見据えて偵察へ行くことに賛成した。もちろん、見張り役を大いに付けての体制でだが。

１日一緒にいただけで分かったことだが、とにかくこの代表は余計なことに首を突っ込みたがる。ストッパーがいないとどこまで暴走するのか、分かったものではない。

僕、木下さん、アルカードさん、工藤さんの４人体制で天王寺君包囲網を作成する。工

藤さんが機能するかどうかは甚だ疑問だが、まあいないよりはマシだろう。

クラスの臨時代表を佐藤さんに頼み、西村教諭に許可をとって現Fクラス教室に向かう。

到着してからは吉井くんたちとの雑談を挟みつつ、それとなく会話の中から探ってみた。結果、何人かの注意人物が浮かび上がってきた。いずれも、全く警戒していなかった（というよりは、失礼だが名前も知らなかった）人物ばかりであり、改めてFクラスの人材の豊富さに内心舌を巻いた。

聞けば、今回のEクラス戦は吉井くんら高得点者4人共戦闘に加わらなかったらしい。正確に言えば霧島さんはサポートに入ったそうだが、それでもほとんど自力のみの力で、極めて不利な状況から勝利したという。

まだ新学期2日目で急に成績が上がったとは思えない。

（・・・指揮の力か？）

横目で、教室の壁に寄りかかっているFクラス代表だという人物を見る。我関せず、といった態度でのんびりと構えている坂本くん、という者。吉井君が話すにはかなりの切れ者で、2戦とも彼なくして勝利は無かったとの事だ。

厄介だ、と感じた。優秀な代表と、超高得点者の面々。一つ読み間違えたら、相手の剣先がそのまま突き刺さってしまう可能性だってある。

（いや、今知れただけでも僥倖だな）

他愛のない会話をしつつ、思考をまとめる。そうやって結構な収穫だったなと少し気を抜いた所で代表が動いた。後になって思った。代表と一緒にいる時に休める時間なんて無いと。

そうして始まった、代表と吉井くんとの模擬戦での一騎打ち。正直、吉井くんを甘く見ていた。

最も得意な教科とは言え、８００点台後半という点数。数字が表示された瞬間、クラス中からどよめきが起こったのだが、それも当然だ。半分の４００点を超えることすら非常に大変なことなのだ。むしろ更に半分、２００点を全教科で取れば、Ａクラスを十分に狙えるほどの成績となる。

まだまだ、成長していると感じた。自分たちが霧島さんの頼みで、吉井くんの勉強を見始めた時は、あまりの酷さに唖然としてしまったが、どんどんと知識を吸収して気づけば自分たちもあっという間に抜き去ってしまった。

天才。自然とそんな言葉が出てきた。才能という面ではない。吉井くんは『努力の天才』だった。やると決めたら徹底的に集中して貫き通す。人間、誰しもサボりたくなる時はあるのだが、その兆候がほとんど表れない。

彼の話を聞くと、今までゲームや漫画を手に取ると、異常なまでの集中力を見せていたと言われることが何度か合ったらしい。

その情熱が、勉強に向いた。

もし吉井君が振り分け試験を受けていたら首席になっていた可能性は低くない。代表の点数は聞いているが、正直今の吉井くんと互角ほどだろう。

振り分け試験の件で先程、霧島さんから欠席の謝罪を受けたが、それは別に気にしていないといっておいた。霧島さん本人は、半年間も教師役に呼んでおいたのに自分のせいで吉井君がFクラスになってしまったと思っているのだろう。

寂しい気持ちが無いと言えば嘘にはなるが、全く無駄になったというわけではない。教師役を努めたことで、自分たちも成績が二回りほど上がったのだ。人にわかりやすく教えるためには、まず自分がしっかり理解していないといけない。教えていくに従い、なんとなくで覚えていた箇所がどんどん無くなっていった。

吉井君には越されてしまったが、自分の成績向上もあり、そんなに大きくは離されていない。遠くないうちに追い抜いてみせるさ、と思いながら、模擬戦を観戦する。

状況は、明らかに吉井君有利だ。開始から5分が経ったが、吉井君の点数にはほとん

ど変化がない。対して代表の点数は既に２００点以上削られている。
「だが、吉井くんは勝てないだろうな」
ぼそり、と呟く。点数の高さ、操作技術、勢い・・・・・・それら全てをひっくり返す物がある。
代表の召喚獣が大きく後ろに吹き飛ばされる。吹き飛ばされながら、
確かに笑った。

『観察処分者』の仕事は、教師の手伝いだ。

もちろん、テストの採点とかではなく、嵩張る書類の運搬が主な内容となる。科学が発展したとは言え、さすがに全て電子化するというのは無理がある現代、テストや教科書、資料に関しては全て紙媒体だ。

3階建ての校舎において、様々な学年、クラスへの届け物となると、少人数では時間がかかってしまう。懲罰の意味合いがあるとは言え、観察処分者を長時間拘束するのは学問の趣旨に合わないという意見もある。話し合った教師らは文月学園ならではの案によって解決を図った。

それが、召喚獣操作による荷物運搬である。普段は実体のない召喚獣だが、設定を変更することで物に触れることが可能になるのだ。しかも、成人男性の数倍の力を持たせることが可能で、人間と違って疲れ知らずだ。

操作方法さえ覚えれば、誰でも簡単に力仕事が可能になる。1ヶ月の操作指導を経て、明久の召喚獣は文月学園中を縦横無尽に駆け回る存在となった。半年間、結構な頻度で雑用をすることで、生徒の中では1位と言っていいほどの操作技術を、彼は手に入れることができたのだ。

1年生の時に数回だけ操作実習を行っただけの他の生徒とは、天と地ほどの差がある。

点数と、操作技術。この2つだけを考えた場合、第二学年最強は明久と言って過言で

はなかった。

「はぁっ！」

掛け声に乗せて、鋭い一閃を放つ。力のこもったその攻撃は、相手の大太刀を真っ向から受け止め、そのまま押し切った。

『教科　日本史
Ａクラス　天王寺雄介（代表）　５５３点
ＶＳ
Ｆクラス　吉井明久　　８４１点』

戦況はこちら有利。点数の開きが、時間経過とともに徐々に大きくなってくる。

天王寺君もかなり食らいついてきてるが、攻撃は単調なものの繰り返しだ。下手というわけではない。慣れていないが故の、真っ直ぐな動きだ。だからこそ、読みやすい。

武器を巧みに操って、どんどんダメージを蓄積させていく。攻撃の殆どをしっかりと受け止め、カウンターも決めている。もはや点数差は、はっきりと優勢を意識できるほどに開いている。

だが、それなのに心から不安が消えない。

召喚獣を操作する傍ら、天王寺くんの姿を時々確認する。余所見するなと言われそうだが、相手の動きや表情を見るだけでも、次どんなことをしてきそうなのかを予想できる。それを鑑みて視線を送っているのだが・・・

（・・・ずっと笑っている？）

表情が、かなり明るいのだ。最初の衝突時こそ驚いた声を上げたが、それ以降はずっと笑みを絶やしていない。自分の攻撃が外れようと、ダメージを受けようと、一度たりとも悲観的な表情になっていないのだ。

どんな時でも笑顔を絶やさない。無意識のうちに、彼と、我らが代表、ゴリラを重ね合わせていた。すぐに思考を打ち切った。天王寺君とあの畜生を比べるなんて、なんて非常識なことをしてしまったのだろうか。あとで謝らないと。

召喚獣同士の、幾度目か分からない激突。そこで、大きな動きがあった。武器がぶつかりあった瞬間、天王寺くんの召喚獣が持つ大太刀が弾かれ、明後日の方向に飛んでいったのだ。

今日一番の歓声が、周囲から沸き起こる。それを全身に感じながら、袈裟懸けの要領

でサーベルを振り切った。
確かな手応えを感じた。

『教科　日本史
Ａクラス　天王寺雄介（代表）　２３７点
ＶＳ
Ｆクラス　吉井明久　　８２４点』

決まった。そう感じた。召喚獣を走らせながら確信を抱いた。６００点近くの差は優勢を通り越して勝勢だ。おまけに相手は武器なしの丸腰状態だ。まな板の上の鯉状態、どう考えても負けはない。

それなのに、天王寺君は笑っていた。笑いながら、右手を掲げた。
ハッとした。その腕には、文月学園生徒なら見慣れたものが装備されていた。
腕輪。４００点以上の証にして、戦況をひっくり返す切り札。
「ほんならいくでえええ！」
腕にはめられた腕輪が、アメジスト色に光るのが見えた。しかし、こちらの召喚獣は

既に武器の射程圏内まで踏み込んでいた。
（間に合え!!）
効果が出る前に斬る！勢いのままサーベルを振り下ろして、
召喚獣に当たった瞬間サーベルが止まった。
「・・・・・・・・・・？」
変な声が漏れた。生身の召喚獣相手に、力を込めた攻撃が通らなかった。
先程までと変わって、紫色のオーラを放つ、天王寺君の召喚獣。そのオーラが視えない障壁であるかのように、自分の攻撃が効かなかった。
我に返って、追撃をかける。
振るう。振るう。ひたすらにサーベルをふるい続け、その攻撃の全てが当たった。なのに、相手はびくともしない。足に太い根が張ってあるかのように、１ｍｍたりとも動かない。
『教科　日本史
Ａクラス　天王寺雄介（代表）　２３３点

ＶＳ

Ｆクラス　吉井明久　　８２４点』

十数度に及ぶ斬撃が、結果として表示される。全くといっていいほど、点数に変化がない。

埒が明かない。腕輪には腕輪だ。すぐさま腕輪を起動させる。

「いくよ・・・『潰れろ！』」

右手を掲げ、宣言を行う。フィールドに重力が満ちる。それはすぐさま指向性を持ち、相手の召喚獣に降りかかって・・・・・・・

『超変身』

瞬きした瞬間、その姿が消えた。一瞬、青色の残滓の錯覚が見えた。